

日本応用心理学会

# 第37回大会発表論文抄録

1970年11月



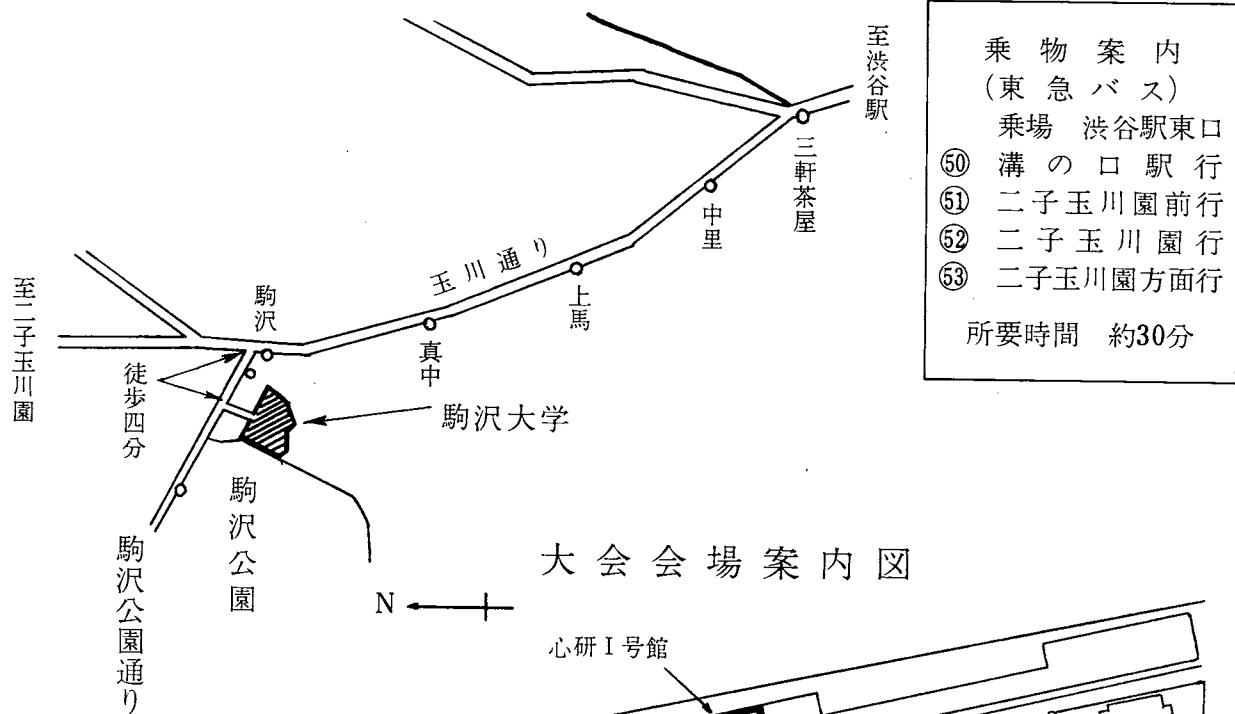
日本応用心理学会

# 第37回大会発表論文抄録

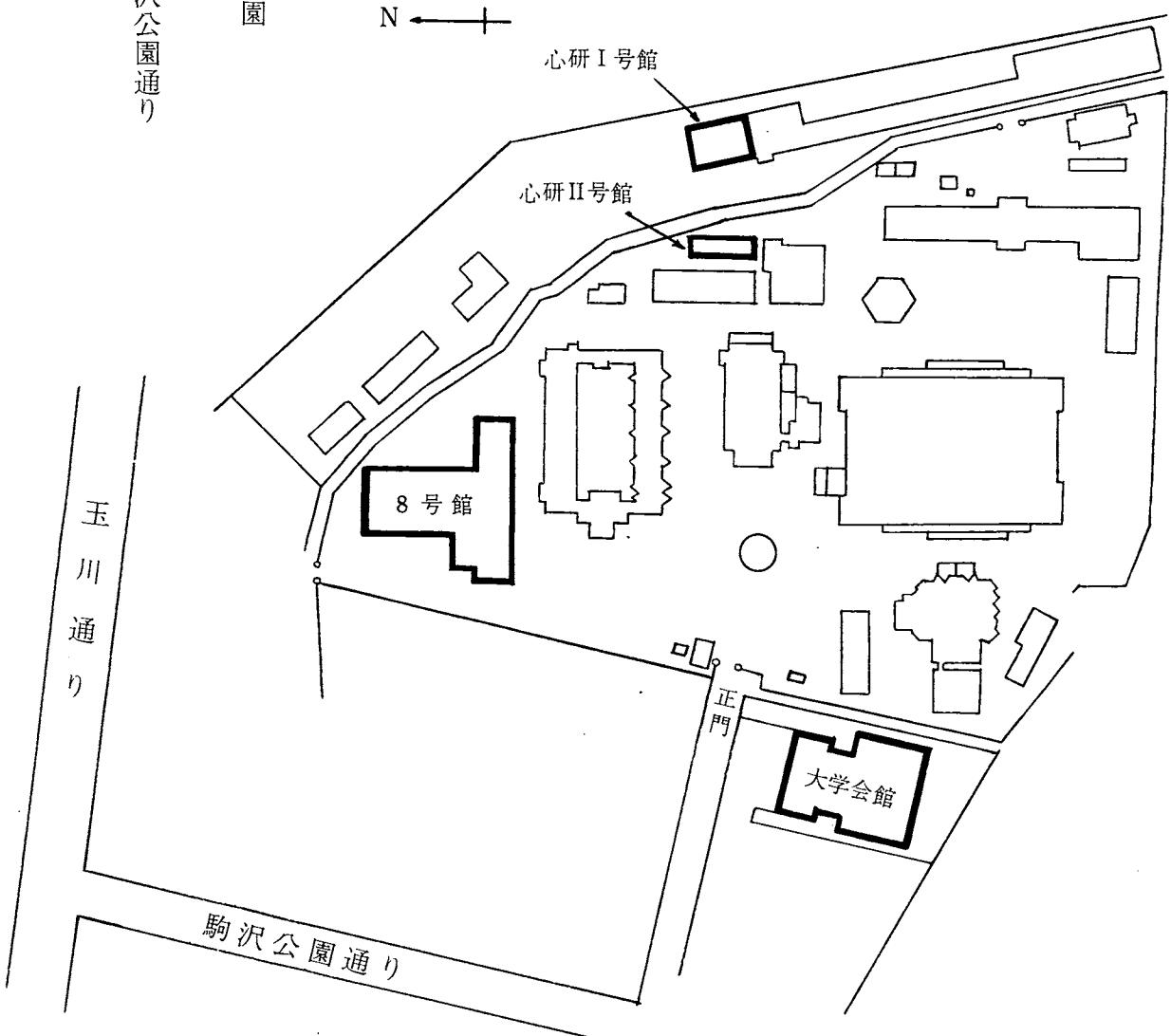
1970年11月

駒 沢 大 学

## 大会会場付近交通案内図

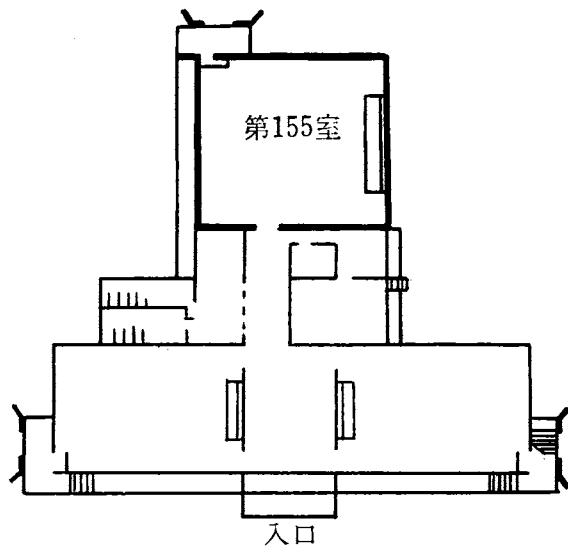


## 大会会場案内図

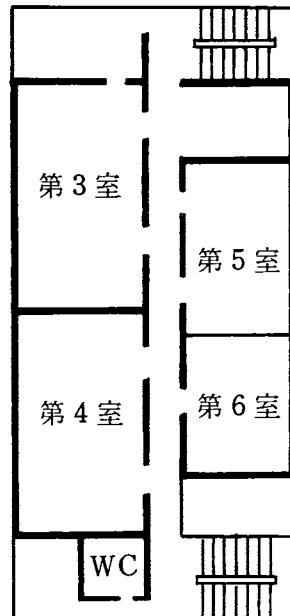


# 研究発表、シンポジウム、呼吸研修会会場案内図

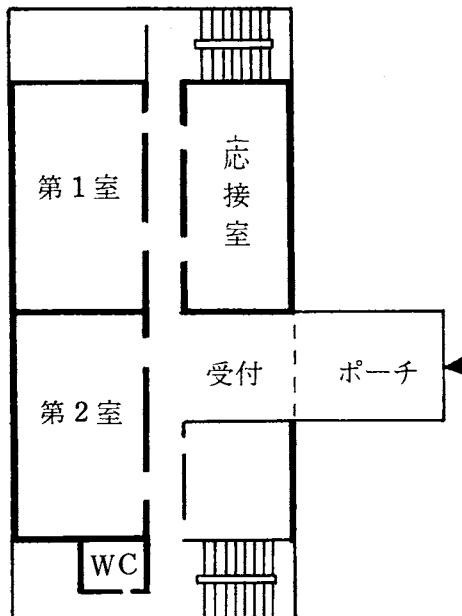
|            |         |                      |
|------------|---------|----------------------|
| 個人研究発表会場   | 22日午前   | 第1、2、3、4、5、6室        |
| シンポジウムⅠ会場  | 22日午後   | 2階大会議室               |
| シンポジウムⅡ会場  | 22日午後   | 第3室                  |
| シンポジウムⅢ会場  | 23日午前   | 8号館第155室             |
| 公開シンポジウム会場 | 23日午後   | 8号館第155室             |
| 運営委員控室     | 22日、23日 | 応接室                  |
| 会員控室       | 22日午前   | 2階大会議室、22日午後、23日 第2室 |
| 大会本部       | 22日午前   | 第1室右隣、22日午後、23日、第1室  |
| 呼吸研修会会場    | 21日     | 2階大会議室               |



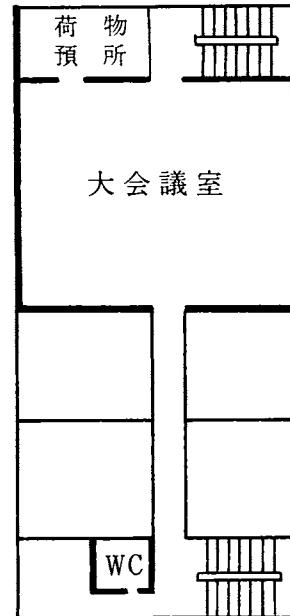
8号館



大学会館3階



大学会館1階



大学会館2階

## 参会者へのご案内

### (1) 受付

日時 11月22日(日)・23日(月) 9:00より受付を行います。

|    |                   |        |
|----|-------------------|--------|
| 諸費 | a 正会員大会費          | 1,000円 |
|    | b 臨時会員大会費         | 1,000円 |
|    | c 学生会員大会費(正会員を除く) | 500円   |
|    | d 写真(希望者のみ送料とも)   | 200円   |
|    | e 懇親会費(希望者のみ)     | 1,000円 |

諸費支払は、論文集に綴込みの諸費支払票の必要事項に○印を付し、氏名ご記入の上、受付にお出し下さい。会費支払済の方へ会員章をさしあげますので会期中必ずつけて下さい。

### (2) 案内・掲示

大会のご案内は、大会の係員(黄色の胸章をつけています)がいたします。必要事項は掲示致します。

### (3) 会場

(発表会場、会員休憩室、荷物預室、本部)は図示した通りです。

### (4) 懇親会

会費 1,000円

1月22月17:30より駒沢大学、大学会館で行います。

#### 皆へのご注意

(1) 研究発表は、各室ごとに座長の指示に従って行なって下さい。

(2) 発表時間は、10分。

(3) 合図は、発表開始後7分に1鈴

発表開始後9分に2鈴

発表開始後10分に3鈴(演者交替)とします。

(4) 発表者交替の折、つぎの発表者は、次回発表者席について、用意しておいてください。

(5) 発表資料(図表、プリント、スライド、テープレコーダー)は、各室の発表開始前に、各室準備係にお渡し下さい。(発表室名、番号、氏名を記入のこと。)

(6) 発表者は全口頭発表の終了後に行われる集中討議に参加して下さい。

(口頭発表と集中討議への参加をもって、大会発表と認めます。)

# 大　　会　　日　　程

1 大会前日(11月21日土曜日)16:30時より で運営委員会を行ないます。

## 2. 大会日程表

| 第1日 11月22日(日)   |             |        |        |           |      |           |
|-----------------|-------------|--------|--------|-----------|------|-----------|
|                 | 午前 個人発表     |        |        | 午後 シンポジウム |      |           |
| 時間<br>室名        | 9.00        | 12.30  | 1.30   | 3.20      | 3.30 | 5.20 5.30 |
| 1 産業；人間工学；検査；適性 | 記念写真撮影。後昼休み | 現代社会   | 現代社会   | 懇親会       |      |           |
| 2 臨床相談、特殊       |             | と教育    | と教育    |           |      |           |
| 3 教育；学習         |             | 第1部    | 第2部    |           |      |           |
| 4 教育；学習、社会・文化   |             | 人間と    | 人間と    |           |      |           |
| 5 人格 I          |             | 「システム」 | 「システム」 |           |      |           |
| 6 人格 II         |             | 第1部    | 第2部    |           |      |           |

| 第2日 11月23日(月) |                       |          |      |                          |   |  |
|---------------|-----------------------|----------|------|--------------------------|---|--|
|               | シンポジウム                |          |      | 午後 公開シンポジウム<br>応用心理学の諸問題 |   |  |
| 時間            | 午前 シンポジウム<br>禅と主体性の回復 | 12.30    | 1.00 | 2.00                     | 5.00  |  |
| 禅と主体性の回復      | 昼<br>休<br>み           | I        | 総    | 会                        | I 現代社会と教育<br>(1) 義務教育の問題<br>(2) 大学教育の問題<br>II 人間とシステム<br>(1) 行動とシステム<br>(2) 意識の形成<br>III 禅と主体性の回復 |  |
|               |                       | 禅と精神療法   |      |                          |   |  |
|               |                       | 禅と精神身体医学 |      |                          |   |  |
|               |                       | 禅と死の概念   |      |                          |   |  |
|               |                       | 禅と創造性    |      |                          |   |  |
|               |                       | 禅と人格の問題  |      |                          |   |  |

## ご案内

### 呼吸療法・呼吸訓練法の理論と実際の研修会

日本応用心理学会 後援

呼吸療法・呼吸訓練法研究会 主催

既報（第2号通信）でお知らせしました呼吸療法・呼吸訓練法の理論と実際の研修会は多数の方々のご賛同を得まして、予定通り、下記の日程で実施致します。

尚、まだお申込みになつていない方でも、参加ご希望の方は、当日受付ますので、お出で下さい。

日時 昭和45年11月21日（土）

9:30より17:00まで

場所 東京都世田谷区駒沢1丁目 駒沢大学大学会館

会費 日本応用心理学会正会員及び臨時会員 2,000円

学生会員 1,000円

テキスト代 500円

#### 研修内容

心理学から見た呼吸療法・呼吸訓練法

駒沢大学教授

文学博士 秋重義治

医学から見た呼吸療法・呼吸訓練法

駒沢大学教授

医学博士 長嶋長節

実習指導 武藏野精神病院

座間味宗和

その他数名

## 諸 費 支 払 票

| 領 収 証  | 領 収 証  |
|--|--|
| 大会会費   | 大会会費   |
| ※□正会員 1,000円                                     | ※□正会員 1,000円                                     |
| ※□臨時会員 1,000円                                    | ※□臨時会員 1,000円                                    |
| ※□学生会員 500円                                      | ※□学生会員 500円                                      |
| 写真代(送料共)   | 写 真 代 ( 送 料 共 )                                  |
| ※□ 200 円   | ※□ 200 円   |
| 懇親会費   | 懇親会費   |
| ※□ 1,000 円                                       | ※□ 1,000 円                                       |
| 総 計  | 総 計  |
| ※ 氏名<br>昭和45年11月 日<br>日本応用心理学会第37回大会委員長<br>秋重義治印 | ※ 氏名<br>昭和45年11月 日<br>日本応用心理学会第37回大会委員長<br>秋重義治印 |

注：※の個所には必要事項をあらかじめご記入ください。

## 産業、人間工学、検査、適性(第1室)

司会 金平文二 松本 洋

- |       |    |   |                       |               |
|-------|----|---|-----------------------|---------------|
| 9.00  | 1  | 職務満足の規定要因について<br>—Dスコアによる分析—                | イズミ・リサーチセンター          | 西川 一廉         |
| 9.10  | 2  | 管理者適性検査作成に関する<br>研究 その1.管理者適性の<br>因子分析的研究—  | 日本リクルート・大沢 武志<br>センター | 増山 春美         |
| 9.20  | 3  | 管理者適性検査作成に関する<br>研究 その2.管理者適性検<br>査の妥当性の研究— | 日本リクルート・増山 春美<br>センター | 大沢 武志         |
| 9.30  | 4  | 2 色配色における色彩の誘目性                             | 中京大学文学部               | 神作 博          |
| 9.40  | 5  | 工場災害者の心理学的研究④<br>—クレンマンの安全適性検査<br>について—     | 新日鉄八幡製鐵<br>所病院        | 境 知厚          |
| 9.50  | 6  | 産業における管理監督者能力<br>の評価に関する研究                  | 東京家政大学<br>産業心理研究センター  | 金平文二<br>片平信子  |
| 10.00 | 7  | 集団決定によるモラール向上に<br>ついての実証的研究                 | 日本経営士会                | 石津 元          |
| 10.10 | 8  | 作業性格の時代的推移<br>—作業性格検査(41)—                  | 適性研究所                 | 板倉 善高         |
| 10.20 | 9  | 大学生の企業における人事管理<br>に対する意識について                | 高崎経済大学                | 宮本 昇          |
| 10.30 | 10 | 新労働省適職判定基準による<br>適職判定実例                     | 社団法人<br>雇用問題研究会       | 松本 洋          |
| 10.40 | 11 | 事故多発者スクリーニング用<br>人格質問紙について                  | 茨城大学                  | 菊地哲彦<br>鈴木由紀生 |
| 10.50 |    | 集中討議  |                       |               |

臨床相談、特殊(第2室)

司会 飯塚銀二 渡辺 勉

- |       |    |  |   |
|-------|----|--|---|
| 9.00  | 1  | 関係行為療法に関する一考察                                    | お茶の水女子大学 永山由紀                               |
| 9.10  | 2  | 心身障害児(者)に各種療法<br>を試みて                            | 昭島市立成隣小学校・高橋哲也<br>都立府中療育センター 岸中建一           |
| 9.20  | 3  | 脳性マヒ者の呼吸作用(1)<br>—呼吸パターンを中心に—                    | 長崎県立女子短大 松本 蕃                               |
| 9.30  | 4  | 相互作用過程の分析カテゴリ<br>ーに関する研究                         | 武藏野大学 渡辺 勉<br>人文学部                          |
| 9.40  | 5  | 里親子関係について<br>III 里子について                          | 千葉県中央児童 高橋宣昭<br>相談所 他9名                     |
| 9.50  | 6  | 里親子関係について<br>IV 里親について                           | 千葉県銚子児童 仁科正行<br>相談所 他9名                     |
| 10.00 | 7  | 教育評価に関する一研究(その10)<br>—その原理と方法についての試み—            | 目黒区立 岸本英男<br>向原小学校                          |
| 10.10 | 8  | ゲゼル行動発達検査にみられた<br>難聴児と精神薄弱児の比較                   | トキワ松女子美術 大脇美恵子<br>短期大学                      |
| 10.20 | 9  | 少年非行における有害環境<br>排除の課題一世論の動向                      | 明治大学 三原憲三                                   |
| 10.30 | 10 | 施設不適応少年に対する処遇<br>体系の組み立て方について(I)                 | 多摩少年院 長谷川孫一郎                                |
| 10.40 | 11 | 家事調停における離婚問題の<br>心理的分析(第2部)<br>一性的不調和による夫婦関係の破綻— | 東京家裁。中原尚一<br>早稲田大学 伊藤安二<br>神奈川県立 関力<br>栄養短大 |
| 10.50 | 12 | 慢性アレルギー性皮膚症患者の人格<br>像(その1),慢性麻疹患者について            | 千葉大学 内海滉                                    |
| 11.00 | 13 | 体験過程 Experiencing に<br>於ける昭合枠の転移                 | 東京農大。飯塚銀次<br>日本女子体育大 岸田博                    |
|       |    | —カウンセリング過程における<br>人格変容の研究(6)—                    |   |
| 11.10 |    | 集中討議   |   |

教育、学習 I (第3室)

司会 山根 薫 広井 甫

|       |    |   |  |
|-------|----|---|--|
| 9.00  | 1  | 運動能と言語との連関性に関する研究—児童期を中心として—                | 早稲田大学 三島二郎<br>教育学部。守屋国光  |
| 9.10  | 2  | 精神テンポに関する基礎的研究(第39報告)                       | 早稲田大学教育学部 三島二郎<br>早稲田大学文学部 浅井邦二<br>大森第六中学校 望月稔<br>早稲田大学教育学部。藤田道明 |
| 9.20  | 3  | 親と子の対話                                      | 立正女子大学 山根 薫<br>埼玉大学教育学部 長塚和彌                                     |
| 9.30  | 4  | 小集団活動の研究<br>—関係構造に関する一考察—                   | お茶の水女子大学 大井晴美<br>児童臨床研究室   |
| 9.40  | 5  | 小集団活動の研究<br>—交差教育法理論に関する一考察—                | お茶の水女子大学 赤井美智子<br>児童臨床研究室  |
| 9.50  | 6  | ゾンディ。テストの研究：<br>平均的プロフィルについて                | 近畿大学 広井 甫  |
| 10.00 | 7  | 書きことばの発達に関する一研究(II)                         | 福岡教育大学 横山正幸  |
| 10.10 | 8  | 3才児保育に関する基礎的研究(第2報)<br>—3才児観及び保育者の資質を中心として— | 東京家政大学。後藤嘉奈子<br>岡山大学 森重敏   |
| 10.20 | 9  | 育児語に関する一研究(第2報)<br>2才児、3才児の母親の場合            | 東京家政大学 加藤綾子  |
| 10.30 | 10 | 児童における心身のエネルギーについて(3)                       | 国分寺市立第一小学校 竹原昭典  |
| 10.40 | 11 | スライドで映写された数字と文字の読みやすさ(Legibility)(3)        | 信州大学 柴田徹<br>教育学部   |
| 10.50 | 12 | 児童保育科における学生の意識調査(1)                         | 東京家政大学。石黒英子<br>宇津木貞子<br>大滝ミドリ                                    |
| 11.00 | 13 | 児童保育科における学生の意識調査(2)                         | 東京家政大学。宇津木貞子<br>石黒英子<br>大滝ミドリ                                    |
| 11.10 | 14 | 児童保育科における学生の意識調査(3)                         | 東京家政大学。大滝ミドリ<br>宇津木貞子<br>石黒英子                                    |
| 11.20 |    | 集中討議  |  |

教育、学習、社会、文化(第4室)

司会 葛谷隆正 藤野藤俊

|       |    |                            |                |        |
|-------|----|----------------------------|----------------|--------|
| 9.00  | 1  | 授業評価簡易テーブル(試案)             | 山口県教育研修所       | 上山 忠男  |
| 9.10  | 2  | 人物とその属性に対する態度              | 熊本大学<br>教育学部   | 藤野藤俊   |
| 9.20  | 3  | 熊本県漁村地区青少年の性差<br>より見た宗教的関心 | 熊本大学<br>教育学部   | 葛谷 隆正  |
| 9.30  | 4  | 「もの」の価値意識に関する<br>因子分析的研究   | 武野美術大学         | 千々岩 英彰 |
| 9.40  | 5  | 学校における教育相談                 | 山梨県立教育研究所。甲斐志郎 |        |
|       |    | 授業中における教師の態度               | 山梨県立韮崎高校 清水喜平  |        |
|       |    |                            | 韮崎市立清哲小学校 横森義隆 |        |
| 9.50  | 6  | 航空機騒音の心身に及ぼす影<br>響 V-1     | 日本女子大学。沓掛裕子    |        |
|       |    | 情緒への影響                     | " 児玉省子         |        |
|       |    |                            | " 三村敬子         |        |
|       |    |                            | " 宮吉秀子         |        |
|       |    |                            | " 高橋澄子         |        |
| 10.00 | 7  | 航空機騒音の心身に及ぼす影<br>響 V-2     | 日本女子大学。宮吉秀子    |        |
|       |    | 聴覚について                     | " 児玉省子         |        |
|       |    |                            | " 三村敬子         |        |
|       |    |                            | " 畠掛裕子         |        |
|       |    |                            | " 高橋澄子         |        |
| 10.10 | 8  | 航空機騒音の心身に及ぼす影<br>響 V-3     | 日本女子大学。三村敬子    |        |
|       |    |                            | " 児玉省子         |        |
|       |    |                            | " 宮吉秀子         |        |
|       |    |                            | " 畠掛裕子         |        |
|       |    |                            | " 高橋澄子         |        |
| 10.20 | 9  | 授業開始時における生徒中心<br>方法の試みについて | 大阪女学院。山崎睦子     |        |
|       |    | 一カウンセリング方法の応用—             | 大阪大学 鶴田正一      |        |
|       |    | 人生相談の内容類型について              | 中京大学 結城錦一      |        |
| 10.30 | 10 | —新聞投書によるもの—                | 共立女子大学 高嶋正士    |        |
| 10.40 |    | 集中討議                       |                |        |

## 人 格 (1) ( 第 5 室 )

司会 大谷宗司 長田一臣

- 9.00 1 E S P と生理周期との関係(IV) 日本体育大学 長田一臣  
防衛大学校 大谷宗司
- 9.10 2 描画の発達にみられる中心の お茶の水津守真  
思想 — 描画による精神発達 女子大学  
の研究(2) —
- 9.20 3 音楽才能の遺伝と寿命の関係 国立音楽大学 佐瀬仁
- 9.30 4 調身調息調心に関する心理学 駒沢大学 秋重恭子  
的研究(103)  
— 精神発達に関する心理学  
的研究(1) —
- 9.40 5 調身。調息。調心に関する心 駒沢大学 香渡大玄  
理学的研究(97)  
坐禅における脳波の徐波化の変化  
に関する心理学的研究(2)
- 9.50 6 調身。調息。調心に関する心 駒沢大学 座間味宗和  
理学的研究(100)  
精神療法と禅に関する心理  
学的研究(2)
- 10.00 7 調身。調息。調心に関する心 駒沢大学 根岸美奈子  
理学的研究(102)  
— 歩行を中心とした動作と呼吸  
との関係に関する心理学的研究(2) —
- 10.10 8 調身。調息。調心に関する心 駒沢大学 中村尚志  
理学的研究(96)  
— 人格の変容に及ぼす調息の効果  
に関する心理学的研究(3) —
- 10.20 9 人の生き方に関する心理学的 駒沢大学・西田順造  
研究(12) // 秋重義治
- 10.30 集中討議

人 格 四 ( 第 6 室 )

司会 永沢幸七 中村昭之

- |       |    |   |        |             |
|-------|----|---|--------|-------------|
| 9.00  | 1  | 家庭の職業と人間形成<br>—自己評価と他人評価—                                     | 東京家政学院 | 永沢 幸七<br>大學 |
| 9.10  | 2  | 調身。調息。調心に関する心<br>理学的研究(104)<br>—調息の機能に関する生理、<br>心理学的研究—       | 駒沢大学   | 竹内 明眸       |
| 9.20  | 3  | 調身。調息。調心に関する心<br>理学的研究(106)<br>—特に禅定中の姿勢を中心として—               | 駒沢大学   | 牧 正興        |
| 9.30  | 4  | 調身。調息。調心に関する心<br>理学的研究(105)<br>—経行を中心とする<br>心理学的研究(1)—        | 駒沢大学   | 戸村 博之       |
| 9.40  | 5  | 調身。調息。調心に関する心<br>理学的研究(98)<br>自律訓練法の禅的修正に関する<br>心理学的研究(2)     | 駒沢大学   | 上野省一        |
| 9.50  | 6  | 調身。調息。調心に関する心<br>理学的研究(101)<br>催眠の行動に関する心理学的<br>研究(2)         | 駒沢大学   | 中村 完        |
| 10.00 | 7  | 調身。調息。調心に関する心<br>理学的研究(99)<br>—信の態度に関する<br>心理学的研究(2)—         | 駒沢大学   | 小野浩一        |
| 10.10 | 8  | 調身。調息。調心に関する心<br>理学的研究(94)<br>坐禅に関する心理学的研究(3)<br>—調身調息を中心として— | 駒沢大学   | 武井広平        |
| 10.20 | 9  | 調身。調息。調心に関する心<br>理学的研究(95)<br>摂化についての心理学的研究<br>(2)            | 駒沢大学   | 篠原英寿        |
| 10.30 | 10 | 調身。調息。調心に関する心<br>理学的研究(107)<br>叢林生活に関する心理学的研<br>究(1)          | 駒沢大学   | 中村昭之        |
| 10.40 |    | 集 中 討 議   |        |             |

## 職務満足の規定要因について

—Dスコアによる分析—

西川一廉

(イズミ・リサーチ・センター)

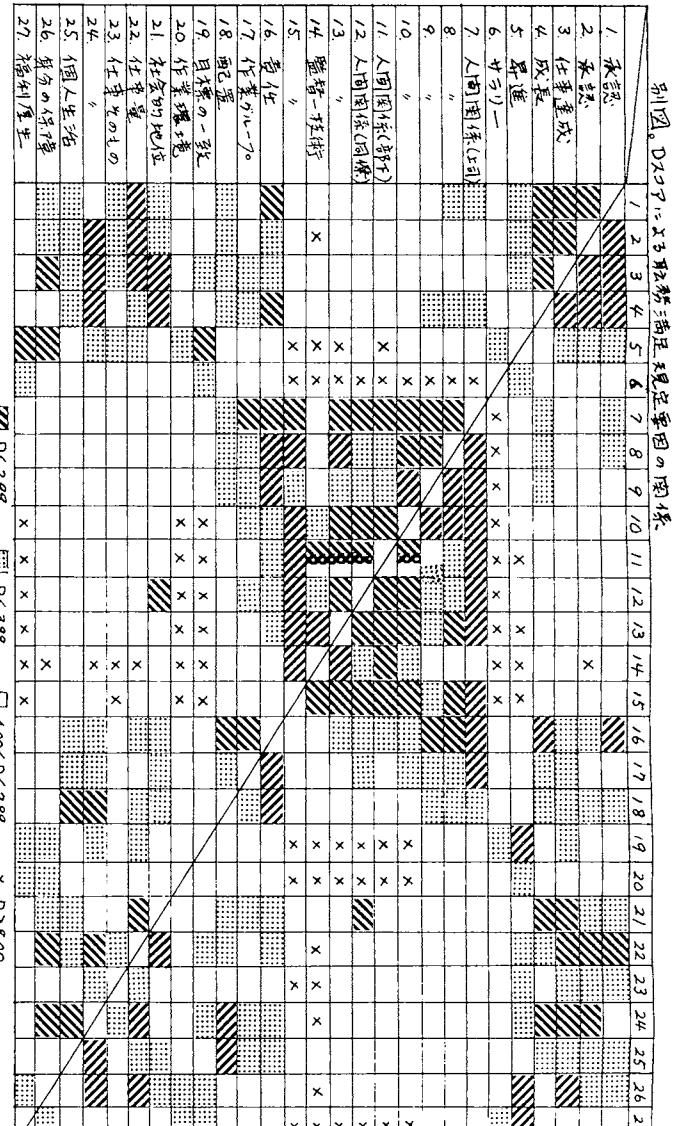
目的：職務満足は種々の要因によって影響されるが、それら諸要因間の関係を検討するのが本研究の目的である。

方法：ビッグストアの男女従業員（16～40才）1611人に對して職務満足度予備調査を施行した。調査は27項目から成るアンケート形式であったが、その内容は別図の通りである。各質問（例えば、「あなたの考え方や仕事ぶりが認められますか？」）に対して4点法で答えた。そして、これら27項目の各平均値に基づいて全体のプロフィールが描かれ、更に店や部ごとに分析された。

結果：こゝでは要因間の関係を明らかにするために、全体の平均値から要因間の距離を所謂Dスコアによって求め、Dマトリックスを作成した。Dスコアの小さい程、要因間の距離は小さく、類似関係にあると考えられるので、今、Dスコアが2.99以下、3.99以下、4.00以上の3基準を設け、更に8.00以上の反対関係を併わせ図示したのが別図である。

考察：まず、承認、仕事達成、成長、責任会社の社会的地位、配置、仕事量、仕事をもの、身命の保障の主として仕事の要因及び人間関係の要因の二つに分かれているのに気付く。しかし同時にこれらは責任要因によって媒介されている。また仕事と人間関係要因は関連せず、むしろ独立したものと考えられるのにサラリーと作業環境がある。反対関係として指摘されるのが人間関係に対するサラリー、目標の一一致、作業環境、福利厚生の諸要因である。尚、これらの関係は因子分析によって更に明らかになろう。

(連絡先) 松原市高見の里2-36



# 管理者適性検査作成に関する研究

## その1. 管理者適性の因子分析的研究

○大沢武志(日本リクルートセンター) 増山春美(日本リクルートセンター)

**目的:**企業組織における中堅管理者の適性を性格的な側面から、明らかにすることを目的とする。

**方法:**二社の中堅管理者を対象に性格検査を実施し、人事考課にもとづく適性評価を基準に上位群、下位群と設定し、全項目について両群に対する識別性を項目分析する。識別性の認められた項目について項目間の因子分析を行なう。

(1) **対象** 化学Y社、食品M社の中堅管理者(主としてライン業務担当の課長) 467名

(2) **性格検査** 従来の性格検査の心理学的尺度は無視して、管理者の性格的適性との関連の予想される質問項目を収集する。性格診断検査RPI、性格類型検査TI等の既存の質問紙法性格検査を参照し、517項目からなる質問紙を用意した。

(3) **基準変量** 被検者について、管理者としての成功度の評価を求めた。評定は、上位管理者および人事部門長による。評定項目は、仕事の管理面および部下の管理面、両者の総合の三項目、七段階に評定する。

(4) **項目分析** 総合評定の上位・下位約20%の者を選び出し、各項目ごとに、両群の応答状況を分析、X<sup>2</sup>検定を行なった。

(5) **因子分析** 項目分析の結果、有意性の認められた項目について、項目間の相関(tetrachoric)を算出し、さらに、因子分析(varimax法)を行なった。

(6) **調査期間** 543.11~12

**結果:**(1) **項目分析** Y社、M社および両社総合の三群について、項目分析を行なったが、それぞれの分析結果の間に共通の傾向が認められ、かつ、両社を総合した場合の上位、下位両群間の応答状況の差が、X<sup>2</sup>検定で有意(危険率10%)であった項目が、517項目中、197項目見出された。

(2) **因子分析** 有意差の認められた197項目について、varimax法により因子分析を行なった結果、10箇の因子を抽出したが、管理者の性格的適性という観点か

ら、解釈可能な因子が四因子見出された。結果の一部を第1~4表に示す。

第1表 オ1因子負荷量の高い項目例

| 質問項目                              | 負荷量  |
|-----------------------------------|------|
| 1. なにかをしようとすると迷うことが多い             | .620 |
| 2. 一人きりになりたいと思うことがよくある            | .578 |
| 3. 他の人にとやかくいわれることがいやで、しないことでもないです | .531 |

第2表 オ2因子負荷量の高い項目例

|                                   |      |
|-----------------------------------|------|
| 1. 友達といい、よい仕事をするときはあります、指図ねえ(おうだ) | .512 |
| 2. 何か懸念など計画する際、自分から立てやる(よろだ)      | .489 |
| 3. どちらかといえば、何にでも人一倍競争心を感じます       | .447 |

第3表 オ3因子負荷量の高い項目例

|            |         |      |
|------------|---------|------|
| 1. A. 同意する | B. 議論する | .574 |
| 2. A. 分析する | B. 同情する | .543 |
| 3. A. 安定   | B. 変化   | .513 |

第4表 オ4因子負荷量の高い項目例

|                              |      |
|------------------------------|------|
| 1. 人と会ったとき、適当な話題をみつけるのに骨が折れる | .393 |
| 2. だれとでも親しくなる                | .391 |
| 3. 知らない人と会うのは気が重い            | .373 |

以上の結果から、四因子をつきのように解釈した。

オ1因子: 性格的強靭性の因子(自我的強さ、自信度、非抑うつ性、自律性など)

オ2因子: 支配性の因子(対人接触における積極性、主導性、競争心、攻撃性など)

オ3因子: 決断性の因子(分析的、合理的、批判的確信性、態度的、意志的厳しさなど)

オ4因子: 社交性の因子(人間関係への円滑な順応性、対人適応性など)

問題点: ①はじめに選択した項目の範囲に左右されたりため、網羅性に欠ける②基準変量の評定の信頼性が十分とはいえない③標本による制約も考慮しなければならない。

(連絡先) 東京都千代田区神田錦町1~ 03(282)5811(代)

# 管理者適性検査作成に関する研究

## 一その2、管理者適性検査の妥当性の研究

大沢武志(日本リクルートセンター) ○増山春美(日本リクルートセンター)

目的：管理者適性検査が 能力・性格の両資質的側面から管理者の成功度を予測する検査として妥当性のある検査かどうかをM社に關して検証すること。

方法：(1)予測变量 管理者適性検査の測定内容はつきのとおり。①能力的側面：言語・非言語を総合した1検査 ②性格的側面：性格的強制性、決断性、社交性、性格的適性の5尺度 ③適性判定：能力・性格を総合して管理者としての適性を6つのパターンに分類

(2)基準变量 仕事の管理(計画、指示等)、部下の管理(指導、育成等)の両面の総合的な業績評価を基準变量とする。①M社：4段階評定 ②Y社：6段階評定 ③S社：能力パターン別に5段階評定

(3)対象 ①M社(食品製造関係)：在職の課長級の管理者298名 ②Y社(医薬品製造関係)：在職の課長級の管理者139名 ③S社(電気機器製造関係)：係長、係長代理格付候補者325名

(4)分析方法 ①基準との相関(M社・Y社) ②能力パターンと適性パターンとの関係を比較する。(S社)

結果と考察：(1)基準との相関(M社・Y社) 予測变量は性格的側面のみ実施し、基準との相関関係をみたものが表1である。M社は支配性、決断性、性格的適性と基準との相関は

表1. 相関係数表(M社・Y社)

| 尺度名    | M社<br>(N=298) | Y社<br>(N=139) |
|--------|---------------|---------------|
| 性格的強制性 | .089          | .126          |
| 決断性    | .318          | .314          |
| 支配性    | .234          | .105          |
| 社交性    | .129          | .059          |
| 性格的適性  | .257          | .252          |

は.1程度にとどまり、今回.2以上の相関がでたことは一応満足すべき結果といふことができる。企業間の差はあっても、2社に共通して決断性や性格的適性については、かなり安定した尺度であるといえよう。特に、性格的適性は管理者としての総合的な情緒的側面を測定しており、管理者の育成のため、人材の早期

発見にある程度の有効性が期待できる。

(2)能力パターンと適性パターンとの関係比較(S社)

能力パターンは大きく3つに分類される。

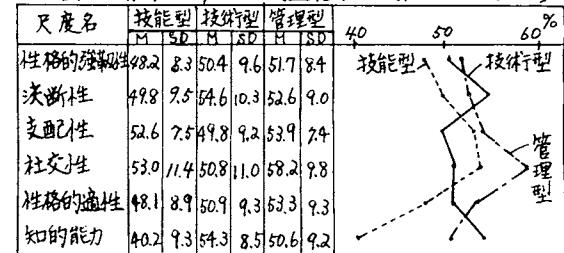
技能型：技能等により会社に貢献するタイプ。

技術型：専門知識(技術)により会社に貢献するタイプ。

管理型：他人の能力を総括して会社に貢献するタイプ。

各タイプごとの平均値・標準偏差を求め図示したものが図1である。

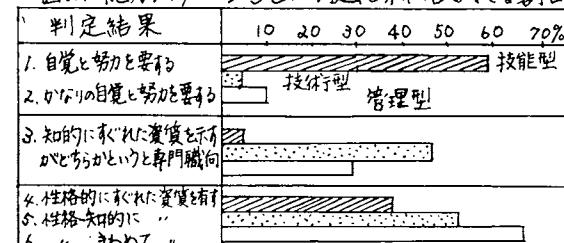
図1. 能力パターン別適性傾向(S社 N=325)



明らかに能力パターンにより適性傾向のちがうことがわかる。技術型と管理型は社交性、支配性について逆の傾向を示している。また、能力についても、専門職の技術型の方が高い。ギゼリ(E.E.Ghisselli)の研究にもあるように、普通以上であれば、特に高い知的能力は必要がないことを示唆している。

また、適性判定の結果と各パターンごとに各段階に含まれる割合は図2のとおりである。各パターンごとの特徴がこの結果からも裏づけられている。

図2. 能力パターンごとの判定結果に含まれる割合



(連絡先) 東京都千代田区神田錦町1-1 03(292)5811(代)

# 2色配色における色彩の誘目性

神 作 博  
(中京大学文学部)

**目的:**従来の色彩の誘目性に関する研究は、視野内に何色かの色刺激を提示する事態において行なわれてきただが、実験計画上、隣り合う色同志の色彩効果(対比現象等)は相殺されるよう配慮されており、結果的には単色の誘目性を測定していた。

**標識、広告、ポスターなどの諸表示の彩色を考えると、実際には2色以上の色が隣り合って置かれることがほとんどであるので、本実験では複数配色の場合の方1段階として2色配色の事態における色彩の誘目性を測定することにした。**

**方法:**明室内で、被験者から50cm離れたところに縦47cm、横60cmの刺激提示台が置かれ、その中央に縦9cm、横12cmの刺激カードが提示される。刺激提示台は日色研製N6.5の灰色紙によって全体が覆われている。刺激カードはこれと同じ灰色紙で包まれてあり、中央に2m×2cmの正方形の色標2枚が横に並べて貼られている。色標はケイ光色3色、普通色7色の計10色であり、色標の組み合わせはケイ光色同志3対、ケイ光色と普通色との組み合わせ21対、普通色同志の組み合わせ21対、従って刺激カードの総数は45枚となる(空間誤差相殺のため実際には2倍のカードを使用)。予備実験により45枚のカードを上位誘目性群、中位誘目性群、下位誘目性群の3群に分け、各群ごとに実験を実施。各群について、被験者はランダムな順序で提示されるカードを見て、誘目性的程度を7カテゴリーにて評定する。評定の際には、2色配色全体から生じる誘目度を示すように数字がなされた。

**条件:**普通色は赤7.6R<sup>4.0</sup>/12.2(R)、黄赤0.7YR<sup>5.6</sup>/13.4(YR)、黄8.4YR<sup>7.0</sup>/11.4(Y)、黄緑0.4G<sup>5.4</sup>/11.8(GY)、緑1.4BG<sup>4.5</sup>/8.8(G)、青2.8PB<sup>2.9</sup>/11.2(B)、紫5.2P<sup>2.7</sup>/11.1(P)であり、ケイ光黄赤、黄、黄緑は普通色に対応する色彩のものである。照明は300lx以上の昼光であり、被験者は色覚正常な中京大学心理学科男女学生各15名ずつ、計30名。

**結果の処理:**各群について、各配色

ごとのカテゴリー別判断度数を求め、以下、Guilfordの系列範囲法の尺度化の手法により、各カテゴリーの幅を求める、次に、補間法を用いて各色の尺度値(Mc)を計算する。上位群と中位群、中位群と下位群とにそれぞれ共通に用いた色を手がかりとして3群の尺度を連結し、中位群のカテゴリー4を心理的零点と定める。この尺度を標準偏差を3、心理的零点を5とする標準尺度に変換する。

**結果:**上記の手順を経て算出された誘目性尺度値は表に示すとおりである。

全般的な傾向としては、ケイ光色同志の組み合わせの場合の誘目性が最も高く、次いで、ケイ光色と普通色との組み合わせ、普通色同志の組み合わせの順となる。2色の組み合わせにおける傾向を眺めてみると次のようないふが明らかとなる。(1)2色配色で誘目性の高いものは、1方に高明度の單色で誘目性の高いY、R、YRなどを含み、これが低明度の色と組み合わさった場合である。すなわち、明度対比の影響が看取できる。(2)普通色同志の場合、特に单色で誘目性の高いYとRの組が最高の誘目性を示す。(3)低明度の普通色同志は誘目性が低い。(4)1方がケイ光色の場合は同色同志、普通色同志の場合には類似の色の組の誘目性が低い。(本実験は平野稚代の協力によった。)

表

| 色(略号)  | 尺度値   |
|--------|-------|
| YB, GY | 9.14  |
| YB, Y  | 8.27  |
| Y, GY  | 8.12  |
| YB, B  | 7.41  |
| YB, P  | 7.19  |
| Y, B   | 7.13  |
| Y, P   | 6.73  |
| Y, R   | 6.46  |
| YB, GY | 6.45  |
| Y, G   | 6.42  |
| Y, GY  | 6.08  |
| YB, Y  | 5.89  |
| YB, R  | 5.88  |
| Y, YR  | 5.84  |
| YB, B  | 5.83  |
| Y, G   | 5.76  |
| Y, P   | 5.57  |
| YB, R  | 5.48  |
| YB, YR | 5.36  |
| Y, Y   | 4.93  |
| GY, YR | 4.72  |
| Y, Y   | 4.66  |
| GY, GY | 4.43  |
| GY, G  | 4.20  |
| R, Y   | 2.43  |
| Y, P   | 2.03  |
| Y, B   | 1.86  |
| Y, G   | 1.65  |
| Y, GY  | 1.48  |
| Y, YR  | 1.38  |
| R, B   | 1.00  |
| R, GY  | 0.95  |
| YR, P  | 0.67  |
| YR, GY | 0.63  |
| YR, B  | 0.63  |
| YR, R  | 0.26  |
| R, G   | 0.19  |
| GY, B  | 0.13  |
| B, P   | 0.09  |
| GY, P  | 0.00  |
| YR, G  | -0.01 |
| R, P   | -0.06 |
| GY, G  | -0.52 |
| G, P   | -0.89 |
| G, B   | -1.67 |

○はケイ光色

連絡先: 名古屋市昭和区八事本町中京大学心理学科内

# 工場災害者の心理学的研究(II)

—クレンマンの安全適性検査について—

境 知 厚

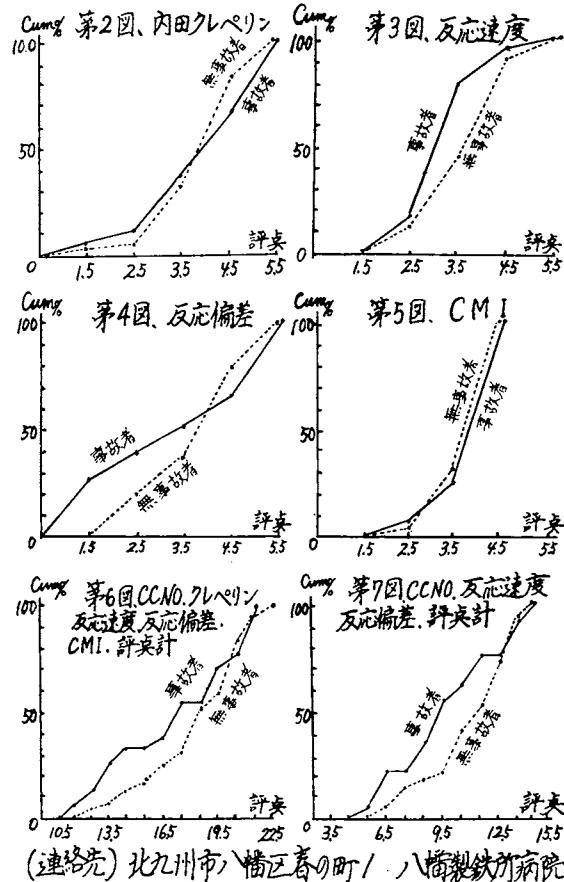
(新日鐵八幡製鐵所病院 労働医学研究課)

目的: 第1報(日本応用心理学会第36回大会論文抄録P.23、日本産業医学会第43回総会講演集P.89)では災害者を予測するため製鉄各工場の災害者に13種類の心理検査を行ない、有効な検査として5項目を選択し、災害者の68%と無災害者の70%を弁別した。今回はこれをクレンマンに適用したので報告する。

方法: このテストパッケージはCCN6、内田クレペリン、反応速度、反応偏差、CMIからなる。これを鋼板工場のクレンマン61名を対象として検査した。基準として過去3年の事故歴を用い、事故群と無事故群にわけた。事故回数は1名を除けば1回のみであり、頻発者とはいえない。内容は自己責任11名、共同責任6名、不可抗力1名の計18名で事故発生率は29.5%である。

結果と考察: (1) CCN6はあわて型になるほど事故者が多いが有意差はない。特性図から危険傾減と安全傾減にわけた場合も同様の傾向を示した。(2) 内田クレペリンは定型と非定型に大別したとき事故との間に差がない。(3) 反応速度は事故者が反応のおそい側によつているが有意差はない。(4) 反応の偏差は無事故者が得点の高い側により、事故者は高い所と低い所に多く( $P<0.05$ )U字形を示す。(5) CMIと事故との関連は殆んどみられない。これは事故者が負傷者ではなく加害者の立場にあるため、心身の訴えが無事故者との間に差がないと思われる。(6) 各テストの評点合計は平均値間に有意差がないが、5段階評定では評点がよいほど無事故者が多い( $P<0.1$ )。(7) 全テストの5項目を使用した場合、合格率が高くなると弁別は劣り、低い所で弁別はよい。すなわち合格率14のとき事故者の28%を不合格、無事故者の95%を合格とした( $P<0.05$ )。(8) 各テストの弁別力を比較すると、CMIとクレペリンが劣り、CCN6、反応速度と偏差がよい。これらの3項目を用いた場合は比較的よい分離を示す。すなわち合格率を10としたとき事故者の56

%を不合格とし、無事故者 Cum% 第1図、CCN6 の79%を合格とした( $P<0.05$ )。 (9) 以上からクレンマンの事故傾向の予測としては低素質者に対するある程度可能である。また3項目によるのが弁別もよく、約30分で実施できる。



(連絡先) 北九州市八幡区春の町1-1 八幡製鐵所病院

# 産業における管理監督者能力の評価についての研究

○ 金平文二  
(東京家政大学)

方平信子  
(産業心理研究センター)

目的: 企業における管理監督者の能力を構成してい  
る知的側面、性格的側面、態度的側面の諸特性を評価  
するに、人事検査、心理テスト、人事考課などの各  
種の測定手段が通用されていく。この研究では以上の  
うち、管理監督者能力の知的側面について測定評価す  
るためにいくつかの人事検査を適用し、その妥当性を検  
証することにより、管理監督者能力の評価の客觀性を  
高めよう方策を探求しようとすることである。

方法研究の対象 A食品会社の管理職候補者125名  
(2) 実施期日 昭和44年1月～昭和44年11月  
(3) 用いた人・事検査

- ・知的適応性検査 (IAT) 人物に対する一般的な  
理解力、新しいことが不斷に生じたる諸問題を効  
率的に解決していく能力、新しい事象に直面し  
てそれを最も合理的に通用してどう順序立てて  
く適応的管理監督者として知的諸活動を進めて  
いくうえにいく基礎的な知的能力を評価する。  
判断推論力、資料解釈力、文章理解力。30題。
- ・管理判断力検査 (MJT) 管理的機能を果すう  
ものとして必要となる業務場面における判断  
の適応をみるうとする。すなわち管理全般に対する  
理解の深さ、理解的情勢における  
正確な判断力、人間関係における管理のし  
かたをみる。組織管理、取扱管理、教育訓練、  
作業管理、勤務実績。30題。

- ・行動傾向診断検査 (MST) 日常の業務を推進し  
ていくにあたって、その取扱行動が業績追求的  
であるか、人間関係指向的であるかなどをう  
なづけて、その行動傾向を診断するうとする。  
人間指向的業績追求型、業績追求的・人間指向型、  
業績追求型、人間指向型。30題。

- ・管理類型診断検査 (MTT) 管理者の行動  
のタイプを次元格子によって診断するうとする。  
管理効果の低いタイプ: 無関心型、温情型、

強制型、妥協型。

管理効果の高いタイプ: 官僚型、搭撲型、自信  
型、管理型、6つある。

(4) 基準 人事考課 (過去3カ年にわたり人事考課結果  
の平均評定値) 適性判定 (管理者としての適格性  
を評定)。

結果: 各検査の全体、分野別の平均差、標準偏差、  
平均正答率については省略する。

知的適応性検査 (IAT) 管理判断力検査 (MJT)  
と基準との相関は次のとおりである。

i. 人事考課による妥当性

表-1. 各検査・人・事考課相関係数 (r)

| 各検査・人・事考課 | IAT   | MJT   | 人事考課 |
|-----------|-------|-------|------|
| IAT       |       |       |      |
| MJT       | 0.537 |       |      |
| 人事考課      | 0.506 | 0.879 |      |

$$R_{1-23} = 0.563$$

ii. 適性判定による妥当性

表-2. 各検査・適性判定相関係数 (r)

| 各検査・適性判定 | IAT   | MJT   | 適性判定 |
|----------|-------|-------|------|
| IAT      |       |       |      |
| MJT      | 0.537 |       |      |
| 適性判定     | 0.600 | 0.589 |      |

$$R_{1-23} = 0.678$$

iii. MST と人事考課との相関は 0.33, MTT と  
人事考課との相関は 0.31, どちらも低めである。

考察: (1) 管理監督者能力のうち、知的側面はつ  
いて各種の検査を実施したが、知的適応性検査 (IAT)  
と管理判断力検査 (MJT) については妥当性のアシッド  
を検証された。

(2) 管理行動傾向診断検査 (MST)、管理類型診  
断検査 (MTT) については、検査開発の内容、測定目  
標について検討を加えていく必要がある。

(連絡先) 東京家政大学 Tel. 961-5226 金平研究室

# 集団決定によるモラール向上 についての実証的研究

石津 元  
(日本経営士会)

**目的:** この実験の目的は、働く小集団の運営をものぐるーずのメンバーたちの“集団決定”(group decision)に任せることによって、グループのメンバーたちに、「われわれの職場」という高度の「参加意識」を持たせ、自治の欲求すなわち自我の欲求を満足させて、モラールを向上させることを実証的に検討することである。

**方法:** 職場の仕事の改善、仕事のやり方、職場のルールなどを、上から押しつけるのではなく、働くグループのメンバーたちが、グループ・ミーティングの席上、全員の集団討議(group discussion)を経て、集団決定するようにしあげた。

例えば、つきのようだ。グループ・メンバーたちに語りかけた。

「みなさん5人の仕事を、どうやつたら最も能率よくできるか、みなさんのいい知恵を出し合って、仕事のやり方を再検討して、みなさん自身で印刷室の仕事をのやり方を決めてみませんか。」

**結果:** 昭和44年2月から6ヶ月わたる、印刷グループの5人の従業員を対象として試みられた、“集団決定によるモラール向上実験”的効果を測定するため、モラール・サーベイを行い、これを実験前のそれと比較してみると、下記の図・表がみえるおり、印刷グループのモラールが著しく向上したことことが確認された。

**考察:** この実験結果から判るようだ、小集団に対する、“集団決定(group decision)によるモラール向上策”は、対象となる従業員たちが、この実験グループを見られるようだ、仲間同志互い助け合う人

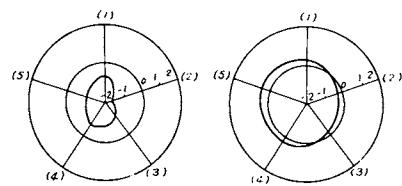
間関係ができあがれば、必ずその効果をあげうると思はれる。

第3表 印刷グループモラール得点の増加

| 質問         | 4.4.2.27調査 |    |      | 4.4.7.18調査 |    |       | モラール得点の増減<br>(△) |
|------------|------------|----|------|------------|----|-------|------------------|
|            | 得点合計       | 人数 | 平均点  | 得点合計       | 人数 | 平均点   |                  |
| (1) 仕事の興味  | -4         | 5  | -0.8 | 2          | 6  | 0.33  | 1.13             |
| (2) 仕事の結果  | -9         | *  | -1.8 | -1         | *  | -0.17 | 1.63             |
| (3) 仕事の将来性 | -6         | *  | -1.2 | -1         | *  | 0.17  | 1.03             |
| (4) 仕事の順序  | -4         | *  | -0.8 | 2          | *  | 0.33  | 1.13             |
| (5) 仕事の評価  | -5         | *  | -1.0 | 3          | *  | 0.50  | 1.50             |
| 計          | -28        | *  | -5.6 | 5          | *  | 0.83  | 6.43             |

第5表 印刷グループ・メンバーのモラール向上  
5-1: メンバー全員

|      | 年齢 | モラール得点   |          | モラール得点の増減 |
|------|----|----------|----------|-----------|
|      |    | 4.4.2.27 | 4.4.7.18 |           |
| 横田 修 | 25 | -10      | -3       | 7         |
| 川尻嘉昭 | 22 | -9       | -1       | 8         |
| 船坂康一 | 27 | -6       | -1       | 5         |
| 黒崎弘治 | 38 | -3       | 1        | 4         |
| 横田泰邦 | 26 | 0        | 6        | 6         |

2-1: 4.4.2.27調査 2-2: 4.4.7.18調査  
第2図：印刷グループのモラール比較図表

(連絡先) 東京都東村山市 萩山町 3-100

# 作業性格の時代的推移

## 作業性格検査(41)

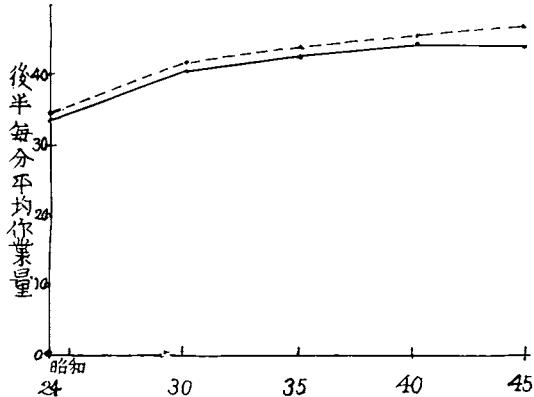
板倉善高  
(適性研究所)

目的：吾々の作業能力とか性格は時代の推移や環境の変化に伴って変ることは予想に難くないのであるが、クレッペリン式の累加作業においては、どのように変っているかを調査したるものである。

調査方法：昭和24年及び国勢調査の実施された30、35、40、45年の一学期に中学三年生(24年は男女6916人、25年は男女5440人、30年から40年までは男女各10000人、45年は男女各5000人)にN式作業性格検査を実施。

結果：作業の後半の毎分の作業量の平均が70以上をA、50~69をB、30~49をC、15~29をD、14以下をEと分類して、男女別に頻度をとり、平均値を累算して比較してみると、下図の如く、昭和24(戦時中は小学生)~30年間では、男23%・女20%増しているが、その後の昭和35~40年間では男8%・女5%と伸び率は減り、最近の5ヶ年では男お2%増しているが、男子は僅かに減少している。

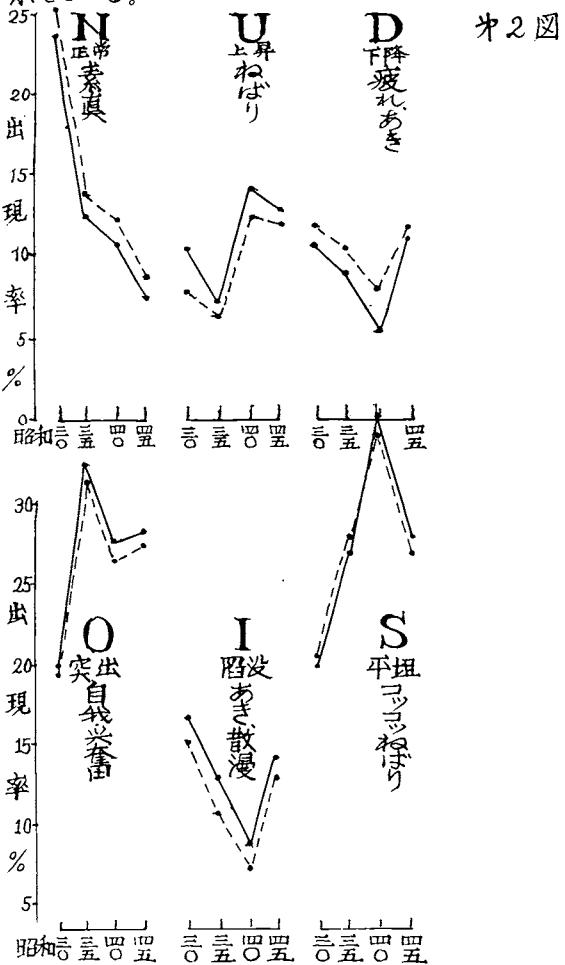
サ1 図



次に作業曲線型 従つて作業性格の変化を後半について考察すると、サ2図の如く、N型は減少し、Sと

O型は40年までは増加したが最近や、減少し、DとI型は40年までは減少していたが最近にわたり増加している。これは、公害などによる視力の低下のため疲労が早く現われたものと考察される。

なお、男女差は男子はねばりはあるが自我よりも気ままであり、女子は素直であるがねばり不足の傾向を示している。



連絡先：松戸市松戸 1267

# 大学生の企業における人事管理に対する意識について

## 宮本昇 (高崎経済大学)

目的：大学生(3年次、4年次)が企業の人事管理にどのような意見、態度をもつていいかを調査して、企業の採用管理・教育訓練の参考に資することを目的とする。

方法：本年6月～7月に、都内私立大学商学部学生(3年15、4年10)と地方公立大学経済学部学生(3年24、4年15)計64名に対して次の各事項につき、意見、態度を自由に記述させ、その結果を分析する。

### 〈質問事項〉

- [A-1] 就職希望の企業規模 [A-2] その業種 [A-3] 受験決定に際して考慮する条件 [B-1] 特定の大学出身者以外の応募を交付けない [B-2] 総務関係を重視して募集する [B-3] 実力主義採用を強く打ち出す [B-4] 思想関係を重視して採用する [B-5] 家庭環境を重視して採用する [C-1] 新入社員教育に於て自衛院、講義などに合宿させ猛烈に鍛える [C-2] 大学の專攻科目を無視して配置する [C-3] ジョブローテーション制度 [C-4] 家庭事情を無視して遠隔地上勤にさせる [D-1] 試験により従業員の昇進をおこなう [D-2] 年功序列制度、終身雇用制度 [E-1] よほどのことがない限り入社した企業に1年までとめるべきである [E-2] 能力が買われるならば他の企業に転ずるのが当然 [F-1] 人の上に立つ者は部下の健康はもちろんのこと、その家庭の動静に至るまで細心の注意を払って面倒を見るべきである [F-2] 部下が業務上過失をおかしに場合、上司は決して公にせず部下をかばうべきである [F-3] 業務においては部下は上司の命令に絶対に服従すべきである [G-1] 私用族などといふ言葉があるが、私事と公事は厳しく別けるべきである [H-1] 早人会、同窓会、趣味の会などは生産性向上に役立つ [H-2] 下層管理層、パートタイムの人材も労働組合に加入すべきである [I-1] 女子の待遇が男子

と差別される [I-2] 女子の取扱いが明確化せざれば採用をやらされる [I-3] 共稼ぎ

結果：[A-1] 中小企業35、大企業20、公企業2、個人企業6、不明1 [A-2] サービス業19、商業17、製造業8、金融保険業6、通信運輸業4、公務員2、その他8 [A-3] 企業の側の条件として、将永性30、仕事の内容17、業種15、資本金13、経営方針11、人間関係7、知名度2、福利厚生1 個人の側の条件として、適性27、所得13、通勤条件11、安定性11、年金4、昇進の可能性2 [B-1] 肯定10、否定53 [B-2] 積極的肯定8、消極的肯定25、消極的否定2、絶対的否定25 [B-3] 肯定58、否定3 [B-4] 肯定31、否定27 [B-5] 肯定37、否定22 [C-1] 受容41、拒否23 [C-2] 積極的受容33、消極的受容15、拒否11 [C-3] 受容55、拒否4 [C-4] 積極的受容4、消極的受容23、条件付受容25、拒否8 [D-1] 積極的肯定35、消極的肯定49、否定16 [D-2] 積極的肯定7、消極的肯定29、否定26 [E-1] 肯定29、否定32 [E-2] 肯定31、否定22 [F-1] 肯定28、否定36 [F-2] 肯定18、否定40 [F-3] 積極的肯定20、条件付肯定25、否定11 [G-1] 肯定50、否定14 [G-2] 肯定41、否定17 [H-1] 肯定41、否定15 [H-2] 肯定33 否定26 [I-1] 肯定39、否定21 [I-2] 当然42、拒否15 [I-3] 肯定35、条件付肯定6、否定16

考察：学生は自己の能力が十分に發揮出来る将永性をもつた企業に期待をもつていい。従つて、これらの人事管理は、自己実現を可能とする能力主義経営を目指せねばならず、その線にそつた厳格な転換規律が課せられるべきである。しかし、従等の理念と現実を明確に認識しているから、これらのことが急激に反映されることを決して望んではいない。

(連絡先)

東京都千代田区霞が関2-9-1 電300-23337

# 新労働省適職判定基準による適職判定実例

松本 洋  
(社団法人、雇用問題研究会)

**[目的]**：労働省は今般との職業適性検査(オフ)を改訂するに際して、適職判定基準をも改訂した。この適職判定基準は一般職業適性検査(改訂版)のためのものであるが、従来からのいわゆるオフ検査に適用した場合、どのような場合かをみて、オフ検査とも適用しうるか否かを検証しようとする。

**[方法]**：雇用促進事業団東京支部の雇用相談室がその開設当時から45年4月までに民間事業所から依頼され73年4月に実施した、及び、同事業団婦人雇用調査室から私が委嘱されて44年中に実施した家庭婦人の職業能力検査において実施した。労働省編一般職業適性検査(オフ)の結果を整理した。

雇用相談室の資料は、対象職務別業務量のときや、検査時間の関係から、器具検査を1部と実施していいない、どう分けていいとは、器具検査結果を必要とする適性職業群の判定はしないこと。

婦人雇用調査室の資料では、器具検査を実施してないが、目と手共にA、運動速度下の成績から指先器用F、手腕器用Mの成績を推定し、全適性職業群につき応否を判定した。

**[結果]**：一人平均合格適性職業群数……器具検査を実施しなかつた雇用相談室資料の受験者は、男162人、女341人、計503人。判定可能適性職業群数は19種である。一人平均合格適性職業群数は、男10.5、女9.2、計9.6となり。約半数のものに合格したことになつていいが、男々43%、女々6.5%、計5.8%の者に合格適性職業群がなく、これは反し全19種に合格した者が、男々80%、女々50%、計で60%であった。

全検査を実施したものは、婦人雇用相談室資料で、職業訓練生119人、一般家庭婦人247人、雇用相談室資料で、男333人、女158人、計491人である。一人平均適性職業群数は、職業訓練生20.6、一般家庭婦人14.2、雇用相談室資料の男14.2、女

17.1、計15.2であつた。訓練生の合格率が非常に高く、一般家庭婦人と雇用相談室の女とが同率であったのは、偶遇とは思ひが尋常のあつこことであつた。

しかし、適性職業群が0のものが訓練生は1.7%、一般家庭婦人は2.7%、雇用相談室の男は2.5%、同女は5.1%、同計は6.7%あり、全職業群に合格しないものは、訓練生は16.8%、一般家庭婦人10.1%、相談室の男は0.9%、同女は1.9%、同計1.1%であった。訓練生が特にすぐれていった。

適性職業群別にそつ合格状況をみると、被験者群により、その合格率は相当に異つていいが、合板の難易度につけては大体同一傾向である。

1番むづかしい適性職業群(合格率30%未満)は1.3.6.7.9.20の6群である。これらは合格基準は知能G12.5、算数能力N11.0のいずれかが含まれている。次2番にむづかしい適性職業群(合格率30%以上、50%未満)は、2.4.8.10.12.18.21.22.26の8群である。これらの合格基準は知能G9.0以上、算数能力N9.0以上といはずれかと空間弁別N9.0とが組みあつていい。26群うちが異例である9.0と指先器用F9.0とが組み合わされている。オフにもづかしい適性職業群(合格率50%以上、70%未満)は5.11.12.14.16.19.23.24.27.28.29.30の12群である。この合格基準は知能G9.0以下、算数能力N9.0以下、空間弁別N9.0以下、指先器用F7.5以下である。1番やさしい適性職業群(合格率70%以上)は、13.15.17.25.31.32の6群で、この合格基準は知能G7.5以下、算数能力N7.5以下、空間弁別N7.5以下である。

なお、知的能力程度を、秀、優、良、良下、可、劣の7段階に分類しておいたが、新適職判定基準は一般職業適性検査(オフ)を適用しても、差支えなしものと考えられる。

# 事故多発者スクリーニング用人格質問紙について

○菊池 哲彦

(茨城大学)

鈴木 由紀生

(茨城大学)

# 関係行為療法に関する一考察

永山由紀  
(お茶の水女子大学)

《目的》 関係行為療法における集団関係状況と、活動内容との関係を、サークルで明瞭にする。

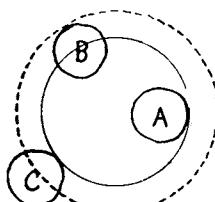
## 《集団関係(状況)》

- 関係行為療法は、集団関係(状況)を基盤として展開される集団心理療法である。
- 集団関係(状況)とは、「内在」「内接」「接在」「外接」「外在」の、5つの関係の扱い方の展開される状況である。集団関係(状況)に参加する「人」あるいは、「物」において、この関係の扱い方に応する機能的な役割がとられて、関係の発展がもたらされる。
- 関係行為療法の参加者に関して、この関係の扱い方が、自己・人・物との関係行為に実現されることとくに、接在的扱い方に応する役割をとりうることが目指される。治療者は、集団関係(状況)への関わり方の可能性が、患者(参加者)において、治療関係の発展過程でひろがり、日常生活場面で、そこに展開する状況を関係的に把握し、関わり方への決定が、個において成立すること(自己決定)を期待し、行為する。

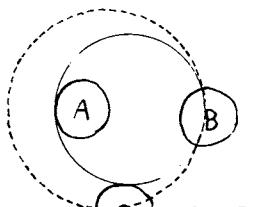
## 《集団関係状況と活動内容》

- 関係行為療法での集団関係状況における活動の成立・展開と、活動内容(活動の性質；方向性など)とが統合されて発展する集団活動に関して、集団関係状況と活動内容の関わり方は、リーダーの活動を媒介に、下図のように示すことができる。

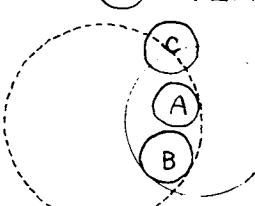
また、集団関係状況と活動内容との関わり方は、活動の形態と相互規定的に機能し、両者は対応関係にあるといえる。



(I図)



(II図)



(III図)

--- : 集団関係状況

— : 活動内容

A・B・C : リーダー

I図の関わり方では、リーダーにおいて活動内容と集団関係状況の関係の充実が目ざされ、アループカウンセリングのような、主に対人関係の展開・発展する活動形態が対応する。

II図の関わり方では、活動内容は集団関係状況に内接し、リーダーにおいて活動内容の展開・充実・拡大と、集団関係状況の発展を同時にもたらすことが目ざされる。たとえば、心理劇(行為法)のような活動形態が対応する。

III図の関わり方では、活動内容は集団関係状況に接在し、リーダーにおいて、集団関係状況が推進され、活動内容全体を含むようにすることがめざされ、たとえば製作活動、スポーツなどのような物との関係で展開する活動形態が対応する。

## 《技法》

- 関係行為療法は、技法体系である。技法とは、集団関係状況におけるリーダーが、状況の発展をもたらすために、意識化し、活用する方法(行為の仕方、技術)であり、リーダーの関係の扱い方によって、内在的・内接的・接在的などの諸技法に分けることができる。

(共同研究者 松村康平)

<連絡先：お茶の水女子大学 児童臨床研究室>

# 心身障害児(者)に各種療法を試みて

○高橋哲也  
(昭島市立成荫小学校)

岸中健一  
(都立府中療育センター)

心身障害児(者)は、とかく情緒が不安定で落ち着きがなかったり、ひとつのことにつき熱中できなかったりしがちである。

心身に障害を持った子どもや成人に、音楽を通して気持をほぐし遅れている運動機能、感覚機能が敏感にはたらくように促がし、交友と一緒に遊ぶ楽しさを味わわせ、その結果明日への教育、生活へとして、身についたものに育っていくことを目的とする

主に音楽療法を中心とし、関係療法は、遊戲療法、精神療法、心理療法、催眠療法、等である。

## ○音楽療法を通じての目的。

1.開放感、2.成功感、3.達成感、4.自己表現などが一応項目としている。

## ○音楽の分類。

刺激的—興奮。鎮静的—制止の対応関係。

リズムの分類—メロディーについて。

曲線分析—曲の全体と部分

楽節の長短、演奏形式の分類、歌曲の分類、身体表現、その他。

音楽は、個人の気分や情動に対して力をもっているが、また、非凡な影響を集団に及ぼすものである。この特質は、集団療法で用いられた近代的な方法にかんがみるならば、ことのほか興味深いものである。

音楽は、個人の感情ではなく、集団の感情を表現する場合もある。集団の統制内で表現の個人的自由を考慮するのであるから、そのような集団が、集団心理療法のための手段である。

音楽はコミュニケーションの手段でもある。この単純な事実のなかに、音楽のすばらしい療法的価値が存在するからである。

## ○対象者。

精神薄弱児、(者)、自閉症児、肢体不自由者、情緒障害児、(登校拒否、精神身体症状児、)などである

治療期間 3年間、統合療法、2年間。

## ○重度身体障害者についての療法。

施設内にいる障害者はある一定の働くの中に入ってしまう。そこで、人間生活としての中に変化を求めなくなった時、どうしたらよいか。少くなからずとも求められる最大のものはなにか。? そこで、最少限度の範囲はなにか、残された機能を生かしてあげることである。その中で、生活そのものの変化があるならば、それに必要な療法を与えてやる必要がある。

そこで、車椅子で出来るダンスの必要性がてきたのである。

(実施については別紙にて報告します。)

岸中。

## ○音楽療法のねらい。

音楽の特性について。

リズムは、本能的原始的な活動範囲に強く訴えるものである。メロディーは、全体性として、また、和声は統合的效果を有するものである。

(1)感情の調和をはかる、(2)心身のコントロールをはかる、(3)自信感と安心感、(4)聴くこと、歌うこと、楽器を使うことの楽しさ、(5)注意の増進、関心の維持、(6)精力を発散させる。(7)情緒の安定、(8)楽しさを味う(9)自己の表現、(10)表現力の増大、(11)人間関係、等である。

音楽は、その瞬間の感情を反映することができるしまた、音楽の存在によって、感情を変えることができる。音楽は、現存の気分を増大し、気分をクライマックスにもっていたり、それを消去したりすることができます。音楽は、暗示的で説得的で、あるいは、強制的でさえある。諸要素を含有しているから、気分に影響する力をもっている。音楽は常に人間自身の経験に關係づけられている。音楽は、人間のばかり生まれ、人間の情動を語り、人間の知覚の範囲内に存在するからである。(別紙報告書参照されたい。)

(連絡先) 東京都川平市花小金井南町3の4、高橋完

## 脳性マヒ者の呼吸行動(Ⅳ)

—呼吸パターンを中心とした—

松 本 葬

(長崎県立女子高大)

目的：脳性マヒ者(以下CPと略す)の呼吸運動は過度の緊張をもつ状態では、複雑に違ったパターンが表出する。本研究では、動作訓練前より呼吸運動のパターンが relaxation training を学習した後、どのように変化していくかを報告したい。

方法、昭和42年から昭和45年8月までのCP/00名(女子28名)、年令6歳～18歳まで、正常者A:小学校、中学校、B:高校、C:大学及び大学院生58名である。

使用した器具は竹井機器KKボリゲラフニ素子、胸部、腹部同時記録を行なった。

CP-Normalに対する想定条件は、

- i) 立位で安静閉眼。(1分間)
- ii) 立位で安静閉眼。(3分間)
- iii) 仰臥位で安静閉眼(1分間)
- iv) 仰臥位で安静時閉眼(1分間)

### ア) 過呼吸

- 1) 平常の深呼吸(3回)
- 2) ゆっくり吸う(3回)
- 3) ゆっくり呼く(3回)
- 4) ゆっくり吸って、ゆっくり呼く(3回)
- 5) クイック(10回)。

### ア) 呼声

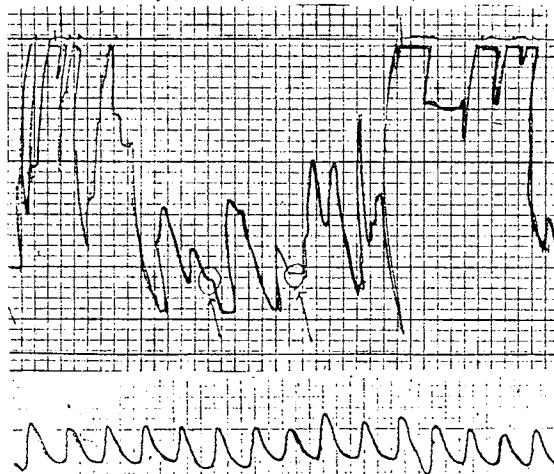
"ア..," "カ..," "サ..," (各3回)。

### ア) 棒にぎり

- 1). 力を入れる。(3回)
- 2). 力をぬく。(3回)

結果；CP-Normalの呼吸運動の一般的な特色としては、胸部を中心とした呼吸なし、Yの型の運動呼吸運動が多い。又内眼筋の呼吸数と外眼筋の呼吸数を比較してみると内眼筋の場合は呼吸数が外眼筋よりも多く、逆に呼吸パターンをみると、リズム、波形とともに一定せず、安静時に比べても大きな深呼吸を行なう。この呼吸特徴が認められた。

變化は、胸部から腹部への移行にて呼吸運動が認められるようである。この場合、動作訓練の進行過程の途中で表われ、これは四肢の改善が相次ぎ進んだときに起きるようと思われる。relaxation の一つの指標になるとではなかろうと思われる。通常"ゼンソク"の呼吸、つまり片側には「ノック」が両方に現れるが、CPでは呼吸は「ノック」が多い傾向がある。吸気から呼気へうつる曲線の角度が腰角れなり、呼吸の自己コントロールのあつからしさを示すものと思う。(しかし relaxation の学習が進められにつれて、浮遊リズムが正常者の呼吸曲線に近づくようである)。以下はその実験である。



上...動作訓練前、下...2年後の動作訓練前。

(12歳の男子)

俯臥位では、やはり同じ呼吸曲線をうつすことができる。その特徴は認められない。この裏面動作訓練におけるrelaxationの学習で上例の如きが変化してゆく。又四肢が健全ではないにしても自分の力となり、かなり動作の可動性、歩行は、正確度が増加し、日常生活にあり及ぶ運動などうなうて、だよんとしているのである。

# 相互作用過程の分析カテゴリーに関する研究

渡辺勉

(武藏大学 人文学部)

目的：心理劇及びロールプレイングの実施過程を分析するためのカテゴリーを設定し、今回は、その大体の有効性を検討する。即ち○各カテゴリー間の独立性、○各役割間の差（分析カテゴリーの適用によって、異種役割間に反応傾向の差異があるか）、を見る。

方法：(1)觀察対象 技法改善に關わる意義と研究資料（録音テープ）の都合上から、言語的反応に限定した。

(2)分析の観点と分析カテゴリー 相互作用過程に関する社会心理学、集団力学、及び臨床心理学の諸研究文献（それらの中で特に参考になつたものは、Bales, R.F.とSnyder, W.U.のもの）を参考にして、次の三要から、即ち、相互作用過程における基本的機能と、それに關する行動型、並びに行動型の方向又は水準、から分析カテゴリーを構成した。その大枠を示すと、

(基本的機能) (行動型) (方向とレベル)  
①問題遂行機能 a.統制機能 (弱 — 強)

b.情報機能 {提供(客觀的一主觀的)  
                  要求(客觀的一主觀的)}

②關係維持機能 a.複雑なタイプ {積極的(支持の一攻撃的)  
                  消極的(兼容的一拒否的)  
b.單純なタイプ(單純な話しかけ—單純な應答)

③個人的機能 a.緊張解消 (快的—不快的)  
b.独白

(3)分析に使用した資料 役割テスト（未完）作成のために行なつた実験資料（録音テープ）に対し、この分析カテゴリーを適用した。「役割テスト」とは6課題（場面）から成り（例、第二場面：母が子ども達[兄と弟]に對し仕事の手傳いを頼む場面）、VP.は3人/組で、各場面ごとに主役割と交替し、各場面を5分間位で終了するように指示する。この実験に用いたVP.は東京都N区立高校2年生30名（男女各15名ずつ、計10組）である。

(4)分析カテゴリー適用上の留意点、①分析単位は原則として一單文とする。「くり返し」は1捨、重文は、2回以上に數え3が、意味構造に留意する。②個々の發言の意味や村人の機能は、必ずしも文法的形態に即して規定できぬが、できるだけ、それを重視する。③筆記紀錄だけでなく、録音テープを再三再生して、アクセント・ランボ・間の具合などを確認し、それらの意味や文構造の意味的まとまりや余裕を把握して、カテゴリーの適用を是正する。

結果：(1)整理と検定 資料の集計は、①各VP.群毎の場面毎の反応語数、②個人別の場面毎の反応語数、③分析カテゴリー項目別の場面毎反応語数（10組の反応語数の平均値）④カテゴリーのレベルと方向別についての場面毎の反応語数（10組の反応語数の平均値）⑤各端面に向う役割相互間の比較、などについて行ない、⑥⑦⑧についてはp検定、⑨についてはp検定と連合係数を算出した。

(2)考察 ①前述の①と②から、著しい集団差と個人差の認められること、強化集団差は、その組に含まれた個人の個性の相互反映によることが推測される。②前述の③から分析カテゴリーによる反応語分類は、凡てのカテゴリー（行動型）相互間に有意差が見られる。③又、それは各場面における役割間にても、一般的に有意差がみられた。④しかし場面を異にする役割相互間では、「母」と「先輩の間」と、「母」と「父」との間の一部において、それぞれ、やゝ有意差のあること、(p検定 0.05~0.1) ⑤「方向又はレベル」による分類においては、「方向づけ」「情報提供」「情報要求」について、ごく一部を除き、カテゴリー間に有意差がみられること。⑥⑦⑧ことは、役割相互間にあっても、「方向づけ」の場合を除き、一般的に有意差がみられた。以上で、今回の研究目標であった仮設分析カテゴリーの大体の有効性を、ほゞ認めることができた。（連絡先 東京都 東久留米市 滝山・メーク-11-411）

# 里親子関係について

## III 里子について

|                                   |                                    |                                    |                      |
|-----------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|----------------------|
| 仁科義樹 杉宮久充<br>添原正行<br>(千葉県銚子児童相談所) | 渡辺篤朗 宮川令子<br>井上信久和<br>(千葉県市川児童相談所) | 前田茂則 井上栄子<br>○高橋宣昭<br>(千葉県中央児童相談所) | 中尾清宗<br>(身体障害者更生相談所) |
|-----------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|----------------------|

目的：里親委託後の児童の精神発達上の変化、およびペーリナリティについて現状を把握することを目的とする。

方法：(1) 対象、千葉県、山梨県内で里親に委託されている児童。(延人員47名)

(2) 実施期間、昭和44年11月～昭和45年1月

(3) 実施場所、千葉市天台1丁目、房総双葉学園

(4) 検査の種類、鈴木ひづね一 田中ひづね一 牛島式社会生活能力検査、遠城寺式乳幼児分析的発達検査 YG性格検査 TAT(集団式)

(5) 手続、就学前の児童に対して、委託前に行なつたと同系列の発達検査および知能検査を再実施した。小学校2年以上の児童にはYG性格検査を、小学校5年以上の児童にはTAT(集団式)をそれぞれ実施した。

結果と考察：知能検査結果では、里親委託前の平均IQは79.6、里親委託後の平均IQは92.4でその差は12.8であり、里親委託後のIQが非常に高く、対象児47名のうち5名にIQの上昇がみられた。牛島式社会生活能力検査では、対象児2名であったが両者ともIQは委託前に比し高かった。遠城寺式乳幼児分析的発達検査では、情意の発達、言語発達、社会的発達のEQは里親委託前に比し高かったが、移動運動、手の運動、知的発達では特定の傾向は認められない。本検査委託時年齢がいずれも5歳未満であり、能力に可変性のあることはもちろんであるが、委託前に養護性をもった児童であることを考えると意味深いことである。YG性格検査について男女別に類型でまとめたのが表1である。里子(男)はABCDEF類の準型混合型を示したものが10名中9名あり特に問題にすべき点はない。里子(女)はA類が42%と多く、ついてCDE類がそれぞれ17%で、B類は8%となかった。E類を準型混

合型に各1人であり、全体的にも問題はないと考えられる。集団TAT(10～17歳)の結果は、欲求では愛情欲求が高いうが、特に15歳以上にその傾向がみられる。高校女子の平均が50.0(S.D.11)であるが今回の同年齢児では60.0を示している。ついで権力欲求が高く、独立欲求は低いが、いずれも散布度は大である。反応では逆行反応がめだち、結末は不定反応が多く悲観的反応は少ない。領域では社会、家庭、自己の順に関心度が高い。以上の結果から次のことが考えられる。

1. 最近の里親登録の動機をみると、その多くが養子縁組を前提としており、その家族構成は実子がなくこれから里父母が養育の中心者になり、児童との間にはコミュニケーションをはかる機会が十分にもたらされ、愛情にあふれた対人関係の経験が成立しやすくなる。

2. 児童にとって施設に入所するより、家庭的雰囲気の中で育てられる方が情緒的安定を得やすうこと、および里親認可にあたっては、経済的安定が一つの条件であり、このことから比較的高い文化的な環境におかれていることが考えられる。

3. 知的側面、社会的、発達的側面においてかなりの良好な伸びが認められ、性格的にも、男女とも安定傾向がある。

表1 YG性格検査結果

| 類型  | A  | B  | C  | D | E  | 計  |    |    |     |    |
|-----|----|----|----|---|----|----|----|----|-----|----|
|     | ♂  | ♀  | ♂  | ♀ | ♂  | ♀  | ♂  | ♀  | 計   |    |
| 典型  |    |    |    |   | 1  | 1  | 1  |    | 1.2 |    |
| 準型  | 2  | 1  | 1  | 2 | 1  | 1  | 1  | 4  | 6   |    |
| 混合型 | 3  | 3  | 1  | 1 |    |    | 1  | 5  | 4   |    |
| 計   | 3  | 5  | 2  | 1 | 3  | 2  | 2  | 0  | 10  | 12 |
| %   | 30 | 42 | 20 | 8 | 30 | 17 | 20 | 17 |     |    |

(千葉県中央児童相談所)

# 里親子關係について

## IV 里親について

|                                    |                                    |                                   |                      |
|------------------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|----------------------|
| ○仁科義教 杉宮久光<br>漆原正行<br>(千葉県銚子児童相談所) | 渡辺篤朗 宮川令子<br>井上信久和<br>(千葉県市川児童相談所) | 前田茂則 井上栄子<br>高橋宣昭<br>(千葉県中央児童相談所) | 中尾清宗<br>(身体障害者更生相談所) |
|------------------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|----------------------|

目的：本研究では里親についてパーソナリティテスト等をとおし、里親の人格的な面を明らかにし、今後の発展向上のうえに1つの手がかりを得ようとするものである。

手続・方法：(1)対象 千葉県において現に里子を委託されている里親(35ケース)

(2)調査実施期間 昭和44年11月から昭和45年1月まで。

(3)実施場所 千葉市天台1丁目 房総双葉学園

(4)実施者 千葉県児童相談所心理判定員

(5)実施方法 里親子に対して文書連絡によって10人前後の小グループに分け未闇日時を指定し、里親に対してY-G性格検査・SCTを実施し、SCT読み困難なものに対してTAT(集団)を実施した。

結果・考察：里親の心的側面については、里父の場合、全体的には特に問題となるケースはみられず、家庭的にも社会的にも比較的安定した人物像をうかがわせるもののが多かった。里母の場合には性格構造の歪みという点では大きな問題はないと思われるが、情意・指向性などではかなり不安定であり、果子がないということからくる内面葛藤はかなり高い。これは特に養子縁組希望の里母に強くみられた。養子縁組希望無しの里母については比較的樂觀的でゆとりのある態度で里子に接しており、里親子關係においても無理が少ないとされる。里親登録においては、経済的側面が工夫されたため一般家庭とほぼ同じ経済的、文化的環境があり、里子の心身発達上に支障はないが、里子であるというぬぐいきれない事実からくる里親の心的葛藤は無視できない。直接養育担当者としての里母の養育上の不安・自信のない・立場周囲に対する気がね等、内面葛藤はかなり深いものがうきぼりにされている。このことは特に養子縁組希望の里母について顕著である。

ある。これは果子として扱おうとする強い気持ちからして逆作用し、悪循環を反覆しているためと考えられる。もっと“社会の子ども”という広い観点にたった養育者としての心構えの必要性が痛感される。里親に関する法規では、里子の医学的・心理学的検査の必要性をうたっているが、里親については精神的に問題なく明かろい家庭等しか記述されていない。本研究においては、現在里親委託されている里親を対象にパーソナリティテストを実施したため、果子に対する比較的生々しい反応がでたともいえる。それ故、今後里親調査においては、環境調査にもとづく社会診断とともに、パーソナリティテスト等の科学的データーをも併用して里親調査を行なうことによって児童の福祉を進行するために欠かすことのできない一条件になると思われる。今後も純粹里親の積極的開拓がなされねばならないが、一方で養子縁組希望の里親が増加していく現実があり、これらの中親に対する指導や働きかけが強力になされねばならない。現状では里親委託後の指導体制の充実が求めと考えられる。これまで多くは里親委託後は里親子に対する働きかけで稀薄化された点が強く認められるのに、里親との連携を密にし、継続指導する事が望まれる。また、委託前後ににおける指導において、里親会の存在意義は重要であり、社会に対する積極的啓発活動も併せて強く望まれる。

(千葉県銚子児童相談所)

# 教育評価に関する一研究(その10)

## —その原理と方法についての試み—

岸本英男  
(日黒区立向原小学校)

**目的**；今日、小学校の教育現場では、児童の学習結果を、どう評価したらよいかに迷つてゐる。概ね、從来のしきたりどおり、5段階評価を用いてゐる所が多いが、学校の児童数が減少してくるにつれ、機械的に5段階に分り分けていく相対評価は無意味となり。

從来、最も理想的とされていた絶対評価への関心が高まってきた。しかし、これも亦、児童の学習意欲を高める上からは、不十分とされており、現在では、相対と絶対の兩者を、がみ合わせた折衷的方法がとられてゐる。ということは、教育評価に関する限り、学級担任の主導に左右される所が多いことを意味し、そのことは、担任の教育権を保証する意味で、極めて有意義であるが、反面、ことがらの重大性、つまり評価によつて、児童の学習興味意欲が左右されることが多い事実に鑑み、多くの問題を残したものになつてゐる。

そこで、今回は、その原理を探究し、方法を明らかにする上で一つの試案を提起し、この問題解決の一助とすることを目的とする。

**方法**；今日の普通学級は、未だ一学級当たりの児童数が多いので、評価の網の目を細分化した理想的な絶対評価は、事実上不可能である。そこで比較的人数の少ない促進学級で、絶対評価を用い150内外の項目を設定して、到達度に応じて三段階に区分し、◎○×の標識を用いて評価したところ、評価項目に明示したゴールへの到達度の関心は、在級児童もその保護者も比較的少なく、寧ろ◎○×の標識記号の数だけに、異常に関心があつた。競争社会での裏とり競争が、特殊教育の世界にまで影響を及ぼしていることが明らかとなつた。従つて、この段階で絶対評価を実施するには、多くの事前教育が必要であり、その爲には評価の前提である教育の価値についての再認識が必要であることが明らかになつた。その爲既に、現在までに明らかにされた特殊児童の教育評価の原則、乃ち評価を全人格的発展の形でとらえ、その所属集団の構造の発展とし

て相対化する、という命題を実証する過程において、この原則の普遍性を一般化する。つまり現在の教育評価の異常なゆがみを是正しようとした。方法としては、応用心理學的方法を加味した客觀的觀念論の立場をとつた。

### (1) 假設の設定

從来の五段階評定は、教育評価の方法としては不適当であり、それに代るべきものとしては、円錐比率(*conical ratio*)が betterである。

### (2) 立証

円錐比率とは、造山活動における成長過程において最も自然に最も規則正しく成長し高層化した富士山の切頭円錐体に見られる火山側縦の二次曲線を重く部分の体積の比率を意味する。つまり頂角120度、高さと基底の直徑との比が1:4の円錐を4本の等高線で五分割した時の体積の比率を被覆部分を含めた頂部を1とした時7:17:37:61の割合で五段階に分けができるが、この配分法を基礎に頂部上部中部の三段階に分け、1:7:19の比率で学級児童の学業成績を相対化する配分法を円錐比率配分法といふわけである。この配分は、いわば累積度数分布なので学級児童の能力を構造的に評価していくことになり、從来のように偏差度を明らかにするものではないので hollow effect の入りこむ余地ではなく、しかも複雑な人間の能力に対して評定者として敬度たらざるを得ない余地を残すことによって、從来の評価法より better であると思う。

**考察**；この試案はカウンセリングの結果をまとめたものもあるが、現在の受験制度によって、ゆがめられてきた義務教育を本来のありかたに立ち戻らせるためにも、この種の試案が多くの角度から実施されることが望まれる。当然結果は学校教育の向上につながるものであるから、現段階では論及は差控える。  
(連絡先) 東京都品川区西五反田4-9-12 岸本英男

# ゲゼル行動発達検査にみられた 難聴児と精神薄弱児の比較

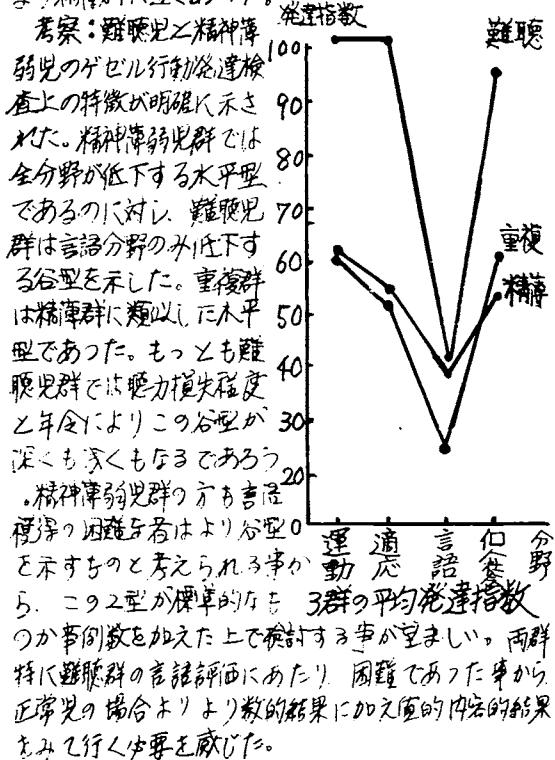
大腸 美恵子  
(トキオ公サ子美術短期大学)

目的：障害児のハビリテーションに関しては、早期発見、確実な診断基準が要求される。こゝから早期指導や早期訓練が実施される。難聴児も精神薄弱児も言語障害とへう共通の難問題を有している。これらの幼児を全般的に力動作的にてく立場から行つて来たゲゼル行動発達検査について少數例ではあるが、ほゞ同年令の2群について比較検査するのが目的であります。また精神薄弱に難聴を伴う重複障害児についても、考察を加えた。

方法：被験者は難聴児と精神薄弱児各13名、重複障害児5名。計31名について、年令は3歳から7歳2ヶ月までである。難聴群平均年令4.1、精神薄弱群平均年令4.8、重複群平均年令4.6であった。難聴群平均良耳聴力損失は68dB、感音性障害児である。精神薄弱群で軽度9名、重度4名であった。難聴群の知能や精神発達はゲゼル検査の他、gments人物画検査、大腸式幼児用動作検査等から正常とみなされた者である。精神薄弱群の脳力は各種の脳力検査、聴覚器には必ず反応から障害はないといみなされた者である。

結果：右表に示す様に次の様な事が明らかになつた。  
(1)精神薄弱児群の方が難聴児群より3分野、運動適応、社会分野の平均発達指数が低かった。有意差はも検定1%水準であった。言語分野ではも検定1%水準で有意差がなかった。(2)両群共に4分野中言語分野が最もとも指數が低い。(3)各分野別に両群間では標準偏差に差はみられない。(4)両群を比較するに難聴群の偏差が多かつた。次に重複障害児群について、4分野間

の差は精神薄弱群よりあるが難聴群との差はみられない。より精神薄弱群に近くあつた。



(連絡先) 東京都東村山市久米町 2-1336

# 少年非行における有害環境排除の課題

三原憲三 — 妨論の動向 —  
(明治大学)

最近の都市化の進展によって、犯罪の発生については、農村地域より大都市に、また大都市の周辺地域より中心部のさがり場地域に犯罪は、より多く発生している。ここでとりあげる東京都の社会環境について考察するうえで、まず最初に注目しなければならないのは、東京都自体が都市化の進展によって、巨大な消費地区が各所に出現し、それについて娯楽機関が集中する歓楽地帯が、つきつづきに発生し、これが少年の非行の原因にとつて大きな役割を果していることである。したがつて少年非行問題を解決するもつとも効果的な方法は、社会の有害な環境を排除することであろう。

東京都の青少年対策の一環として、昭和43年に東京都が498名の都政モニターに対して実施したアンケートによつても、青少年の非行化防止のきめてとして、とりあげた理由として「家庭内の問題」(家庭でのしつけが大切だから・健全な育成には、家庭が基盤となるから)が47・6%となつて、約半数ちがくもあつて、もつとも多く、これに次いで「社会環境の問題」(社会環境に起因するから・いまの社会環境が悪いから)が39・0%となつてゐる。この「社会環境の問題」をとりあげた者の理由を考察すると、「少年非行は社会環境に起因するから」とした者が39・3%、「社会環境が悪いから」という者が34・8%となつてゐる。この他、「学校内の問題」が8・8%、「職場内の問題」が4・2%といふことである。これを性別から考察すると、「家庭内の問題」が男性37・7%、女性57・5%と女性にかなり多く、その反面「社会環境の問題」は、男性46・5%、女性31・6%と男性にかなり多くみられる。地区別、年代別では、とくに目立つた点はみられぬ。

以下、とりあげた「社会環境の問題」についての理由をみると、つぎのとおりである(解答者178人)。

|             |     |
|-------------|-----|
| 社会環境に起因するから | 70人 |
| その社会環境が悪いから | 62人 |

- 3 東京都が行なう青少年対策として、この問題の解決がもつともふさわしいから 19人
- 4 個人の力はどうしようもないから 11人
- 5 過大都市、核家族化等の影響が強いかから 7人
- 6 おとの影響が強いかから 6人
- 7 その他 3人

また同アンケートは、「少年非行防止のきめてとしての今後のあり方についても、モニターから意見を寄り付けてゐるが、これによると「家庭内の問題」、「社会環境の問題」、「学校内の問題」、「職場内の問題」等について今後、強力におしすすめろ必要があるとしている。このうち「社会環境の問題」に寄り付いては、「健全育成施設の整備を」、「東京都青少年の健全な育成に関する条例の適切な運用と取締りの強化」、「盛り場の浄化と風俗営業の取締り強化ならびに業者の自主規制促進を」、「社会環境の浄化を」、「おとの自觉の喚起」、「マスコミの健全化」、「青少年を甘やかさず、健全に育成する風潮づくり、ならびに行政を」、「青少年の自主性によるサークル活動の助成を」、「余暇を健全に過すよう指導を」その他について、今後の課題ともいふべきものをあげてゐる。

以上のうち「社会環境の問題」—少年非行の原因となる有害環境の排除—については、現行法上とかうみもあり、十分になしえない場合が多く、かなりの困難があることは事実である。しかし現行の「東京都青少年の健全な育成に関する条例」の適切な施行すみやか行政的指導により(青少年社会環境浄化対策地区の指定すなれば重複地区に対する施策)、その健全化をはからなければならぬ。

# 施設不適応少年に対する処遇体系の組立て方について(I)

長谷川 孫一郎  
(多摩少年院)

**目的：**矯正施設における治療教育を確立するためには、職員と被収容者の関係をとりえ、各種の処遇技術を矯正の目的のために体系化することが目的である。今回は、この課題を、処遇困難な少年を収容する工少年院について、かれらの不適応行動を分析し、比較的処遇容易な少年を収容する丁少年院と対照し考察する。

**方法：**工少年院に昭和43年中入院した146名の少年の処遇経過を中心、不適応行動の発生状況を分析し、処遇方針の推移と照査、少年の関係を分析する。

**手続：**146名のうち、他の施設からの移入16名、逃走6名、死亡1名、他施設への移送16名(移入2名を含む)、昭和45年4月まで発生9名を別にし、残り100名について処遇段階別(二級下、二級上、一級下、一級上)に紀律違反の発生状況、懲戒筆の処分を集計し、昭和43年1月から6カ月毎に4期に区分して処遇方針の推移を検討する。また職員間の問題を職員集会の記録から、少年間の問題を生徒集会の記録や行動観察記録から分析する。

## 結果 1：施設不適応少年の單独収容状況

昭和42年以降の紀律違反や集団生活に失敗して單独室に収容された少年数を、毎日の單独収容数から検討すると、毎年7月と8月に減少し、2月から5月に増加する。他の月は、年によって異なるが、職員の異動や処遇方針の変更が増減の機となり、とくに逃走事故の発生が小反則多発の主因となる。とくに昭和43年9月から翌年6月までの多発は、暴力犯暴動を中心とした一連の諸方策の反動とみられる。

## 結果 2：懲戒件数と内容の推移

| 昭和  | 抗職少 | 破わ  | 自逃 | 喧嘩 | 噪音 | 物品 | 賭博 | その他 | 計  |     |    |     |
|-----|-----|-----|----|----|----|----|----|-----|----|-----|----|-----|
| 41年 | 93  | 8   | 2  | 21 | 12 | 2  | 41 | 2   | 18 | 199 |    |     |
| 42  | 4   | 102 |    | 6  | 9  | 26 | 13 | 29  | 16 | 205 |    |     |
| 43  | 1   | 86  | 5  | 1  | 14 | 22 | 50 | 1   | 35 | 8   | 15 | 238 |
| 44  | 1   | 3   | 80 | 1  | 8  | 27 | 55 | 4   | 79 | 2   | 58 | 318 |

収容人員は、240名から147名まで年々減少してい

るのに、懲戒件数は増加した。(内容は、抗命、職員への暴行、少年間の暴行、破壊、わいせつ、自傷、逃走未遂、喧嘩、噪音、物品不正製作、摸索、窃取、喫取、賭博、その他の頭文字をあげた)

## 結果 3：処遇段階と懲戒・小反則

100名中、紀律違反零無は6、懲戒とならぬ小反則者は10名にすぎず、各段階とも暴行が首位を占める。

二級生は、逆反則が第1期から3期まで減少し、暴行、喧嘩、物品関係、小反則が増加したが、一級生では逆反則者が増加し、暴行率が削減した。移入少年は移入の当初の紀律違反が少く、逃走・移送少年は、次第に紀律違反が増加した少年である。

## 結果 4：処遇方針の変化と不適応少年

第1期は寮舎の新入・処遇難易別、室主任教官の個別指導、第2期は寮舎の処遇段階別、寮室生徒集会の開始、第3期は院長の交替と保守の強化、第4期は段階別生徒集会、生徒委員と通番制度の発足があり、これらと共に、第1期は上級生の暴力支配とヤクザ的役割分化の残存、下級生の逃避行動、第2期は非公式支配と役割の暴露、下級生の孤立と逃避行動、第3期は新旧制度と上下級生間の対立激化、第4期には、上級生の民主的リーダーへの転換と民主的役割の編成、下級生間の争いと進級選考者の逃避行動があげられた。

## 考察：職員と少年の関係

職員(幹部、中堅、一般)の關係は、新しい方針が確立するままで、それが古いものになつた時、動搖し悪化しやすい。とくに事故の頻発時に危機となる。主因は勤務と生活諸条件の苛酷さからくる相互不信にあり、これが少年の処遇に反映され、職員と少年、少年相互間は相互不信となる。処遇体系の確立は、長期の見通しをもつた方針の下に、教育者としての自覚と民主的な仲間意識に支えられた職員の信頼關係の成立いかんにあり、職員と少年間の信頼關係も決定される。

(連絡先)八王子市緑町670 多摩少年院官舎

# 家事調停における離婚問題の心理的分析(第2部)

## 性的不調和による夫婦関係の破綻

○中原尚一  
(東京家裁)

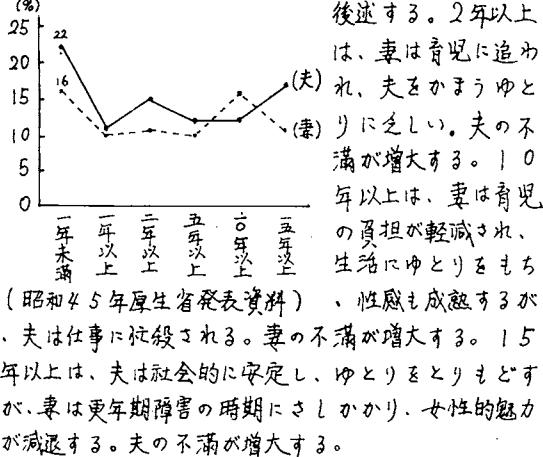
伊藤安二  
(早稲田大学)

奥 力  
(神奈川県立栄養短大)

目的：性的不調和による夫婦関係の破綻の実態(問題発生の時期、過程、態様、原因等)を明らかにし、その対策を発見しようとするものである。本報告は、その一部中間報告である。

研究方法：東京家裁における性的不調和のからむ夫婦間の調停事件の調査結果の分析を中心とし、従来の離婚原因に関する諸研究、諸統計等を参照する。

全体的考察：協議離婚夫婦の離婚理由中、性的不調和の夫妻数に対する比率は、夫15.1%、妻12.0%であるが、それは別図のように同居期間によって増減を示す。初年度は夫婦ともに高いが、その後は



(昭和45年厚生省発表資料)、性慾も成熟するが、夫は仕事に忙殺される。妻の不満が増大する。15年以上は、夫は社会的に安定し、ゆとりをとりもどすが、妻は更年期障害の時期にさしかかり、女性的魅力が減退する。夫の不満が増大する。

個別的に性的不調和の実態をみると、試に多様である。直接の要因としては、一方の長期病臥、交通事故等による神経の障害、早漏、遅漏、勃起不全、双方の欲求差、妊娠恐怖、不感症、避妊方法の無知または不協力、さめ肌や口臭等に対する嫌悪感、サディズム、マゾヒズム、同性愛、性関係の技巧に関する意識のずれ、一方的な性関係の強要や自己本位等。夫婦喧嘩よりくる拒否的態度、同居家族との問題、住居条件等がみられ、人格面では、分裂症、神経症、精神病質、精神薄弱、性的同一視の混乱等病的異常を含む場合もあれば

、正常者間において発生する場合もある。

性的不調和は、一般的には人間関係の不調和に伴つて発生し、性的不調和の発生により人間関係の不調和がより深刻化する例が多く、性的不調和自体独立して発生する例は少い。しかし、婚姻初期には、同居期間の長い事例にくらべて、それ自体が問題として意識される例が比較的多い。

婚姻初期の性的不調和：初年度は離婚の絶対数が多く、内縁解消も含めると、性的不調和が夫婦関係の早期破綻に占める比重はかなり高いと推定される。

代表的なものは、性交不成立であり、その大多数は夫の勃起不全、挿入前射精による。妻の性交拒否の態度による場合もある。

不成立事例では、双方の人間関係のぎこちなさが顕著である。その大多数が見合結婚であり、婚前交際によるなじみに乏しい。勃起不全、挿入前射精の夫は、長子、末子、1人子にかたより、中年以上の者では男子高の者が多い。生活史上同年輩の女性との交際の機会に乏しく、女性なれしていない。一方妻は同胞関係、学友等夫程著しい傾向は見られないが、男性なれの乏しい点は夫と共通する。同時に夫婦とも対人関係を円滑に処理しにくい性格的なかたさ、ぎこちなさが特徴的である。偏重的な欠陥ありと考えられる事例は、現在まで1例もない。夫には、夫人との婚前性交経験ありとする者も含まれる。

不調和が発生すると親や仲人に相談する例が多く、すべて性的不能者云々という話になり、双方の親族まで感情的対立にまきこまれ、家族に中立となる。中立前に産婦人科医等に行くものもあるが、その措置、指導はおむね適切でない。

性交不成立への対策は、上記実情に即して考えることができる。

# 慢性アレルギー性皮膚疾患者の人格像(その一)

## 慢性蕁麻疹患者について 内海 混(千葉大学)

臨床において、われわれ臨床家がつくづく感する二つの一つに、同じ疾患を有する患者には、その態度・言語・行動から受け取ると思われる何か、ある共通の雰囲気があると言う事実である。

われわれは今まで、この問題に関する、種々の皮膚疾患の症例について、それら患者の有する人格を調べて来たが、これら疾患を発生させた体質的因素と一致した患者自身の気質的傾向が窺われるべし。同一疾患にも異質の類型があり、異種の疾患にも同一の性格特性を見出される場合が多くなる。

今回は慢性アレルギー性の皮膚疾患として、我々皮膚科臨床を訪れる慢性蕁麻疹患者のパーソナリティを YG, PF, ロールシャッハ・テスト等に SCT を加えて調査し、その心理的側面を観察すると共に HCl Histamin 皮内反応、塩化ナトリウム皮内反応、アレルゲン・テストにより、自律神経反射との相関を統計的に処理し、若干の知見を得た。

対象は、口立口府台病院(市川市)皮膚科を訪れた連日あるいは数日の間隔を以て、月余・年余にわたり反復する数々の搔痒感と共に蕁麻疹発作を有し、その発生機転も明確には把握し得ざる所の、所謂「慢性蕁麻疹」の患者を選んだ。

矢田部・ギルフォードにより、その情意的側面を観察するならば、そのプロフィルは大略アトピー・皮膚、光線皮膚過敏とは類似の、円形脂毛症となり若干の変り有意差を認めるパターンとなる。

活動的指標の高値は、従来の諸家の報告に反する結果であるが、異種グループの混在による影響を考慮した。

PF では、障害優位・自己防衛・要求固執型で、内罰的傾向が強く、無罰的傾向が弱い。まことにアレルギー性の皮膚症とは有意に異なる。

ロールシャッハ・テスト 30例の所見を統計的に観察するならば、決定因・反応内容に従来の諸家の成績と大差なく、W%・F%・老年令の実連では正常人集団の分布と一致する。

知的側面・情意的側面・体験型の側面を立体的に比較すると本疾患はアトピー性の集団に近い。しかし、その分布は、F% 平面で本群より遙かに 4 倍が認められ、また情意的側面にも、平均値をはじめとする分極現象が存在し、体験型も、E% 優位と S% C:M および M 優位との間に大略 3 種のグループが存在するものと如くである。

平均値によると正規分布であり、正常人集団に對し、本疾患患者集団は、後令平均値に有意差なくとも、上記の人格的指標の分極的なものに属する。今一度分類していくと、全く別個の集団に分り合つて居る。本質的に純粋な症例群が成立する可能性が予測され、今回は下記 3 群に仮定して見た。

グループ A：攻撃的・自己防衛

グループ B：主觀的・複雑・矛盾・無思慮

グループ C：逃避的・抑鬱的・不安・不満

$10^6$  倍 HCl Histamin および 2500 倍塩化ナトリウム皮内反応の紅斑直径は大略、正規分布して、そのまゝでは有意な  $P < 0.05$  となり難いが、上述 A・B・C 3 群別に比較すると、A グループのナトリウム有機に分散して、これが認められた。

連絡先：103 東京都中央区日本橋西園44 Tel. 851-8544

# 体験過程 EXPEriencing における融合枠の転移

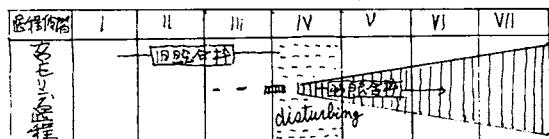
## カウンセリング過程における人格要素の研究(六)

飯坂 銀次  
(東京農業大学)

岸田 博  
(東京女子体育大学)

目的: カウンセリング過程の要因である体験過程は感情的、即時的な有機過程であって、次第に潜在的意味が明確化される。体験過程のプロセスは、初は体験過程は意識されない。従って現在は過去によって認明される。体験過程に近づくと、融合枠は混乱し、何ヵ方向(Richtung)に惑せられる。融合枠は次第に明確化され、それは体験過程の流动の中で更なる進歩へと進む。高の意識は成熟する。我々は面接を経て、体験過程における特徴、融合枠の転移を明らかにし、カウンセリングにおいて、人格が negative の程度から、positive の程度へ発展する過程を明らかにし、両者の統合による Real Self の解明の一助となる。

体験過程の模式 (四段階過程を主とする)



方法: 調査の対象は以下の 5 事例と 3 面接であった。

| 事例 | 来連者   | カウンセラー | 回数 | 主 実序 |
|----|-------|--------|----|------|
| 短  | 女高生 A | 石原文理   | 3  | 人生観  |
| 中  | 青年 A  | 飯坂銀次   | 8  | 妄想恐怖 |
| 中  | ④親 N  | 尾崎勝    | 8  | 童子   |
| 中  | ④親 K  | 八木由夫   | 10 | 学業不振 |
| 長  | 大学生 O | 飯坂銀次   | 22 | 正視恐怖 |

これらの面接高年生、八木由夫、岸田博、飯坂銀次の人で、過程尺度(相談学研究 VOL.3 NO.2 1970)で評価された。併せて成功例である。

結果:(1) 事例短 1 や 3 長 1 の後について、各過程尺度に到達する面接回数を調べ、それらの平均回数を求めるところ表のようになる。

| 事例 | I | II | III | IV  | V   | VI   | VII  |
|----|---|----|-----|-----|-----|------|------|
| 短  |   |    |     | 1.0 | 2.0 | 3.0  |      |
| 中  |   |    |     | 1.5 | 3.8 | 5.0  | 7.4  |
| 長  |   |    |     | 3.0 | 8.0 | 17.0 | 22.0 |

二つ目まで融合枠の転移はⅣ段階であるが、4回以下の面接で行なわれているが、長い事例では長い間(8回の面接)で行なわれる。この融合枠はⅣ段階、Ⅴ段階等で成長をとげ、第VIやVII段階で成熟し、Real Self になる。

(2) 次に融合枠の転換の実例を示す。

[大学生の君の場合]

1. **[自然融合枠]** (自然的・消極的) (1, 2, 3回面接、Ⅳ段)

①精神的ストレスが強くて、1日中緊張して疲がやせる。②人の目を見るのがいやで、人に会いたくない。(正視恐怖症)

2. **[融合枠の転移]** (混乱の中に活動) (5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12回面接、Ⅳ段)

①体をきらめたりして、こういうものだと割り切って流さずちがよい。②えほんが好きになり。よく見せようとするといはいやらしい。フランクには全くない。③僕は内向性で人から嫌われると思ってるがなぜか理解ではない。④人間関係に恩りやりかちく人は汽だり。付合のためには、いやなこともやう。

八. **[新融合枠]** (肯定的・積極的) (22回面接 Ⅴ段)

①視線があっても気にならない。症状をかくさんで、僕は視線が強いぞといって、それで「嫌なら仕方ない。ちりのまはあつてもうがう。②これまでの外側を気にしてきたが、いくら飾っても実感は薄うぬ。内側をみよ。③神にしてみると、悪い雨が大きく見える。人並み疾患もあるし、打第もある。人の短所は皆もつてゐる。④これしきな人間だ、いふ基礎の上に自己を高めたい。⑤~~無病~~ = 4で後退したくおじまい。病氣だらうが何でかううが、大いにやうなくてはならぬ。

総括: 結果画面において、来連者は前段の Negative と後段の Positive の融合枠を絶えず繰り返す。そこで Real Self は成熟する。これは絶えず矛盾する二つの自己は同一となる。

連絡先: 東京都中野区江戸川2-17-10 飯坂家。

# 運動能と言語との連関性に関する研究

—児童期を中心として—

三島二郎 ○守屋国光  
(早稲田大学教育学部)

目的：幼児期に於いて発達的交代が認められると一般に言われている運動能と言語について、その両者間に児童期に於いていかかづら連関性がみられるかを検討することとする。

方法：(1)検査項目 本研究に於いては運動能に関する検査と言語に関する検査を行なうが、たゞその内容は次の如くである。

運動能については、手腕の運動能(握力、筋力・持久力・速さ・着用さ・両手協調・正確さ)について調べた。具体的にはそれぞれ、握力、握力の反復、打叩、玉拾い、棒差、狙打・追跡の7種目である。

言語については、話語について、単語の列挙、報告、作話の3つを課した。具体的には30秒間での単語の列挙、報告では前日に家でしたことについての詳細報告、作話とは運動会場面の図版に対する作話であり、主として語の流暢さをみるかのと考えた。

(2)検査対象 幼稚園年長児(5:3-6:6)50名(男児26、女児24)、小学校2年生(7:3-8:6)61名(男児30、女児31)、小学校4年生(9:3-10:6)74名(男児30、女児44)、小学校6年生(11:3-12:6)60名(男児30、女児30)。計245名。いずれも都内在住の者で、左利きの者と無口の者は被験者からば除外した。

(3)検査期日 昭和42年6月1日-10月22日までの間、但し8月を除く。全て個人検査による。

結果：各運動能との言語の相関を各学年毎に求めて

Table 1 各運動能と言語との相關係数(Pearsonの相關係数) SS...知能偏差値、比...比体重

| 学年 | SS     | 比      | 握力    |       | 持久力    |      | 打叩    |         | 玉拾い   |        | 棒差      |       | 狙打    |        | 追跡    |       |
|----|--------|--------|-------|-------|--------|------|-------|---------|-------|--------|---------|-------|-------|--------|-------|-------|
|    |        |        | R     | L     | R      | L    | R     | L       | R     | L      | R       | L     | R     | L      | R     | L     |
| 幼  | .285*  | -.105  | -.244 | .003  | .282** | .234 | .575  | .203    | .130  | .550** | .089    | .080  | -.054 | .399** | .146  | -.146 |
| 小2 | .935** | -.173  | .676  | .302* | .168   | .142 | .208  | -.815** | -.204 | -.322  | -.532** | .112  | -.144 | .051   | -.050 | .016  |
| 小4 | -.173  | -.253* | .081  | .097  | -.106  | .103 | -.763 | -.627   | -.486 | -.292  | -.362   | -.178 | .139  | -.371  | -.275 | .356  |
| 小6 | .567** | -.121  | -.317 | .038  | -.081  | .375 | -.297 | -.488   | .051  | .071   | -.155   | -.286 | -.134 | -.079  | -.070 | -.258 |

\* p < 0.05 \*\* p < 0.01

(連絡先) 東京都武藏野市吉祥寺東町2-17-3 明道館

## 精神テンポに関する基礎的研究(第39報告)

三島二郎 浅井邦二  
(早稲田大学教育学部) (早稲田大学文学部)

望月稔 ○藤田道明  
(大森第六中学校) (早稲田大学教育学部)

目的: Congenial wayによる作業速度と他の作業速度(Maximal way)との関係について検討すること。

方法ならばに手続: 作業としてはクレベリン精神作業検査をとりあげ、被験者(大学生)20名を集中法で連続200試行(1試行は加算30個で構成)の加算作業を作業制限法により全力作業せしめた。検査用紙は金子書房発行の120型で、1枚の用紙を30つに区切り、1人について3枚が用いられた。なお本作業前に同一の検査用紙を用い“自分でちとでも書き易い速さ”(congenial way)で本作業の精神テンポを測定した。

以上の実験終了後約2ヶ月も経て同様の加算作業を行わしめることにより、さきの効果をしらべた。また同時に、体調作業、不等号記入、暗算に関してCongenial way, Maximal wayの順に同一の検査用紙を用いて作業を行わしめた。そして200試行の加算作業が他の作業の成果にどのように影響があるかを検討した。

本研究ではすべて個人実験によつたが、この他に聴知覚、運動領域の精神テンポをも別に測定された。

結果: 表1の構成は以前に行われた映像録画写真に関する研究(日心第32回大会発表論文集P.157)に従つた。各回の平均値はほぼ同様の値を示した。さらにこれとC.W., M.W. (Congenial way, Maximal wayの略)の相関は非常に高く、またC.W., M.W.間の相関も高かつた。これを平均値でみると、C.W.に関しては1組を除いてどの差は有意ではなく、だが、M.W.に関してのその差はほとんどが有意であった。またC.W.とM.W.の間には

表1 3種の手続の関係

|           | 1    | 25   | 50   | 75   | 100  | 125  | 150  | 175  | 200  | 1-25 | 26-50 | 51-75 | 76-100 | 101-125 | 126-150 | 151-175 | 186-200 | M.W. | C.W. |
|-----------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|-------|--------|---------|---------|---------|---------|------|------|
| C.W.      | 0.73 | 0.73 | 0.79 | 0.87 | 0.80 | 0.83 | 0.83 | 0.88 | 0.80 | 0.81 | 0.83  | 0.82  | 0.66   | 0.85    | 0.70    | 0.85    | 0.87    | 0.85 |      |
| M.W.      | 0.83 | 0.77 | 0.82 | 0.70 | 0.49 | 0.86 | 0.95 | 0.86 | 0.89 | 0.81 | 0.40  | 0.92  | 0.93   | 0.91    | 0.93    | 0.74    | 0.93    |      |      |
| $\bar{X}$ | 25.4 | 30.9 | 26.8 | 25.9 | 27.6 | 27.0 | 25.8 | 28.9 | 27.3 | 28.9 | 27.1  | 26.2  | 26.4   | 26.8    | 26.9    | 26.8    | 27.6    | 21.8 | 25.1 |
| C.W.      |      | **   |      |      |      |      |      |      |      |      |       |       |        |         |         |         |         |      |      |
| M.W.      |      | **   | **   |      | **   | **   | **   | **   | **   | **   | **    | **    | **     | **      | **      | *       | *       | *    | *    |

\*\* : .01, \* : .05

有意な差が認められなかつた。

以上の事実から、フレペリン精神作業検査をマスターすることによって得られた作業速度は同一作業の精神テンポと同型であることが見出された。

表2は4種の作業速度のC.W.とM.W.の関連性についてあるが、相互に相関もかなり認められ、有意な差もほとんど生ぜず、本質的には別のものではないようと思われた。そこで先の加算作業の場合と同様、他の3種の精神作業のC.W.とM.W.と各回の作業速度との関連性を検討してみた。その結果はやはり加算作業の場合と同様の傾向を示した。

以上の事実に

表2 4種の作業速度間の関係

|      |    | 又    | 標準    | 暗算   | 加算    |
|------|----|------|-------|------|-------|
| C.W. | 採消 | 0.57 | 21.2  | 0.57 | 0.36  |
|      | 符号 | 25.4 |       | 0.53 | 0.57  |
|      | 暗算 | 27.2 |       | 0.87 |       |
| M.W. | 採消 | 15.2 | -0.20 | 0.08 | -0.20 |
|      | 符号 | 20.2 |       | 0.40 | 0.70  |
|      | 暗算 | 22.7 |       | 0.90 |       |
| C.W. | 採消 | 21.2 |       | *    |       |
|      | 符号 | 25.4 |       |      |       |
|      | 暗算 | 27.2 |       |      |       |
| M.W. | 採消 | 15.2 |       | **   | **    |
|      | 符号 | 20.2 |       |      |       |
|      | 暗算 | 22.7 |       |      |       |

\*\* : .01, \* : .05

|      | 又  | 標準   | 暗算 | 加算 |
|------|----|------|----|----|
| C.W. | 採消 | 21.2 |    | *  |
|      | 符号 | 25.4 |    |    |
|      | 暗算 | 27.2 |    |    |
| M.W. | 採消 | 15.2 |    | ** |
|      | 符号 | 20.2 |    |    |
|      | 暗算 | 22.7 |    |    |

連絡先: 東京都新宿区市谷山伏町8

# 親と子との対話

山根 薫  
(立正女子大学)

長塙 和弥  
(埼玉大学教育学部)

目的 さきに生活行動についての価値観における親子世代間のそれについて発表したが、さうに親子の考え方方にどのようなつながりがあるか子どもの生活に関連してかられるかを明瞭にしようとした。

新家 首都圏内にある文教都市のたて中にある本学校の生徒男児70名 女児52名あるうちからの両親121名、そのほとんどは母親で116名、父親は5名にすぎない。これらを調査対象とした。

方法 児童に対しては専用紙によって調査した。児童に対する予備集計をひとまず終ったところ、親に対する面接調査を行なった。この面接は学期末に組担任教師と親との懇談会に登場した親に施したものである。面接者は卒業を目前にした教育学部の男女学生である。実施期日は昭和44年3月である。

調査結果 調査対象が中都都市(人口28万人)に所在する小学校児童であり、親であるという事情から、この結果が現代の親と子との一般的な考え方を象徴するとはいえないが、しかしともかくにも現代都市に生きる人々のもつ特性の一つの断面を露呈している。それらの事実は次のようである。

(1) 家族としての同胞数は、本人を除いて男児で平均1.3人、女児平均1.1人である。同居家族は、祖父母あるいは祖母に準ずるもののが61%いる。すなわちほぼ1/4は核家族となり。

(2) 児童の帰宅時に父の在宅しているのは12%程度である。商家が多いからである。母の77%は在宅している。

(3) 夕食を子どもと共にしない父は19%いるが、母の87%は一緒に食事をしている。両親ともに一緒にないものが9%いる。当然ここは断絶のおこる条件がある。

(4) 子どもの側からみで勉強を「よく」みてくる父は7%「ときどき」みてくる父のは49%である。母はこの二つの場合をあわせると80%近くになる。

(5) 子どもが親の年令や生年月日を知ることは、家庭生活の密度を示す一つの指標と考えられるが、父については男児34%、女児31%がその年令を知っている。母についてもほぼ同じ。生年月日については男児が20%しか知らない。男は女よりも劣る。

(6) 子どもの友だちの数について全く知らない親が10%近く、友だちの名前のいえうる親は8.9%で、親子で全くくりちがっているものが30%もいる。

(7) テレビの子ども番組の何を好んで見るかについて親子それぞれの指摘したものの一つ数度は、男児では男児での9、女児では1.8番組だけであり、親の好みのところで子どものあげたものとの一数度は1.1番組。

(8) お小遣いは男児5.87円、女児5.07円、最頻数5.00円、子どもはその金額に満足していると思われるに反して男児の親73%、女児の親の77%は満足していないと思うというが、児童は現実の充実を望む。

(9) どうじの手伝いをしないものが24%いるが、親からみると70%のものはしてくれない。

(10) 学業成績について子ども自身「ぶつう」だと思うものが58.5%である。自分で「わすい」と認めているもののものは14.8%いるが、親の目からは見え、9%はわざり。親が子どもの成績に不満を感じているものは45%、しかたがないと思うもの37%で、満足しているものは16%にすぎない。

(11) 進学について男児78%、女児44%が4年制大学を考えている。短大をいれると女児は16%になる。高専だけが1.2%いる。親の望む率は子より多い。

(12) 子どものしつけについて父は男児は3.5つと考へているものの48%、あまりが30.3%，母は6.3.1%が3.5つ、さつりが23.8%いる。

(13) 将来の生活設計において男児は仕事を、女児は家庭生活に重きを置いている。男児にありても第2位は家庭の幸福だとしている。

(連絡先 336 浦和市高砂 4-16-10)

# 小集団活動の研究

## 一関係構造に関する考察—

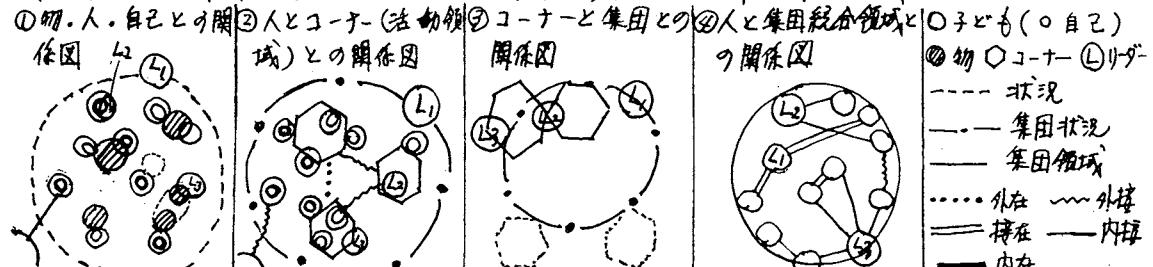
大井 増美  
(お茶の水女子大学 児童臨床研究室)

この研究はお茶の水女子大学児童集団研究会でおこなわれている母子集団活動に関する系統研究の一部である。ここでは1970年の集団指導、実践研究活動に基づいて考察をすゝめる。「関係構造」の研究は、関係弁証法(1.後割論・2.交差論・3.(関係)構造論)における重要な研究課題であり、本研究ではこの「関係構造」を「関係状況に成立していき関係のしくみ(関係体

系)」ととらえる。集団活動の指導のねらいひとつは、集団関係状況について今ニニでどの発展的な関係のしくみができようにすることである。本研究の目的は「関係構造」のねらい方の観点から、集団状況における「関係構造」をあきらかにし、集団活動における発展的な指導を可能にすることである。この観点から個・集団関係の発展に即しぬくりような関係構造をとらえる。

| 個・集団<br>関係体<br>にはい方 | 個(メンバー、リーダー)と集団 |                         | 個と下位集団と集団(全体)           |                |                           | (※↓発展の順)                  |                     | 集団と集団              |                     |
|---------------------|-----------------|-------------------------|-------------------------|----------------|---------------------------|---------------------------|---------------------|--------------------|---------------------|
|                     | 物、人、自己との関係      | 物との関係<br>(使つかう)<br>(性質) | 人との関係<br>(働きかけ)<br>(性質) | 自己との<br>関係     | コーナー活動領域との関係              | 交差領域<br>との関係              | コーナーと<br>集団との<br>関係 | 集団統合<br>領域との<br>関係 | 全集団と<br>外集団と<br>の関係 |
| 関係外在的 固有的           |                 |                         |                         |                |                           |                           | コーナー<br>明確化         |                    | 関係<br>表現            |
| 関係外在的 道具的           | 関係<br>認知        |                         | 役割<br>付与                | 役割<br>維持       | コーナー<br>維持的               | 他コーナー<br>認知               | 領域<br>明確化           |                    | 関係、<br>認成           |
| 関係潜在的 基本的           | 関係<br>↓<br>操作↑  | 自己<br>操作↑               | 役割<br>↓<br>操作↑          | 役割<br>↑<br>操作↑ | コーナー間<br>↓<br>媒介的↑<br>発展↑ | コーナー間<br>↓<br>媒介的↑<br>発展↑ | 方向性<br>↓<br>提示↑     | 状況<br>操作↑          | 機能的交流<br>機能的操作      |
| 関係内在的               | 関係<br>促進        | 自己<br>発展                | 役割<br>取得                | 役割<br>促進       | コーナー<br>促進                | ユニーク<br>間<br>促進           | 方向性<br>促進           | 状況<br>促進           | 関係<br>促進            |
| 関係内在的               |                 | 自己<br>発展                |                         |                |                           | コーナー間<br>維持               | 方向性<br>維持           | 状況<br>維持           | 関係<br>維持            |

1)リーダーが集団活動に参加しある動態的な関係構造を今ニニでとらえて関係発展的にふるえこと(統合・操作)により個と集団活動(個・集団関係)の発展がもたらされる。ある日の集団活動の発展に即して、上の表の観点からとらえた関係構造(リーダーのカクカリオを含む)を次のようド構造図によつて示す。



共同研究者: 赤井美智子・児童集団研究会

(連絡先)お茶の水女子大学児童臨床研究室

# 小集団活動の研究

## 交差教育法理論に関する一考察

赤井美智子(お茶の水女子大学児童臨床研究室)

〔目的〕お茶の水女子大学児童臨床研究室で進められている研究活動の成果をもとに、「交差教育法理論」の研究の一端をなすために、その基本的原理と特性について考察する。

〔交差教育法〕関係弁証法を基礎理論とする教育方法である。2つ、あるいは2つ以上の領域を交差させて、どちらの領域にも含まれる共通領域を形成し、その領域を交差領域と呼ぶ。交差領域の成立は、3つの領域からなる三者関係の成立を意味し、それぞれの領域の関係弁証法的発展が促進される。

・領域とは、ある機能的性質をもつた力の働く範囲である。小集団活動の研究においては、個人、集団、下位集団に対応する3つの領域をとらえる。個人と個人、個人と下位集団、個人と集団、下位集団と下位集団、下位集団と集団、集団と集団などの関係に対応する領域の組み合わせ(領域関係構造)がある。それぞれの領域は、交差領域の発展をもたらす機能的・空間的単位である。

・発展的交差領域とは、交差領域が形成、成立、発展過程において、交差する3つの領域に隣しても、接在的になつて、方、すなむら、脇筋的役割になつて主導的にけんらうことの可能な状況にある共通領域である。発展的交差領域においては、交差する3領域相互の特性や差異が関係することにより、関係(人、自己、物の関係)が拡充、複合化し、さらに、新しい関係構造が創造され、関係の発展がもたらされる。

・交差(教育法)理論は、場の力や領域の概念を含み、集団状況や集団、個人などの関係を図式的(形象的)に把握することを容易にする。このことは、交差教育法の開発にとって極めて重要である。

〔交差教育法における指導者の認識と行為〕どの領域とどの領域をどのように交差させるかは、指導目標に即し、その指導目標は、指導者により、集団の発展に即して設定される。

・交差領域の形成には、状況における領域間関係を図的にとらえ(形象描画)、相互に共通な基本的事実を媒介として、交差領域の成立をはかり、各領域の特性を明らかにして、その相互発展的関係が展開するようになる。

・小集団活動の初期では、個人と個人との交差や、個人と下位集団との交差の成立数が多く、次の段階では、下位集団と下位集団との交差が可能になる。交差領域は集団状況にみける部分領域として、他領域と並立的に存在するのではなく、集団を接在的になつて、集団全体の統合化を同時に意味することもある。指導者は、交差させた領域相互を集団状況とのかかわりににおいて三者の間に認識する。発展的交差領域の形成、成立、展開過程において、認識のレベルにおいては、常に、関係接在的になつてをし、行為のレベルにおいては、関係発展状況に即して可変的な関係のになつてをして、交差するそれぞれの領域が接在的になつての可能な場面を用意する役割が期待される。

〔交差教育法による小集団活動の発展〕交差教育法は、2つ、あるいは、それ以上の領域の交差から、各領域の独立性を明確化したり、領域相互を統合したり、新しい領域の分化を生みだすことができる。このような領域相互の力むけ的な変化は、集団の重心が移動するところの集団の関係構造の変化であり、集団の弁証法的な発展である。集団のある領域と他の領域との交差は、各領域を構成する個人に即して言えば、自分の属する領域と他の領域を分化して認識して、さらに新しく成立する状況を自己の中に再構造化し、それに即した発展的役割を接在的になつて体験の成立が可能になることである。その体験と認識が、関係発展の方向を洞察し、発展、変革を促進する認識と行為を育てるのである。

〔共同研究者〕大井晴美、集団(指導)研究会(連絡先)お茶の水女子大学児童臨床研究室

# ゾンディ・テストの研究：平均的プロフィルについて

広井 甫  
(近畿大学)

目的：ゾンディ・テストの各衝動因子ごとに、写真の選択枚数の平均値を求め、それをもとに平均的プロフィルを重く。それを臨床における参考資料に用いる。

方法：被検者：高校生男子 70名、大学生男子 112名、一般男子 100名、女子（高校生、大学生、一般を含む）59名。総計370名。高校生は全員3年生、大学生は1~4年生、一般は、会社從業員を15歳から50歳代まで、大部分は、18歳から24歳。テストの方法：個別に行なう時は対法通り、集団で行なう時は、組ごとに写真を配列したものと写真複数し、6枚とじにしたものと配布して、自由に選択させる。回答用紙を別に与える。テストの時期：1965年から1970年まで。機会のある時に実施したので、季節、月日等は一定しない。処理：衝動因子ごとに、プラスとマイナスに分け、選択された写真枚数の平均値を対象群別に算定。それに基づきプロフィルを重く。各群間の平均の差の有意性を検定。

結果：類型写真的選択状況：第1表は高校生男子の、  
第1表 因子別、組別選択状況(+) (%) 高男

| ベクター | I  | II | III | IV | V  | VI |
|------|----|----|-----|----|----|----|
| S    | h  | 19 | 40  | 59 | 51 | 60 |
|      | s  | 3  | 61  | 20 | 31 | 4  |
| P    | e  | 50 | 9   | 20 | 10 | 33 |
|      | hy | 56 | 1   | 11 | 23 | 3  |
| Sch  | K  | 14 | 3   | 6  | 23 | 4  |
|      | p  | 36 | 23  | 24 | 30 | 71 |
| C    | d  | 9  | 16  | 23 | 24 | 11 |
|      | m  | 14 | 47  | 37 | 7  | 13 |

因子別、組別の写真選択状況を示したものである（好きのみ）。表に見る限り、必ずしも各群平均して選択されていない。例えは hy は、I、IV組で多くのものによって選ばれるが、他の組では、選ぶものが、ごく少ないといった偏りがある。同様の傾向は K にもある。

平均選択枚数：第2表-a, bに示したものがそれであ

第2表-a. 平均写真選択枚数 [好み]

|     | S   |     |     | P   |     |     | Sch |     | C |  |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---|--|
|     | h   | s   | e   | hy  | k   | p   | d   | m   |   |  |
| 高校生 | 2.8 | 1.3 | 1.3 | 1.0 | 1.0 | 2.1 | 1.0 | 1.5 |   |  |
| 大学生 | 1.9 | 1.3 | 1.2 | 0.9 | 0.9 | 2.0 | 1.1 | 2.7 |   |  |
| 一般  | 2.2 | 1.3 | 1.2 | 1.0 | 0.9 | 2.3 | 1.0 | 2.1 |   |  |
| 女子  | 2.4 | 1.3 | 1.1 | 1.0 | 0.9 | 2.2 | 1.2 | 1.9 |   |  |

-b-

[さらに]

|     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 高校生 | 0.9 | 2.1 | 1.2 | 2.1 | 2.0 | 1.1 | 1.2 | 1.4 |
| 大学生 | 1.1 | 2.1 | 1.3 | 2.3 | 2.1 | 0.9 | 1.2 | 1.0 |
| 一般  | 1.0 | 1.8 | 1.5 | 2.1 | 2.0 | 0.9 | 1.6 | 1.1 |
| 女子  | 0.9 | 1.9 | 1.7 | 2.1 | 2.2 | 0.7 | 1.3 | 1.2 |

る。プラス側では、h, m を除いて、ほとんど、対象群間に差はない。h では、高：大、高：一、一：女が、上 1% レベルの有意差、では、高：一、大：女が上 1% レベル、高：女が 5% レベルである。マイナス側には少しへらつきがあるが、群間に大差はない。ただ、已で、高：女、大：女、d で、高・大：一が 5% レベルで有意差がある。[プロファイルは略]

考察：(1) アラス、マイナス側とも、総数が 12 枚であるから、因子平均で 1.5 枚となる。それから考えると、プラス側、h, p, m が高く、hy, k, d が低い。マイナス側では、s, hy, K が高く、h, e, p, が低い。これが、日本人の特徴であるかどうかはわからぬが、その点も今後追究したい。

(2) 対象群ごとに差があるのは上記の通りであるが、高校生が最も高いとされ、大学生が m でやや下位とされる。特に K は、特記に値する。また高校生が m で低いこと（平均の 1.5 に相当するが）も注目されてよい。高校生の h は「愛情欲求」はわからないでもないが、大学生の m（オラル・エロティシズム）は、判断に苦しむ。あるいは、サンプルの偏りが原因かもしれない。この点も今後の課題である。

(原稿元) 東大阪市小若江221、近畿大学、(06)722-1144、Ex295

書きことばの発達に関する研究(Ⅱ)

横山 正幸  
(福岡教育大学)

# 3歳児保育に関する基礎研究(第2報)

— 3歳児観および保育者の資質を中心として(II) —

○ 後藤嘉余子 森重敏

(東京家政大学児童学科) (東京都立大学人文学部)

目的：3歳児保育に関しては、基本的課題や今日的課題の面から種々の問題が横たわっているが、発達的教育的軸機に立つ3歳児の年齢的重要性と教育的意義とに鑑み、3歳児保育の基礎的問題として、保育者自身の問題意識を明らかにし、同時に保育者の資質について検討を試みようとするものである。今回は、母親・保育者志望学生を対象とした前報告に引き続き、施設保育者による調査結果を中心的に報告する。

方法：(1)手続 3歳児観、3歳児保育重視理由、3歳児保育者として望ましい資質等に関する質問紙を作成し、幼稚園・保育園の保育者に対して直接または郵送により回答を求めた。

(2)調査対象 東京および岡山を中心とした公・私立幼稚園・保育園の保育者100名(教諭80、保母13、園長3、主任1、その他3)。なお、被調査者の年齢は20~54歳の広範に亘っており、平均28歳。凡そ半数(43名)が短大卒で、大学卒28名、幼稚園養成所卒は17名。

(3)調査時期 昭和44年4月~昭和45年8月

結果および考察：(I)3歳児についての意識 i)3歳児観 3歳児に関する連想として、反抗期、自己中心性等発達的特質に関連する項目が最も多く、人格形成、

表1 3歳児観 発達期といった3歳時期

| 項目       | F   | %      |
|----------|-----|--------|
| 発達的特性    | 108 | 34.18  |
| 3歳時期の重要性 | 72  | 22.78  |
| 幼児的素朴性   | 65  | 19.41  |
| 生活特徴     | 38  | 12.03  |
| 教育的重要性   | 36  | 11.39  |
| 診断的措置    | 3   | 0.96   |
| 環境的重要性   | 1   | 0.32   |
| その他      | 3   | 0.95   |
| 計        | 316 | 100.01 |

の重要性がそれに次いでいる(表1)。また、I

判程度であるが、(i)け

・教育的重要性、生活特

徴等も挙げられており、

3歳時期における顕著な

発達的特性の理解および

年齢的重要性の認識の他、

教育の困難性や幼児の生活特徴についても理解と関心

が示されているといえよう。ii)3歳児保育に対する認識 3歳児保育の重視理由という観点から回答を求め

た結果が表2である。凡そ半数は性格形成を重視理由としており、また、精神発達を加えた2項目には全体の約8割が含まれ、前述の3歳時期の年齢的重要性と教育的意義とが強調されてゐるものと思われる。

(2)3歳児保育者として望ましい資質 i)保育者に要請される望ましい資質を16項目に亘って設問し、望ましい順に1~3番まで挙げられた項目について、第1位に選択され

表2 3歳児保育重視理由

| 理由           | F   | %      |
|--------------|-----|--------|
| 性格の基礎形成期     | 52  | 48.60  |
| 顕著な精神発達期     | 33  | 30.84  |
| 能力の基礎形成期     | 9   | 8.41   |
| 早期幼児教育の必要性   | 6   | 5.61   |
| 幼児教育の重要性の認識化 | 3   | 2.80   |
| その他          | 4   | 3.74   |
| 計            | 107 | 100.00 |

表3 保育者として望ましい資質

| 項目              | 3歳児保育者 |       | 保育者一般 |        |
|-----------------|--------|-------|-------|--------|
|                 | F      | %     | F     | %      |
| 身体的健康           | 28     | 25.23 | 31    | 29.43  |
| 豊かな人間性          | 27     | 24.32 | 25    | 22.12  |
| 情緒的安定           | 21     | 18.92 | 17    | 15.04  |
| 性、情緒安定          | 14     | 12.61 | 19    | 16.81  |
| 洞察力・判断力・注意力     | 8      | 7.21  | 5     | 4.43   |
| 明朗性             | 5      | 4.50  | 2     | 1.77   |
| 包容力             | 4      | 3.60  | 3     | 2.66   |
| 主要条件として挙げられていない | 3      | 2.70  | 7     | 6.19   |
| 使命感             | 1      | 0.90  | 1     | 0.89   |
| 実行力             |        |       | 2     | 1.77   |
| 責任感             |        |       | 1     | 0.89   |
| 豊かな教養           |        |       |       |        |
| 一般的の場合と比較       | 111    | 99.39 | 113   | 100.00 |

児保育者に特に強調される要件は認められない。ii)望ましい資質として重視され程度を得点化してみると、精神的健康ともいえる情緒的安定が3歳児保育者に強調されている。 $(\chi^2 \text{検定 Level } P<.001)$  即ち、情緒的安定は身体的健康と共に保育者一般の要件でもあるが、情緒の基礎完成期にあらず3歳児の発達特性を考慮すると、3歳児保育者に特に望まれる資質といえよう。

今後更に対象の拡大とはかり、累積的調査によること多角的に追究したい。(連絡先 東京家政大学)

# 育児語に関する一研究(第2報)

— 2歳児・3歳児の母親の場合 —

加藤 純子

(東京家政大学)

**目的:** 幼児の日常生活の中で不可欠な存在である専門の育児者(通常母親)の、適正かつ積極的な働きかけが、幼児の言語発達に大きな影響を及ぼすことは周知の通りである。村田は育児者が意図的或いは無意識的に幼児に対するのみ用いる語を育児語とし、その特徴と①音声的強勢が加えられている。②一般的に幼児にとって模倣しやすく、③特にきわだつた音声パターンをもつ、としている。本研究はこの様な意味から現状における育児語の実態を把握分析し、幼児の言語発達に伴う育児語の消長を捉えようとするものである。

**方法:** (1)調査対象 東京都内に居住する2歳児・3歳児の母親各100名。この年齢範囲は22歳から43歳にわたっているが、特に20代後半から30代前半にかけて8割のものが集中している。主な生育地は、地元の東京が全体の3分の1強、関東、東北が次いで多い。現在の家族状況は8割以上が独家様である。

(2)調査期間・場所 昭和45年6月～8月、東京都保健所及び対象者の自宅。

(3)調査方法 村田の挙げた42項目の語について調査用紙を作成し、2歳児・3歳児をもつ母親に個別的に面接し、その際受けた報告を片仮名で転記する。

**結果:** (1)項目別使用状況 2歳児の母親の育児語使用状況は延べ数2640語62.9%で、このうち「背負う」「抱く」「抱っこする」の2項目は全員が使用している。この他7割以上の育児語使用項目は17。成人語の占める割合は40項目/2840語30.6%と、(1)まだ3分の1弱にすぎず、未使用語も22項目276語と、6.4%を占めている。一方3歳児の母親の場合は、延べ数41項目800語19.5%と減少しているが、「背負う」「抱く」「抱っこする」の4項目では依然として3の使用率は顕著である。但し他の37項目はいずれも5%以下。逆に成人語の使用率は41項目3235語78.9%と高率であり、未使用語の報告は8項目65語1.6%にすぎない。

(2)育児語の種類・原型 2歳児の母親の場合、語種は2以上31にまで及ぶものもあるが、3歳児の母親では語種1～10項目にわたり、特殊な項目「仏だん」と除けば最高は語種6(2項目)ほどまでである。従って同一形態からの派生語と芳さられ語を整理した場合の原型数也非常に少く、最高4種であるが、2歳児の母親ではまだ10種を数える項目もみられる。

(3)擬音擬態語 このは非常に語種が多く、特に同一形態から派生語が著しい。2歳児の母親では代表的な語は24項目/61種225語に認められ、その次誤は動物5、動作状況等10、のりも93、飲食物4、3の他2となる。これも3歳児の母親の場合20項目32種92語と急激に減少し、擬音擬態語のもつ特性を裏付けている。20項目の誤認は次の通りである。動物5、動作状況等7、のりも93、飲食物各3、3の他2。

(4)重疊語 同一音声パターンの重疊や反復ともつ語を語形上から完全重疊形、不完全重疊形に分けて育児語を分類すると、2歳児の母親の場合前者は33項目915語にあたり、育児語全種数の34.7%、後者は35項目645語で24.4%、両者をあわせ重疊語は全体の54.1%に達している。これに反し3歳児の母親では前者20項目126語15.8%、後者は11項目166語20.8%で、重疊語全体としては36.5%ほどまである。

**考察:** (1)全体からみた育児語の使用状況は3歳児よりも2歳児の母親の方が高率であるが、幼児の日常生活の基本的な問題にからんだ項目においては同一傾向を示している。(2)2歳児には半数以上の項目にわたって擬音擬態語や重疊語を駆使し、豊かな表現を試みているが、3歳児になると逆に成人語の使用が激増する。この時期は発音器官や精神面での着しい発達により、幼児自身の言語生活も拡大してきている。こうした事実をふまえた上での変化であるならば、顕著な成人語の使用がいくつ好ましく傾向を示していると考えられる。

## 児童における心身のエネルギーについて(3)

竹原 昭典  
(東京都国分寺市立第一小学校)

目的：本研究は、児童理解の手がかりのひとつとして、児童のもつ心身のエネルギーについて考察しようとするものである。前回は、学習活動との関連を考察したが、今回は、学校でのあそび時間の活用、および学習や作業における集中性について、考察することを目的とする。

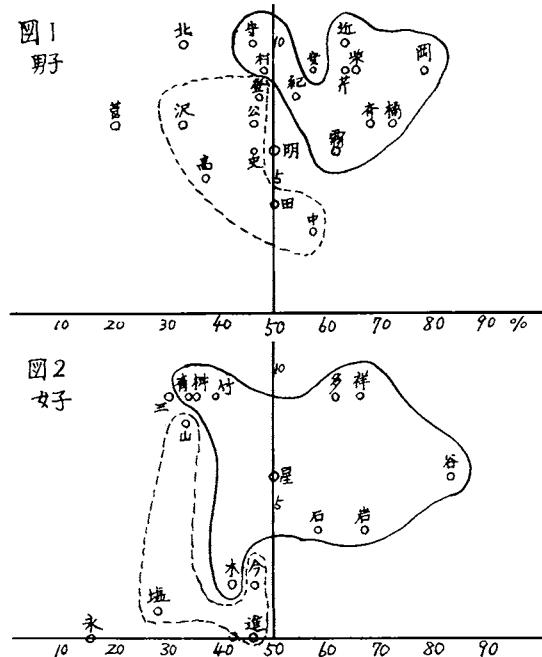
方法；(1) 対象は小学校3年生の1クラス 37名。  
(2) 日常の学習場面、生活場面の観察、および、午前中の20分(休み時間)における児童のあそびの継続観察。  
(3) ランダムに配列して400個の数から、4・6・7・8の段の九九の答を選び出す作業(正答約10%合)  
結果と考察

(1) 本校においては、休憩時間は校庭に出て元気に遊ぼう。という生活指導のめあてがきめられている。対象としたクラスの児童のあそびは、中心グループによる集団のあそびと、それに入らないでアラアラとして時間をつぶす児童と多様である。

(2) 活動のエネルギーという点から考えると、目的もなしに校庭をフラグラしていいる児童や、教室の隅などで遊んでいる児童より、集団の遊びに熱中している児童の方に、より多くの身体活動のエネルギーの燃焼があると考えられる。

(3)かけ算九九は、2年生後半から3年生にかけて習熟したものであるが、個々の計算において、特にわり算において、瞬間に答が出てくるまでにはなっていない。ランダムに配列された数の中から、ある段の答を選び」という作業には、心的エネルギーの集中がなければならないと考える。

(4) 図1・2は、10回(10日間)の観察による活動的なあそびの回数をタテに、九九の作業の正答率をヨコにして児童を位置づけたものである。身体的活動のエネルギーと、心的エネルギーの集中との関連をみようとするものであるが、これを更に、授業場面における観察と関連づけると興味深い結果が得られる。



(5) 図1・2から、あそびの中で身体的活動のエネルギーを燃焼させ、學習場面では心的エネルギーを集中させることのできる児童、または、その反対の児童の率をえがくことができる。

(6) 図の中の実線で囲まれた児童は、教師の観察の上から、学習に対する積極性、活発さ、自己統制などの点で、安定した学習活動を示していると考えられる児童であり、点線で囲まれた児童は、その反対の意味で、教師の眼をいつもひきつける児童である。

(7) 身体的活動のエネルギーはあるが、心的な集中力に欠けるという児童。—男子(北)(次)女子(山)(=)心的な集中力はあるが身体的活動がうまくいかない—男子(中)などは、環境的な、あるいは身体的な面で問題をもつている児童である。

(連絡先) 東京都国分寺市東元町2-1-20 市立第一小学校内

スライドで映写された数字と文字の読みやすさ  
(Legibility) 3.

柴田 徹  
(信州大学教育学部)

# 児童・保育科の学生に関する調査(1)

—大学進学の時期と要因について—

○石黒英子・宇津木貞子・大龍ミドリ  
(東京家政大学)

**(研究目的)**本研究の目的は、保育者の養成機関として一端をなしている4年制大学の児童学科および短期大学の保育科に在学している学生(以後児童・保育とする)の実態を把握するとともに両者の特異性をみようとするものである。

今回の調査は、学生の実態を把握するための質問項目作成過程の一環であり、調査対象も少しく、調査校も一度という制限があるためこの調査結果から児童保育を専攻する学生の一般的傾向を結論づけるには多くの問題点をもっている。しかしながらこの調査の結果からいくつもの知見を得たのでここに報告する。

**(研究方法)**被験者:都内某大学の児童学科1~4年生、同短期大学部保育科1・2年次学生、計281名  
調査実施:1970年4月

調査内容および方法:本研究のために作成した質問項目は10の大項目から構成され、さらにそれらはいくつかの小項目にわかれ、全体で52の項目に亘り自由記述により回答を求めた。10の大項目は次のようになつていて。①大学進学決定の時期と要因、②志望大学、学部、学科、専攻の順位、③専攻の認知度、④専攻に対する期待、⑤大学諸事についての認知と期待、⑥学科目の満足度と出席状況、⑦期待する学部科目、⑧学生生活の満足度、⑨教師との人間関係、⑩その他。

結果の処理:自由記述されたものについて、3から7のカテゴリにそれぞれ分類した。

結果、考察:本報告においては大項目1について結果および考察をあわせ、他の項目については省略、以下で報告する。

(1)表1の児童科学生の分布についてみると、a→dへと有効な差をもって決定時期がくわゆることが認められるのにに対して、表2の保育科学生の場合には、児童科学生のような顕著な差は認められなかつた。

(2)表3、4(当日配布)のa、c、dについてみると、児童科のaにおいては、「特に理由なし」の要因において高い割合を示している。項目a→dへと急激にその割

(表1) 児童科 N=113

| 項目            | 時期    | 小学生   | 中学生   | 高1・2  | 高3    | 卒業後  | 無答 |
|---------------|-------|-------|-------|-------|-------|------|----|
| ②大学へ行き始めた時期   | 30.97 | 38.05 | 19.47 | 6.2   | 0     | 5.31 |    |
| ④大学進学を決めた時期   | 6.19  | 15.93 | 55.41 | 11.50 | 1.77  | 6.19 |    |
| ⑤本校に受験を決めた時期  | 0     | 26.5  | 10.62 | 81.42 | 44.42 | 0.28 |    |
| ⑦児童科に受験を決めた時期 | 0     | 0.38  | 23.01 | 69.91 | 3.54  | 2.65 |    |

(表2) 保育科 N=168

| 項目            | 時期   | 小学生   | 中学生   | 高1・2  | 高3   | 卒業後  | 無答 |
|---------------|------|-------|-------|-------|------|------|----|
| ②短大へ行き始めた時期   | 3.57 | 29.76 | 42.26 | 20.83 | 0    | 3.57 |    |
| ④短大進学を決めた時期   | 0    | 9.14  | 50.0  | 32.65 | 0.6  | 3.57 |    |
| ⑤本校に受験を決めた時期  | 0    | 0.6   | 12.5  | 83.93 | 12.9 | 0.6  |    |
| ⑦保育科に受験を決めた時期 | 0.6  | 6.55  | 32.14 | 56.55 | 0.6  | 3.57 |    |

合は減少してゆき、資格、専門、属性における割合が増加していくことなどが認められる。保育科においては、資格、経済、期間の要因が全てにおいて安定して高い割合を示している。特に経済、期間という要因は保育科において重要な要因である。⑤の分布は他の項目と異なり傾向を示している。以上の結果から、学部を決定する場合に最も重要な要因として資格の取得、属性というよりは自分のもつ内の、外的条件とのかけ合わせよりも非常に重要な意味をもつことが明らかにされた。このことから結局大学進学の決定の時期にむけてその学部決定の時期を遅らせていくのではないかとされる。また表1、2で学部を決定する時期にかけて、保育科の方が児童科の学生よりも早くなれる傾向が認められるが、この原因は保育科のもつ専門性つまり、保育者の養成という色彩が児童科よりも比較的薄いことにあるのではないかとされる。ある意味では保育科を希望する学生の方から児童科を希望する学生よりもより目的的に大学を決定しているといえる。しかしながら場合問題となるのはその学部決定の理由である。保育科では自己の特性よりも資格の取得が非常に重要視されておりが保育者の適性につれてはあまり場合分けの学部決定にはかなり問題をもつているように思われる。この点につけては今後さらに検討を加えてたい。

# 児童・保育科の学生に関する調査(2)

—学科専攻に対する学生の不安を中心にして—

○宇津木真子 大瀧ミドリ 石黒英子

(東京家政大学)

研究目的・方法は前報と同じである。

[I] 入学時の不安と現在の不安について: これは児童・保育科を専攻するにあたって、学生が入学時および現在持つている不安について、その推移と傾向を考察しようとするものである。

## 結果と考察(1)

表1 不安を持つ学生

| 項目        | 星年     | 児童2年  | 児童3年  | 児童4年  | 保育2年 |
|-----------|--------|-------|-------|-------|------|
| 入学時不安を持つて | 48.68% | 55.56 | 54.17 | 60.89 |      |
| 現在不安を持つて  | 81.82  | 66.67 | 75.00 | 65.22 |      |

表1に示したように、専科専攻にあたって、入学時に不安を持つ大学生と、現在不安を持つ学生についてみると、以下の学年においても、現在不安を持つていうとすれば学生が多くなっている。また、何について不安を持つかを調査した結果、「自己の保育者としての適性について」、「学業について」、「就職について」の各要因に分類された。

入学時と現在についてみると、児童においては就職に向いて、入学時よりも現在不安が増加していくこととが有り認められ(Z=2.67 P<0.05)、保育においては、適性に対する不安が増加していく(Z=2.04 P<0.05)ことが認められた。これは、石黒が(1)において報告したように、児童においては学部状況に際して適性を考慮しているものが約60%いるのに対して、短大では、適性よりも資格取得などの要因として、より多くのものがあげていた。したがって、適性に向いては、児童は比較的適応した見通しを持ち、保育は入学後、あらたに適性という問題が意識され、将来の目的とも関連して、不安の対象となると考えられる。

また、現在の不安の要因を学年の推移によってみると、児童・保育とも学業に対する不安は、学年の上昇につれて減少するが、就職に向いては増大していく。よくに保育においては、適性についての不安が急激に増加している。これらのことから、学年による不安傾向の推移は、就職という具体的な目的に接近することによって、大きな影響を受けるものと考えられる。

[II] 所属する集団のイメージについて: つきに、学生が自己的所属する集団に対して、どのようなイメージを持ち、どのよう�学生とはうることと目標にして

いるのか、また大学や教員に対してどのような期待を持つてはいるかについて、連想により回答を求めた。これは、現実と理想と、そこには今あると思われる外的条件への期待との関連から、学生の持つ不安への影響を考察しようとするものである。

## 結果と考察(2)

表2「女子大学生'

| 項目    | 児童   | 保育    |
|-------|------|-------|
| 正統的集団 | 9.0  | 4.6   |
| 反逆的集団 | 22.1 | 12.7  |
| 前進的   | 13.1 | 23.1  |
| 思威    | 27.9 | 22.5  |
| 思威    | 4.9  | 6.4   |
| 就職難   | 1.6  | 2.3   |
| 就職難   | 7.4  | 0.6   |
| 無答    | 13.9 | 27.45 |
| 总数    | 122  | 173   |

表3「雄大学生'

| 項目    | 児童   | 保育   |
|-------|------|------|
| 正統的集団 | 22.8 | 38.1 |
| 反逆的集団 | 36.6 | 7.0  |
| 前進的   | 11.4 | 4.3  |
| 思威    | 3.3  | 25.8 |
| 思威    | 2.4  | 1.1  |
| 就職難   | 4.1  | 2.2  |
| 就職難   | 3.3  | 3.6  |
| 無答    | 16.3 | 13.9 |
| 总数    | 123  | 186  |

表4「上級女子大学生に別れたか'

| 項目    | 児童   | 保育   |
|-------|------|------|
| 正統的集団 | 28.5 | 22.8 |
| 反逆的集団 | 24.1 | 17.5 |
| 前進的   | 15.5 | 6.8  |
| 思威    | 3.7  | 5.7  |
| 思威    | 10.9 | 11.9 |
| 就職難   | 1.5  | 4.0  |
| 就職難   | 5.1  | 1.1  |
| 無答    | 3.7  | 0.6  |
| 無答    | 7.3  | 19.8 |
| 总数    | 137  | 177  |

表5「大学教員への期待'

| 項目    | 児童   | 保育   |
|-------|------|------|
| 人間的接觸 | 40.8 | 42.1 |
| 教師的接觸 | 16.2 | 4.2  |
| 教員的接觸 | 15.4 | 17.3 |
| 教員的接觸 | 4.6  | 1.6  |
| 期待はない | 8.5  | 9.4  |
| 無答    | 14.6 | 24.6 |
| 总数    | 130  | 191  |

表6「大学への期待'

| 項目    | 児童   | 保育   |
|-------|------|------|
| 期待しない | 12.7 | 19.9 |
| 期待する  | 29.0 | 23.3 |
| 期待する  | 23.8 | 19.3 |
| 期待する  | 19.0 | 9.7  |
| 大學生   | 4.8  | 1.7  |
| 無答    | 12.7 | 26.1 |
| 总数    | 126  | 176  |

註: 数値は%  
△は有意差の認められたもの。

(1) 表2・3・4によると、所属のイメージは、児童・保育とも比較的好ましくないとするイメージを持つていいが、目標とする学生の姿は、人間性について比較的高いイメージを持つていいことが認められた。ここに生ずる差は、学生の不安に何らかの影響を与えると思われるが、この結果からは明らかではない。

(2) 表5・6によると、外的条件としての大学・教員への期待についてみると、教員には人間的接觸を約40%の学生が期待し、講義内容の充実がそれに次いでいい。大学に対しては、主に講義形態への期待が強い。これは、児童・保育の間に差が認められない。

(3) “実際に研究室に行くか”という意向に対しても、26%の者が行くとし、“行きたい”に対しても、約80%の者が行きたいとしている。その理由として、厚生的指導、教員との肉体を深めたい、いろいろな事を相談したいなどが非常に多いにもかかわらず、行かねばならない理由として、機会がない、用がないをあげ、教員との肉体を形成する事がかりを持つていいことが何やれただ。

# 児童保育科の学生に関する調査(3)

— 学生生活について —

○大穂ミドリ 宇津木夏子 石里英子  
(東京家政大学)

研究目的・方法：報告(1)に同じ。ここでは、児童保育科の2年生および3年生が在学する学生について、どの程度学生生活を満足しているかが、学生生活の満足度・譲りの満足度・出席率の状況について、その実態を分析し結果を報告する。

## 結果

### (1) 学生生活の満足度について

児童保育では何よりも意味において学生生活に不満があると答えたものが約66%。体育では約90%が長時間に児童保育では2年生が高くほかにこれ不満が増加する傾向が認められ、2年生と3年生の学生の間には有意差が認められた。不満であるとし長時間についてみると「目標が持てない」「自己自身の問題」を経験数のもののが多い。体力不足は2年生と3年生と增加する傾向がある。体育ではさらに「時間的余裕がない」「友達がない」において児童よりも有意に高いことが認められた。また「目標が持てない」もより強度と有り程度においては児童より低いようである。入学時に不安げな、反ものについて、現代の学生生活の満足・不満足の面において、児童と保育科の間に有意差が認められた。児童科の学生は入学時に不安を持っていたこととその後の現代の学生生活の満足度とは直角関係は認められない。だが、保育科学生は入学時に不安を持っていたのは多く現代の生活に不満足しているといえる。

### (2) 譲りの満足度と出席率の状況について

大学入学から現在までに受講した譲りについて、その満足の程度と出席率の状況について「非常に満足」から「全く不満」、「困難を排して出席」から「放棄した」の4段階評定をし、より4段階評定の理由を記述されたものに就り譲りの満足度と出席率の状況をみる。

まず譲りの満足・不満についてみると、児童では約50%、体育では約60%のものが満足であるとしている。つまり出席状況をみると、児童では約90%、体育では約80%のものがよく出席しているが「困難を排して出席する」ものについてみると、児童では約40%、体育で

は約26%である。次に満足理由についてみると、譲りの不満をもつても多く規定するものは「自己の興味と譲り内容の充実である」といふ。出席では、「興味と内容の充実・あたりまえ・仕方なくが同程度す」とあり極めてあたりまえ・仕方なくと理由を有するものが児童において有意に高いことが認められた。

つまり自己の興味が譲りの満足と出席状況と関連があるとすれば、同一学科目であっても個人の評定に異なることがあるうれしい。そこで同一科目について、満足・出席と不満足・満足と出席との差をとり、各科の満足比と不満がよな出席の状況を示す表1である。

表1

| 出席<br>看護科 | + . 0   |         |         | -       |         |         | 計       |         |         |
|-----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
|           | 一般      | 専門      | 教職      | 一般      | 専門      | 教職      | 一般      | 専門      | 教職      |
| 満足        | (59.0%) | (58.3%) | (58.8%) | 0       | 0       | 0       | (54.7%) | (58.3%) | (58.8%) |
| 不満        | 13      | 14      | 10      | 0       | 0       | 0       | 13      | 14      | 10      |
| 計         | (40.9%) | (41.6%) | (41.1%) | (100%)  | (100%)  | (100%)  | (45.3%) | (41.6%) | (41.1%) |
| 満足        | 9       | 10      | 7       | 2       | 0       | 0       | 11      | 10      | 7       |
| 不満        | (10.0%) | (10.0%) | (10.0%) | (100%)  | (100%)  | (100%)  | (100%)  | (100%)  | (100%)  |
| 計         | 22      | 24      | 17      | 8       | 0       | 0       | 34      | 24      | 17      |
| 満足        | 1       | 0       | 0       | 6       | 3       | 4       | 7       | 3       | 4       |
| 不満        | (5.0%)  | (5.0%)  | (5.0%)  | (66.7%) | (33.3%) | (33.3%) | (72.7%) | (27.3%) | (27.3%) |
| 計         | 1       | 0       | 0       | 3       | 11      | 7       | 3       | 11      | 7       |
| 満足        | 0       | 0       | 0       | 3       | 11      | 7       | (100%)  | (100%)  | (100%)  |
| 不満        | (10.0%) | (10.0%) | (10.0%) | (33.3%) | (77.8%) | (66.7%) | (72.7%) | (27.3%) | (27.3%) |
| 計         | 0       | 0       | 0       | 9       | 18      | 11      | 10      | 14      | 11      |

(表中(+)は満足(公度)の人数) - (不満(欠席)の人数) = 30は基本値

児童においては、一般・専門・教職科目すべてにおいて満足である。反対に教職科目が多いに対して、体育では専門・教職科目において不満である。反対に教職科目が多い。特に専門科目においてより傾向が強い。また児童と保育では満足度と出席の状況が相反する分布を示している。

結論：学生生活における問題の多くは、結果(1)にからみながら自己の生き方が不明確であることに原因しているといえる。これは先に序論で報告した自己の所属意識と自己の理想像のずれを大きくする原因ともほしていふと思われる。この生き方がどのように形成されるのか、また形成されないとすれば何の原因がどこにあるのか、については今後分析を試みたい。

# 授業評価簡易テーブル(試案)

上山忠男  
(山口県教育研修所)

目的；実践的立場からの授業研究や授業についての評価を試みる場合、徹底的立場からの操作は、時間的ににも手数のうえからも極めて困難を感じている。

そこで、現場の実践において手軽に用いられる授業評価の観点を列挙し、授業の研究や授業改善への手掛りとすることを目的とするものである。

方法；(1)対象教科としては、国語、社会、算数、数学、理科等 主として内容教科との関連を考えてか。そのなかでも、特に思考力を伴う授業場面を意識的に想定した。

(2)評価項目の設定は、過去の授業分析の記録や、授業分析に関する文献、授業研究学者が提唱している「よい授業の条件」、等を基にした。

(3)授業評価の大項目は、I指導計画、II本時案、III授業場面、IV発達の評価とし、各大項目ごとに中項目を2ないし5、さらに小項目を3ないし10個を設定し、各小項目について3ないし5段階評定が行なえるようにして、さらに小項目の評定をまとめたものを大項目ごとに評定し、最終的には総合評定がくだせりようにして。

(4)大項目および小・中項目についての解説は、評定結果がアロフィールドによって表現されるので、各項目についての長所や短所を見出し、授業の評価や授業の改善に役立つようにした。

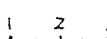
(5)評定の方法は、授業者自身で自己評価するとか、または第三者の観察による他人評価によることもできるようにした。

結果；授業評価簡易テーブル (一例)

## I 指導計画

### A 目標

1. 何をどこまで教えればよいかがわかるように、目標が具体化されているか。
2. 数個の目標を総合すれば、単元目標として偏りなくもりこまれているか。

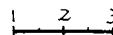


(以下略)

## II 本時案(部分案)

### A 主眼

1. 指導目標から分析された具体目標となっているか。
2. 主眼達成のための学習内容、方法、条件が示されているか。

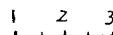


(以下略)

## III 授業場面

### A 課題達成機能の面

1. 課題は握のさせ方が、全員にゆきどいたか。
2. 教師発問の質と量は、授業効果を高める上に適当であったか。



(以下略)

### B 集団維持機能の面

1. 教師から子どもに対し、激励や援助、新しい課題についての動機づけなどがなされたか。

(以下略)

考察；今回は、授業評価の観点のうち今日の授業として必要と思われる事項を列挙したものであるが、板書、ノート利用、教具の活用等については取り上げなかったことは片手落葉の感もある。

評価テーブルとして重要なことは、評価項目の設定と併せて、評価項目の尺度化をはかることである。次の作業としては、評定の基準を定め、さうに経験年数や対象学年などによって、尺度の標準化を試みた問題が残されていく。

参考；山口県教育研修所 研究紀要第50集(1970)  
(連絡先) 山口県防府市 中央町 15番15号 (〒747)

# 人物とその属性に対する態度

藤野 藤俊  
(熊本大学教育学部)

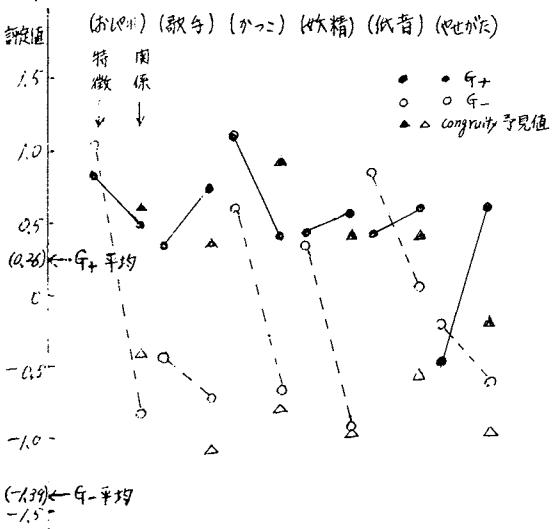
目的：2つの概念が1つの主張において認知的に結合されるとき、その結合的主張に対する態度的評価は、その要素となる2つの概念に対する態度的評価の商数と考えられている。もある対象がある特徴を1つの属性として有するとの主張があたえられた場合、そこには、対象と特徴との間に1つの認知的結合関係が生ずることになる。そしてその主張、すなわち「対象一特徴」関係に対する評価は、その関係に含まれた2つの認知要素（対象と特徴）の商数として成り立つと仮定される。本報告では、態度対象として特定の人物を、また特徴として人物を形容する諸々の特徴を述べる。この人物と形容的特徴を1つの主張によって結合することから生ずる「人物一特徴」関係に対する評価が、その人物に対する評価あるいは特徴に対する評価の影響をうけてどのようない傾向を示すであろうか、この点を検討しようと試みた。

方法： $S_0$  女子中学3年生14名、女子大生26名、計40名。 $\langle$ 態度評定尺度 $\rangle$  5評価の形容詞対からなるS-D形式の7点尺度(+3~-3)。 $\langle$ 評価対象 $\rangle$  人物対象……昨今マスコミをにぎわしている異色タレ、トニーター（以下P）。特徴……Pの特徴を形容する6刺戟形容語（おしゃれ・流行歌手・かっこいい・妖精的・低音・やせがた）。この6形容語は前もって他の $S_0$ に對して行なったPを刺戟語とする連想実験の結果にもとづいて選定された。 $\langle$ 手続 $\rangle$  (1) S-D法使用の際的一般的な教示の後、まず形容的特徴の各々に対する態度を上記S-D評定尺度でもつて評定させた。(2)つきにPに対する態度を同じ評定尺度で評定させた。(3)最後にPと個々の形容的特徴を結びつけた主張（たとえば「Pはおしゃれである」）に対する態度をS-D尺度で評定させた。

結果と考察：Pに対するS-D評定値にもとづいて、 $S_0$ を好意群( $G_+$ )と非好意群( $G_-$ )に分けた。第1図は、形容的特徴に対するS-D評定値と、その特徴

がPに結合されたときの「P一特徴」関係に対する評定値を群別・特徴別に平均して示したものである。

(1) 各特徴に対する評定値は $G_+$ と $G_-$ の間にあまり差はないが、(2)各「P一特徴」関係に対する評定値では $G_+$ と $G_-$ の間にかなりの差がみられる。(3)  $G_+$ では特徴に対する評定値と「P一特徴」関係に対する評定値の間にはあまり差がない、一定の傾向もみられないが、(4)  $G_-$ ではそれらの間に大きな有意差がみられ、しかも「P一特徴」関係に対する評定値はPに対する評定値の方向に大きく偏位する傾向がある。したがって $G_-$ に限つていえば、「P一特徴」関係の評価は、Pに対する評定値によって強く影響されることがわかる。(5) 以上の諸結果は、本研究事態に認知的バラエス原理が働くことを暗に示唆するようとも思える。(6) また「P一特徴」関係に対して得られた評定値は、Osgoodらの congruity 公式による予見値ともほぼ適合する傾向にある。



第1図 特徴と「P一特徴」関係の群別平均評定値  
(連絡先) 熊本市白山1-6-54-3

# 熊本県漁村地区青少年の性差より見た宗教的関心

## 葛 谷 隆 正

(熊本大学教育学部)

(目的) 本論文は、特に、僻地漁村地区的青少年の宗教的関心について研究し、その男女差の特質を明らかにしようとする。

(方法) 一昨年(1968)、都市農村の青少年の宗教的関心の研究<sup>1)</sup>の際用いた方法と同じ。被験者は、天草郡漁村僻地校に在学する小5、中3の男女合せた343名(男158、女185)。調査は、1970年6月下旬~7月中旬に実施された。

### (結果とその考察)

#### 1. 宗教的態度

|     | 小 5      |       |       | 中 3       |       |       | t検定     |
|-----|----------|-------|-------|-----------|-------|-------|---------|
|     | N        | M     | SD    | N         | M     | SD    |         |
| M   | 74       | 35.85 | 4.208 | 84        | 26.87 | 5.811 | P<0.001 |
|     | (64.63)  |       |       | (42.18)   |       |       |         |
| F   | 81       | 35.84 | 3.909 | 104       | 28.71 | 4.681 | P<0.001 |
|     | (64.60)  |       |       | (46.78)   |       |       |         |
| t検定 | P > 0.90 |       |       | P < 0.001 |       |       |         |

(注) ( )内は、100点満点に換算した値。

上の表によつて見ると、小学校下学年では、宗教的態度に男女間の有意差はないが、学年を昇るにつれて差が現われるようになり、中学3年ともなると、性差は著しく明確となると言えるようである。

以下において、宗教的環境、宗教的行動、宗教的意識などの各側面における実態を分析的に考察し、上述の見解を検討してみたい。

#### 2. 宗教的環境

(%)…以下同じ。

|      | 神だん |    |      | 仏だん |    |      |
|------|-----|----|------|-----|----|------|
|      | ある  | ない | 分らない | ある  | ない | 分らない |
| 小5 M | 85  | 12 | 3    | 70  | 22 | 8    |
| F    | 89  | 8  | 2    | 73  | 19 | 8    |
| 中3 M | 91  | 6  | 3    | 78  | 21 | 1    |
| F    | 92  | 7  | 1    | 86  | 13 | 1    |

神だん・仏だんに誰が祀られているか。

神だん・仏だんがあると反応したものについて調べる。

|      | 分らない |     |      | 無記 |    |      | 神 |   |      | 祖先祖父母 |   |      | 仏教祖 |   |      |
|------|------|-----|------|----|----|------|---|---|------|-------|---|------|-----|---|------|
|      | 神だん  | 仏だん | 分らない | 神  | 仏  | 分らない | 神 | 仏 | 分らない | 神     | 仏 | 分らない | 神   | 仏 | 分らない |
| 小5 M | 52   | 26  | 2    | 20 | 0  |      |   |   |      |       |   |      |     |   |      |
|      | 44   | 26  | 23   | 0  | 51 | 0    |   |   |      |       |   |      |     |   |      |
|      | 56   | 23  | 5    | 16 | 0  |      |   |   |      |       |   |      |     |   |      |
| F    | 21   | 23  | 0    | 56 | 0  |      |   |   |      |       |   |      |     |   |      |

1) 葛谷隆正 都市と農村の青少年の宗教的関心に関する比較研究 熊本教育学部紀要 No.17, Sec. 2, 1969.  
(連絡先) 熊本市竜田町上立田 27.

|    |        |    |    |    |   |
|----|--------|----|----|----|---|
| M  | 神だん 60 | 14 | 19 | 6  | 0 |
| 中3 | 仏だん 48 | 21 | 0  | 27 | 3 |
|    | △ 66   | 22 | 10 | 2  | 0 |
| F  | △ 46   | 22 | 0  | 31 | 1 |

小学5年では、なお、神仏混同意識がかなりある。

#### 3. 宗教的行動

|      | 神だん           |            |             | 仏だん           |            |             |
|------|---------------|------------|-------------|---------------|------------|-------------|
|      | 毎朝みんなで<br>あがむ | 普段時<br>あがむ | 神は<br>あがまない | 毎朝みんなで<br>あがむ | 普段時<br>あがむ | 神は<br>あがまない |
| 小5 M | 11            | 40         | 49          | 6             | 38         | 56          |
| F    | 0             | 52         | 48          | 5             | 46         | 49          |
| 中3 M | 3             | 28         | 69          | 6             | 34         | 60          |
| F    | 1             | 46         | 53          | 1             | 61         | 38          |

|      | 寺集会に<br>よく行く  |            |             | 時々行く          |            |             | 行かない          |            |             | 宗教のお話を<br>よく聞く |            |             | 時々聞く          |            |             | さくない          |            |             |
|------|---------------|------------|-------------|---------------|------------|-------------|---------------|------------|-------------|----------------|------------|-------------|---------------|------------|-------------|---------------|------------|-------------|
|      | 毎朝みんなで<br>あがむ | 普段時<br>あがむ | 神は<br>あがまない | 毎朝みんなで<br>あがむ | 普段時<br>あがむ | 神は<br>あがまない | 毎朝みんなで<br>あがむ | 普段時<br>あがむ | 神は<br>あがまない | 毎朝みんなで<br>あがむ  | 普段時<br>あがむ | 神は<br>あがまない | 毎朝みんなで<br>あがむ | 普段時<br>あがむ | 神は<br>あがまない | 毎朝みんなで<br>あがむ | 普段時<br>あがむ | 神は<br>あがまない |
| 小5 M | 4             | 21         | 75          | 20            | 50         | 30          |               |            |             |                |            |             |               |            |             |               |            |             |
| F    | 5             | 27         | 68          | 21            | 54         | 25          |               |            |             |                |            |             |               |            |             |               |            |             |
| 中3 M | 1             | 14         | 85          | 2             | 55         | 43          |               |            |             |                |            |             |               |            |             |               |            |             |
| F    | 31            | 68         | 4           | 77            | 19         |             |               |            |             |                |            |             |               |            |             |               |            |             |

|      | 宗教の語と誰からさかへ<br>祖父 祖母 父 母 先生 坊さん 友人 |    |    |    |   |    |   |
|------|------------------------------------|----|----|----|---|----|---|
|      | M                                  | 45 | 23 | 30 | 9 | 8  | 0 |
| 小5 F | 10                                 | 46 | 6  | 22 | 5 | 29 | 0 |
| M    | 2                                  | 35 | 6  | 27 | 6 | 35 | 8 |
| F    | 5                                  | 31 | 6  | 24 | 0 | 45 | 6 |

|      | 神のいの祈りの<br>経 |    | あつた なかつた | これがの諸表から、性差が<br>4年間に大きく拡大してい<br>くことが、はつきりと表づ<br>けられる。 |                 |
|------|--------------|----|----------|---|-----------------|
|      | M            | F  |          | 4年間に大き<br>く   | なつ<br>けられ<br>る。 |
| 小5 M | 35           | 65 |          |   |                 |
| F    | 51           | 49 |          |   |                 |
| M    | 46           | 54 |          |   |                 |
| F    | 64           | 36 |          |   |                 |

|      | 神仏のいいつけが<br>すきが |   |    | 天國・地獄は<br>神 仏 両方 分らぬ<br>りつけも<br>すかない |   |    | ある<br>ない<br>分らない |
|------|-----------------|---|----|--------------------------------------|---|----|------------------|
|      | M               | F | 両方 | 神                                    | 仏 | 両方 |                  |
| 小5 M | 17              | 7 | 57 | 17                                   | 3 | 41 | 28 30            |
| F    | 11              | 2 | 61 | 26                                   | 0 | 44 | 14 42            |
| M    | 19              | 2 | 10 | 62                                   | 7 | 20 | 37 43            |
| F    | 22              | 5 | 32 | 37                                   | 4 | 29 | 20 51            |

|      | 困ったとき、誰を頼るか (主なもののみ) |    |    |    |    |          |
|------|----------------------|----|----|----|----|----------|
|      | 祖母                   | 父  | 母  | 友人 | 先生 | 神 仏 白分   |
| 小5 M | 17                   | 36 | 43 | 11 | 5  | 12 7 13  |
| F    | 4                    | 24 | 62 | 7  | 2  | 19 16 14 |
| M    | 5                    | 12 | 28 | 27 | 1  | 11 2 30  |
| F    | 0                    | 3  | 37 | 23 | 0  | 16 7 19  |

# 「もの」の価値意識に関する因子分析的研究

千々岩 英彰  
(武蔵野美術大学)

**目的：**デザインポリシーを設定するにあたっては商品(もの)に対するユーザーの意向が十分反映されるよう意図されねばならない。そのためにはいろいろの手法が試みられている。この研究も商品設計上の基礎的資料を提供すべく行なわれたものである。しかし、特定商品のデザイン上の資料を得ようとしているわけではなく、商品(もの)と商品(もの)の価値意識の関連を分析することによって、商品(もの)の附加価値の体系を明らかにしようとしており、デザイン教育上の資料ともなりうると期待される。

**方法：**国民生活研究所の「生活意識と購買行動」調査にみられる耐久消費財、政府が指定している構造改善指定製品(中小企業製品関係)の中から32項目を選び、数値分配法によって商品(もの)の価値の評定を行なわせた。価値を表わす項目は20種。被調査者は20項目の中から7項目を選んで100の数値を分配する。被調査者は62名(地方公務員55名+銀行員7名、大卒50名+高卒12名、持家42名+その他20名、年令24~40才、平均年令31.6才、男子)である。この他にリースマンの「I.O Social Preference Test」と買物意識に関する調査を併用しているが今回は省略する。

**結果：**62名の結果を単純合計して32項目×20項目のデータ行列を得た。(1)価値項目別平均値、標準偏差、変動係数( $S.D./Mean \cdot 100$ )を求めた。(2)成分分析法により因子分析し、オーフィ子までを得た(表1)。(3)同時に32項目についての成分別得点を得た(表2)。上記の演算はIBMのHITACによった。

**考察：**(1)20の価値項目中数値の分配が大量になされるのは性能、丈夫さ、美しさ、健康、安全などであり、これだけで約5割を占める。権威、伝統、信用、社会的地位、新奇さなどに数値が与えられるのは1割にも満たない。物品を所有することで自己を顯示するような欲求は二つではほとんど現出されなかつた。

|          | 1     | 2     | 3     | 4     | 5    |
|----------|-------|-------|-------|-------|------|
| 1 健康     | -.54  | -.33  | .37   | -.29  | -.29 |
| 2 教育     | .55   | .03   | -.48  | .16   | -.21 |
| 3 権威     | .59   | -.17  | .14   | -.69  | -.03 |
| 4 伝統     | .53   | -.26  | .68   | =.04  | .17  |
| 5 信用     | .14   | -.48  | .55   | -.23  | -.21 |
| 6 社会的地位  | .53   | .34   | -.20  | .39   | -.07 |
| 7 美しさ    | -.12  | -.73  | .34   | .22   | .22  |
| 8 性能     | .43   | .78   | -.27  | -.06  | -.16 |
| 9 趣味嗜好   | .77   | -.01  | -.27  | -.51  | -.05 |
| 10 新奇性   | -.35  | -.39  | -.24  | .03   | .23  |
| 11 安全    | -.66  | -.29  | -.21  | .48   | -.31 |
| 12 信用    | .29   | .39   | .66   | .01   | .32  |
| 13 繼続性   | .70   | -.01  | .00   | .38   | -.23 |
| 14 時間の経過 | -.79  | .77   | .28   | .14   | .21  |
| 15 地域的   | .71   | -.02  | .40   | -.52  | -.01 |
| 16 自然    | .34   | -.77  | .80   | -.17  | .77  |
| 17 遊び    | .63   | -.09  | -.53  | -.02  | .09  |
| 18 買物の節約 | -.50  | .38   | .24   | -.12  | .46  |
| 19 安全    | .71   | .35   | .11   | -.05  | -.16 |
| 20 创造、工夫 | -.42  | -.29  | -.22  | .19   | .57  |
|          | 27.1% | 18.3% | 13.6% | 10.2% | 8.7% |

表1 20項目の因子負荷量(成分分析法による)

|           | 1    | 2    | 3    | 4    | 5    |
|-----------|------|------|------|------|------|
| 1 ピードアノ   | .16  | .25  | -.44 | -.12 | .20  |
| 2 自家用車    | .14  | .86  | .03  | .09  | -.13 |
| 3 合唱チーピー  | .54  | .33  | .50  | -.25 | -.15 |
| 4 ステレオ    | .50  | .20  | .68  | -.62 | -.08 |
| 5 家接セット   | .53  | .29  | .23  | .64  | .11  |
| 6 接触ファン   | -.80 | .12  | .08  | -.13 | -.41 |
| 7 身体満足感   | -.49 | -.44 | -.08 | .02  | -.29 |
| 8 身体的     | -.48 | .69  | -.01 | -.01 | .07  |
| 9 オートレーブ  | -.53 | -.15 | .49  | -.18 | -.00 |
| 10 汽油自動車  | -.53 | -.29 | .12  | -.16 | .74  |
| 11 汽油庫    | -.51 | .48  | .02  | .06  | -.78 |
| 12 食事     | -.35 | -.48 | .98  | .05  | -.16 |
| 13 ライフマップ | .40  | .68  | .93  | -.03 | .53  |
| 14 クラスカーブ | -.69 | -.52 | .28  | -.18 | .51  |
| 15 月転車    | .36  | .42  | .04  | -.25 | -.29 |
| 16 球技     | .57  | .20  | .14  | .05  | .00  |
| 17 競争     | .46  | -.15 | .32  | .66  | .11  |
| 18 美      | .58  | -.46 | .04  | -.15 | -.24 |
| 19 ライタ    | -.21 | .23  | -.17 | .02  | .08  |
| 20 旅行     | .51  | -.44 | .14  | .06  | -.16 |
| 21 ジュウロク  | .29  | -.46 | -.13 | .33  | .08  |
| 22 常識     | .48  | .86  | .83  | .41  |      |
| 23 ヴィスキー  | .75  | -.25 | .77  | -.46 | .19  |
| 24 カーテン   | -.17 | -.72 | -.42 | -.07 | .44  |
| 25 ナリ紙    | .43  | -.15 | .27  | -.24 | -.07 |
| 26 喫煙机    | .25  | -.10 | -.28 | .47  | -.32 |
| 27 清酒     | .60  | -.18 | .90  | -.80 | -.06 |
| 28 洋服     | .22  | -.07 | -.21 | .34  | -.10 |
| 29 着物     | .14  | -.48 | .17  | .17  | .06  |
| 30 着物     | -.15 | .21  | .67  | -.13 | -.22 |
| 31 旅      | .53  | -.28 | .40  | .57  | -.09 |
| 32 下駄     | -.23 | -.49 | .39  | -.25 | .45  |

表2 32品目の成分別得点

(2)オーフィ子までで約80%が説明される。オーフィ子「趣味嗜好—安全・維持」オーフィ子「性能・美しさ」、オーフィ子「信頼」、オーフィ子「権威」、オーフィ子「新奇性」などであろう。(武蔵野美術大学心理学研究室)

# 学校における教育相談

## 授業中ににおける教師の態度

○甲斐志郎 清水喜平 横森義隆

(山梨県立教育研修所) (山梨県立並崎高校) (並崎市立清音小学校)

### I. 研究の動機と目的

#### 1. 研究の動機

授業のなかで子どもたちが、「主体的」となり得るためには、教師自身の心構えや、教師のまつ態度、學習材料などの研究が必要であると考え、子どもたちが本当に學習できる授業、子どもが真に自己學習していく授業のあり方を求めて、3年弱からこの研究に着手した。その一部を報告する。

#### 2. 研究の目的

##### ・教師が授業のなかにおいて

- ・教師は、自己一致していて自己変容できる。
- ・教師は無条件に子どもを尊重し愛着する。
- ・教師は子どもの気持を共感的に理解する。

という態度をもって、子どもたちに接する: とにより子どもたちは、真に自己學習、自主的、目的的創造的、協同的な、していくことを確認する: のを目的とした。

### II. 研究の概説

子どもは教師が下記に示す条件を満たせば「満足」程度自分、自主的、自発的、協同的になるとであろう。

1. 教師は無条件に子どもを尊重愛する
2. 教師は自己一致していて自己変容できる
3. 教師は子どもの気持を共感的に理解する

#### 具体的に:

(1) 授業のなかで教師の発言量は減少し、子どもたちの発言量は多くなっている。しかし、その発言分布は広がるであろう。

(2) 授業のなかで教師が共感的、理解態度で接すれば、子どもたちは率直に発言し、自己変化、協調性は高まるであろう。

(3) 子どもたちは、言葉の態度を持ち、知識を真に自己のものとしていくであろう。

### III. 研究の方法

1. 対象 小学校 6年 26名

2. 課程 算数 「同じ形」

3. 研究の視点

- (1) 授業分析
- (2) 教師の態度分析
- (3) 子ども分析

### IV. 研究の結果

1. コミュニケーション・パターンの比較 (S.43)

| 型    | 実験群 | 比較群 | (数字は%) |
|------|-----|-----|--------|
| T-P型 | 32  | 89  |        |
| P-T型 | 8   | 6   |        |
| P-P型 | 60  | 5   |        |
| 計    | 100 | 100 |        |

2. 三ヵ年間の教師発言の次数 (%)

| 年月日       | 42年 | 43年 | 44年 |
|-----------|-----|-----|-----|
| 令頃成       | 12月 | 7月  | 9月  |
| リードしない発言  | 27  | 32  | 43  |
| ややリードする発言 | 40  | 22  | 24  |
| 強くリードする発言 | 31  | 46  | 29  |
| その他       | 2   | 0   | 4   |
| 計         | 100 | 100 | 100 |

3. 三ヵ年間の子ども発言の割合 (%)

| 年月日       | 42年 | 43年 | 44年 |
|-----------|-----|-----|-----|
| 分類        | 11月 | 7月  | 11月 |
| 進行に因るもの   | 63  | 47  | 26  |
| 参考内容に因るもの | 37  | 53  | 74  |

### V. 考察

教師は仮説で示した三つの条件を授業のなかで満足するよう努力した結果、コミュニケーションパターンの比較でみるようじて、教師が教え、子どもが教えられるという関係ではなく、自分で自分で學習していくうえで、動きのなかで、ときには教師の援助を受け、子ども同士が協力して學習をするのである。

# 航空機騒音の心身に及ぼす影響 V-1

## 情緒、の影響

児童省 香掛裕子 三村敬子 宮吉秀子 高橋澄子  
(日本女子大学)

**目的:**本調査は初年度以来、騒音地区内の児童2才から5歳と、対照校の東小学校の児童に対して、毎年実施してきた調査であるが、本年は成人を対象とすると共に、児童に対しても調査を行なった。対照地区とは青梅市の中成と青梅半才の児童をとり上げた。

**対象:**成人各地区に居住する主婦、女性。堀向地区20~30才29名、31~40才15名、41~50才27名、50才以上15名計85名；東中神地区20~30才19名、31~40才15名、41~50才11名、51才以上24名計69名；青梅地区20~30才28名、31~40才23名、41~50才16名、51才以上24名計91名。児童一括2才~5才男19名女25名、6才男32名女20名計76名；東小6才男58名女50名計108名；青1才~5才男35名女30名、6才男36名女39名計140名。

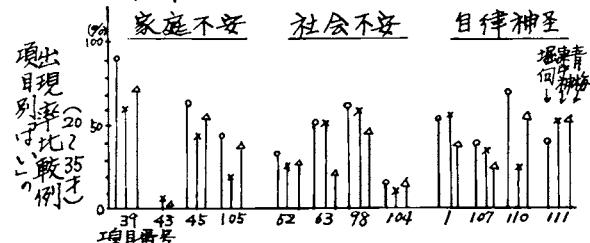
**方法:**調査に用いたものは、全114項目に関する2種選択法のアンケートで、質問内容は以下の様に分類される。  
**不安類型**—自己不安に関する項目20；身体不安4；対人不安6；自然不安3；社会不安4；家庭不安4；  
**攻撃類型**—攻撃性進攻性34；衝動性2；  
**その他の類型**—高所恐怖；強迫性；外向性；内向性；顯示性；退縮性；自律神経失調；分裂気質。年令的に20~35才と36才以上を区分し、次に20~30才、31~40才、41才以上と三分し、地域差を検討した。児童は、5、6才男女を各クラス毎にアンケートを取り、学校差を検討した。

**結果と考察:**成人の年令層を区分した場合、若年令層においては、騒音地区の人々が他2地区の人々に比べて、不安、攻撃性共に傾向が高く、年令が高くなると、不安類型においては地域間の差はあるが、攻撃性については、堀向地区の方が傾向としては低くなっている。年令を三分した場合、30才迄の人々では堀向地区が他2地区より、不安傾向と自律神経失調の傾向が高く、東中神地区と比べると、攻撃性に関し

ても堀向地区が高い傾向を示している。40才以後では地域間の差は薄れ、対人不安、攻撃性についても、むしろ堀向地区の人々が低い傾向を示した。以上の事から、成人に関してみると騒音地区に住む人々のうち、若年令層において、不安傾向が高いが、30才を過ぎるとその傾向は低くなっている。児童に関しては、堀向地区の児童が、低騒音地区的青梅半才の児童より、不安、攻撃性共に、その傾向が高い。しかし、括2小児童と東小児童を比較した場合、東小児童が不安、攻撃性共に高い傾向を示した。

**括2小における追跡調査:**男子の場合、3年次と4年次の比較では、不安、攻撃性共に4年次において高いが、3年次と6年次の比較では、不安類型では3年次が、攻撃性では6年次の方が高い。女子では3年次と4年次では、不安傾向において、4年次の方が高く、攻撃性はほとんど変わらない。3年次と6年次では、不安傾向において、やや6年次の方が高く、攻撃性においては6年次の方がかなり高い。

騒音地区の成人の若年層が、不安、攻撃性共に高年層より高いということは、性格形成期から、騒音にさらされたことの影響が考えられ、東中神対照地区は前述した様に、航空機騒音同様、不安、攻撃性において影響を受けていることが想定される。児童の不安と攻撃性の展開は、年令的に特徴ある展開を増すようであるが、子供検討を要する。



埼玉県狭山市水野 766-447 TEL 0429-53-2826 香掛

# 航空栈騒音の心身に及ぼす影響 T-2

聴覚について

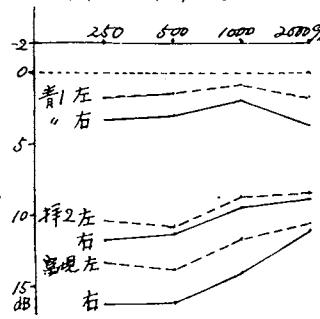
埼玉省<sup>①</sup> 宮吉秀子 三村敬子 肖掛裕子 高橋澄子  
(日本女子大学)

**目的と対象:** 本年度の聴覚検査は、過去3年間の追跡研究の対象としての高騒音地区下の様2小の5, 6年の児童40名、特に現6年生の過去4年間ににおける、その年令増加に伴う聽力の推移、更に連年の6年生の聽力との比較も検討した。対照校として東中神地区の富士見丘小の5, 6年41名、青梅市内の青梅寺1小の5, 6年児童46名をとった。これに加え、現在の児童が、今後航空栈騒音地区に継続して在住する場合、方騒音により聽力に如何なる影響を受ける可能性があるかについて、予測的考察を加えたいと考え、これら各学校の所在する堀向地区、東中神地区、青梅市千ヶ瀬地区の成人に対しても、聴覚検査を行なった。

**方法:** 耳の感度は、年令によつて生理的に変動があり、老令化とともに音量から次第に聽力が低下するので、成人は、35才以下、36~45才、46~55才、56才以上に区分し、年令別に各地区間の比較を試みた。整理方法としては、成人、子供ともに、各地区それぞれの各周波数別の平均値、中央値を求めた。被騒音者の聽力損失を表現する場合、500Hz, 1000Hz, 2000Hzの聽力が会話の聽力能力と実際が深いが、本研究では、我が国で多く行われている  $500\text{Hz} + 2 \times 1000\text{Hz} + 2000\text{Hz}$  の三分法を用いた。この際、成人においては老令化減衰率を適用した。

オ1図 聽力損失平均値比較

**結果:** 図1は、各学校間の平均聽力損失値をグラフにしたもので、全体的に富士見丘小>様2小>青梅寺1小の順に損失度合いが大きい。4000%ごとのdip状況、富士見丘>様2小と、その落ち込み度が深い。青1



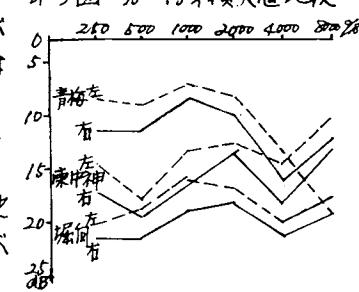
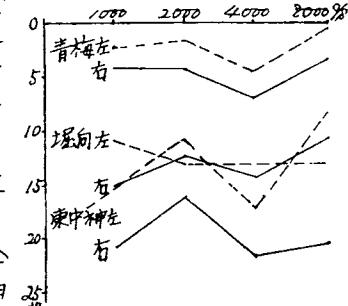
小にはこのdip状況は現われていながら、8000%ごとの様2小の方が富士見丘小より、わずかに損失度合いが大きい。図2は各年令別、地城別成人の平均聽力損失値を示している。年令による聽力減衰をさほど受けない20~30才代を比較してみると、堀向地区、東中神地区に大差はみられない。36~45才の場合す、全体的に、堀向>東中神

>青梅地区の順で損失が大きく、堀向>東中神地区間に、損失度の高い人の出現率にかなりの差がある。その他の結果は口頭説明にゆずる。

**考察:** 航空栈騒音下の堀向地区は、児童、成人ともに、非騒音地区下の青梅地区に比べ、かなりの有意差である。

聽力損失度合いがわかつた。しかし、青梅と共に対照地としてした東中神地区が、航空栈騒音による方騒音地区下の堀向地区と、児童、成人ともに、ほぼ同程度の聽力損失を示しているが、これは、自動車、電車等の地上騒音に、常にわざわざされていることが原因であると推測された。騒音レベル及び、騒音の経続時間も又、それを示している。

千葉県市原市八幡 983 TEL 0477(4)2952 宮吉



# 航空機騒音のハ身上に及ぼす影響 V-3

埼玉省 背掛裕子 ②三村敬子 宮吉秀子 高橋澄子  
(日本女子大学)

目的：五ヶ年の総統研究の最終年の中间報告で航空機騒音が昭島市の住民の生活に何らかの影響を与えるといふのだけないか、という仮定から、又えくいふとすればいかなる影響を及ぼしあるか、を知るために、騒音地区としての堀向地区及び对照地区である東中神地区の成人に①睡眠調査を含む生活時間調査、②意識調査(座談会)、③言語感覚調査、④握力検査、⑤騒音地区にある病院の入院患者について血圧調査、⑥騒音地区にある産院で誕生した未熟児に対する調査、⑦堀向地区と東中神地区の乳幼児の聴覚調査、⑧騒音地区を含む昭島市の全小(4年以上)、中学校及び非騒音地区としのの旧青梅市内の全小(4年以上)、中学校の児童生徒、又それらの母親に対し初期時期調査を行なった。前年度までの研究と並び、主として成人を取り上げた。

睡眠調査では、睡眠時間、寝つき、夜眼がためる等のことを取り上げて、航空騒音の騒音地区と地上騒音(電車、自動車等)の東中神地区では、同一臭と直角に角度を、互いに騒音の影響を示していくが、いずれの睡眠が騒音に影響せられることを示している。意識調査では、堀向地区がは、さり航空騒音に苦しむ公害意識を持ち、故障を訴え、又日常生活に於て対抗的行動を示しているのに対し、東中神では飛行機を問題にしないで、自動車、オートバイ、電車を問題にしている臭が对照的である。そして後述するように大体同じような人身的故障が挙出せられていふ。握力検査 約20人の成人に対し、5回連続の握力検査を行なったところ、4~5回目以後の握力値の下降が著しい者は、堀向地区の者で3名以上あり、のに対し、東中神地区では1名に近く、5%の危険率で有意の差がある。根気、忍耐の指標の可能性を暗示する。感覚調査 座談会の席上、発言者の音域を同一条件で調査したところ、堀向の人里の高音と低音間の平均差は、東中神地区の人達の平均差に比べて、

1%の有意差で、広くなっている。航空機騒音下に住む人達の会話の音声が高いと、自他共にわかっていることと関係があるかも知れない。未熟児の過敏性 航空機騒音下の産院で調査したところ、正常産の乳児は飛行機が飛来しても平常であるが、未熟児は手足を動かしたり、眼をとじたりしてねじえている。病弱児及び病弱者に影響の及んでいう可能性を疑がうべきである。また病弱者ではないが、入院中の生産婦に1日3~4回定期血圧の測定を試み、またGFR調査をしたが、1は、予りして結果を見出すことは出来なかつた。にだ、航空機騒音下の産院(石原診療所)にみる未熟児は、分娩数(43~44年)682人中、未熟児6.4%であるのに対し、立川病院での分娩数(44年)1075に対し5.3%である。初期時期調査 児童生徒にみられる初期時期において、騒音地区と对照地区との間で、又同母親と子供との間に差があるかどうかを検討した。対象は昭島市の4年生以上の小中学生全部と旧青梅市内(5小中学生全部とその母親計6953名)であった。小学校児童の既耕率の累積では、騒音地区小学校と非騒音地区の小学校との間に危険率1%の差があり騒音地区の方が早い。騒音地区中学生の既耕率累積でも昭島中は、その他の中学校に比較して1%~5%が早い。しかし必ずしも、こういう結果ではなくて、初期時期の決定はいろいろが原因によるこを考えると、これがことが看作される。母親の初期時期に比較してみると、子供のそれは一般に早くなる傾向がみられる。しかし、騒音地区的母親と子供の間と、それ以外の地域と比較して特に大きな差は表われなかつた。

横浜市保土ヶ谷区宮田町20/18/ 三村敬子 331-2477

## 授業開始時ににおける生徒中心方法の試みについて

### カウンセリング方法の応用

- 山崎睦子 鶴田正一, 結城錦一  
(大阪女子学院) (大阪大学) (中京大学)

人生相談の内容類型について  
新聞投書によるもの  
高嶋正士  
(共立女子大学)

# ESPと生理周期との関係(IV)

長田一臣  
(日本体育大学)

大谷宗司  
(防衛大学校)

これまで、ESP得失が婦人にありて、その基礎体温(BBT: Basal Body Temperature)の変化に応じて変動することを観察して来た。今回は、これまでに終了した2系列の実験の結果について報告する。

被験者はMK(21才、未婚)、YO(29才既婚・子宮切除)の2名、実験期間は、MK 1966年11月より1969年3月、YOは1968年5月より1969年5月に至る間に行はれた。実験手続については前回報告を参照。

**結果(I) BBT各相とESP得失** 下表に示す様に、MKにおいて高温期に負方向、低温期に正方向の偏差が見られ、YOにおいてはこれと反対の傾向が見られた。また、MKにおいて全20相のうち高温期に負の偏差が14相、低温期に正の偏差が13相にありてみられた。YOにおいては高温期正の偏差は15相の内11、低温期負の偏差は9であった。しかし、二れうの結果はBBT2相とESP得失の偏差の方向の関係を有意的程度に示していない。

| Sub. | No. of Phase | High Temp. Ph. |      |      | Low Temp. Ph. |            |      |      |      |
|------|--------------|----------------|------|------|---------------|------------|------|------|------|
|      |              | No. of Day     | Runs | Hits | Dev.          | No. of Day | Runs | Hits | Dev. |
| MK   | 21           | 232            | 928  | 4510 | -130          | 481        | 1924 | 9697 | +77  |
| YO   | 15           | 194            | 696  | 3551 | +71           | 191        | 764  | 3745 | -75  |

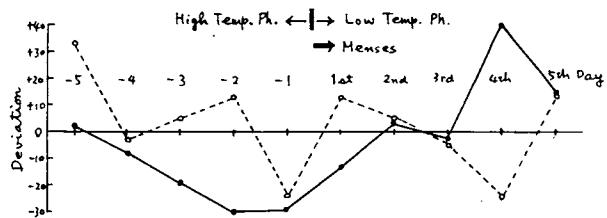
**(II) 各相内における体温の高低とESP得失** 各相における各ESP得失と、テスト日の体温が、どの属する相の平均体温より高い場合と低い場合とに分類すると次表の様になる。表に見る如く、高温期、高温日及び

|                |                 | MK   |      |       | YO   |      |      |
|----------------|-----------------|------|------|-------|------|------|------|
|                |                 | Runs | Hits | Dev.  | Runs | Hits | Dev. |
| High Temp. Ph. | Above Av. Temp. | 348  | 1637 | -103* | 360  | 1805 | +75  |
|                | Below Av. Temp. | 344  | 1740 | +20   | 336  | 1676 | -4   |
| Low Temp. Ph.  | Above Av. Temp. | 836  | 4153 | -27   | 336  | 1702 | +22  |
|                | Below Av. Temp. | 756  | 3857 | +77   | 428  | 2043 | -97* |

\*<sub>1</sub> CR = 2.76, P = 0.006, \*<sub>2</sub> CR = 2.74, P = 0.02

低温期低温日にESP得失は大きな偏差を示す。MKにおける高温期・高温日の負の偏差是有意、YOにおける

低温期・低温日ににおける負の偏差はほぼ有意である。  
(III) BBTの相の遷移期におけるESP得失の推移 高温期より低温期に移る時期は月経の開始される時期である。MKにおいては月経開始日を中心にして、YOにおいては低温期第1日を中心前後各5日間のESP得失の推移をグラフに示す。MKにおいては月経開始に何れ得失の低下、開始と共に上昇が、YOにおいては、高温期最終日の急激な低下、低温期開始と共に上昇、漸次低下する。



考察: これまで、ESP機能がBBTの2相の交代に伴つてその方向を変化するとの予想を持つて来たのであるが、結果(I)(II)はESP機能が体温に代表されし生理的条件と直接関係するとして示すかのようである。しかし(III)の結果は、ESPと性周期との関係の存在を暗示し、またこの実験でESP測定が体温測定期とば別の時刻に行はれていた事実から、ほぼ婦人における性周期とESP機能との関係の存在が推定される。この表につき、ESP測定期と体温測定期に接して行うこと、他の時刻とおいて体温・ESPの測定を行ふこと、男性について同様の測定を行ふことにより検討することが必要である。また、本実験で示されたBBT・ESP関係の個人差は極めて対照的であり、この点、両被験者の生理的心理的差異を調査すること、他の被験者について同様の測定を行ふことが必要である。また、得失傾向の分析には、更にposition effectについての分析を加えねば意味あることと思はれる。

(連絡先) 東京都中野区深沢町7-1-1 日本体育大学(長田)  
東京都中野区中央4-26-14 日本心理学会(大谷)

# 描画の発達にみられる中心の思想

## —描画による精神発達の研究(2)—

### 津守 真 (お茶の水女子大学)

目的：描画の統計資料を通して、子どもの精神的世界の発達を明かにしようとする。日本心理学会第3回大会において、発達に伴つて変化するうすまきの性質について考察したので、その報告として、垂直線の性質について考察ある。この両者とあわせて、精神の発達にあり「中心」と求める傾向について考察する。

方法：3名の女児の描画で、かまはじめより、約10才にいたまで、ほとんどすべて蒐集し、既述したもの約500枚について、いくに垂直線に着目して観察し考察した。描画はすべて自発的に描かれたものであり、子どもが自身を深入りさせたりもののが多くある。以下、3名の女児は、A・P・Yと略記する。数字は整理番号と年令を示す。

結果と考察：最初に、垂直線の出現とその変遷について、概略を記す。(1) 垂直の出現、Yの垂直の最初と見ゆるものは、画面に向って鉛筆をもつた手を上から下へと運動させる動きで、画面に小山など3つ以上になる。(2:4-16) その後に、A・P・Yともに、斜線の線に沿つて描いた直線である。これは垂直線と2つ性質違う。((P25, 2:4, A73, 3:7)) (2) 人物画の初期にかけ水平と垂直くみあわせ、人のような曲線とかみと描きはじめる。その後と横かづけ、またヨリヨリ外へ、交叉する水平線と垂直線とふく。それはある時期には多數あらわれ、直立の垂直方向とその上台として水平線と解する。(Y128, 3:3-23, P77, 2:11-4) (3) 垂直の並列 人や動物に短い垂直線が多數つく。その描画運動は zigzag もつた動きで、その割合多數ある。(P133, 3:6-4, Y236, 3:7-3) (4) 垂直の基が立つ。Yの特長的白四角の線のくぼんだ部分に、西洋紙の上線ほどビビン垂直線と立て、その先に小円をつけ、「キューリップ」の形と「う」。(Y331, 3:8-9) そつとくに同样のものが数

現あらわれる。これは意志的に上方に向う動きと解する。それを裏付ける資料として、その前後にYの急激な精神的成长と示す記録がいくつもあらわれる。P, Aにも減少が同様の例がある。(P) 2歳, 3:10, A 198, 3:9-29) (5) 十字の成立 水平と垂直の組合である十字は、Pに最も多く、YにもみられるとAに少い。それがAPYの個性に対応する: ヒトとみ記録簿は多頭みられる。(6) 地面と示す地平線と、天の線の出現。Y, P, Aともに、ある時期より、地面を示す基底線と、天を示す直線とがなつたり描かれ、その中間の空間に、人や花や木や家が描かれる。(Y518, 3:10, P145, 3:11, A215, 4:0) (7) 地から天にのびる垂直線。地平線の上で移動するものと、空間をとるものと、天に属する雲、星、月などが、別れて描かれる。そして、地平線から、空間にまっすぐについえ立つて、天へと伸びて伸びて垂直の木、花、猿、はしご、自転車など。これらはA・P・Yとともに多くみられる。(Y404, 4:5-4, A309, 4:6-21, P804, 6:1-20) その後才こままで、木、家、カーキなどの形とくつて、種々の内容をもつたものが描かれる。

垂直、vertical は、もともと天頂を意味する語である。子どもの精神的世界に、地平線と天の線が成立するときに、地から天に向つて「ゆく」行為が生れる。その垂直の頂点は、子どもが外に向つてゆくヒヨリ中心である。それに對して、うずまきは内に中心を求めて收めんしてゆく。それは外から「くる」ものを「うける」ときの、自己の統合の成立である。それらが描画において成立したときは、子どもが「中心」を見出した瞬間にあり、それが行為となつてづまく、その断片が行動として組織される。(連絡先) 東京都港区白金台3:14, 22

# 音楽才能の遺伝と寿命の関係

佐瀬仁  
(国立音楽大学)

目的：音楽才能の遺伝をわが国の資料によつて調べ、何んらかの法則あるいは特筆すべき傾向が見られるか否かを検討することを目的とする。

方法：(1) わが国の音楽家で最も古い家系を持つているのは雅楽家である。雅楽家は大阪派、京都派、奈良派の3つに大別できるが、遺伝の研究を目的とした場合、奈良派に属する樂家に所蔵されている家譜が最も詳細であったので、それを本研究の主なる資料とした。

(2) 奈良派は2姓(伯・藤原)、ワ氏(上・辺・奥・塙・久保・東・芝)から成り立ち各氏が各々1家をなしているが、血縁的には相互に密接な交流があるので姓氏のちがいにはこだわらずに、実際の父子(母子)関係をたどつて筋の遺伝図に整理した。

(3) 家譜を整理することによつて作つた遺伝図は、滋井因田(高麗人、AD550年頃の帰化と推定される)から祐泰(芝氏・現存)に至る38代にわたるものであるが、本研究において考察の対象としたのは、滋井より9代後の光高(959~1,048)以後の26代についてである。記録が明確なことがその理由である。

(4) 26代中、母系を抱えることのできるのは4件であるが、そのうち3件は少詳なので考察の外にあいた。

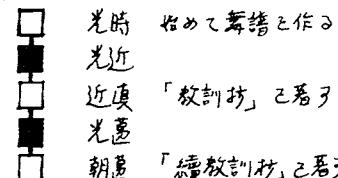
(5) 本遺伝図は奈良朝より現在に及ぶが、1,285~1,370年(元寇の乱以後の80年)までは、460~1,575年(足利時代末期から信長の天下統一の頃)に生存した者の10名についての官位、生没年には少詳の部分があつた。

結果：(1) 光高の子は則高、則高に3人の子があるがそのうちの1人の官位は極めて低い、「一芸も劣る」と記録されている。そしてその子孫は5代目に絶えている。もう1人は従五位下の官位であるから樂者は普通と見らざるが生年が少詳、その末は10代目に

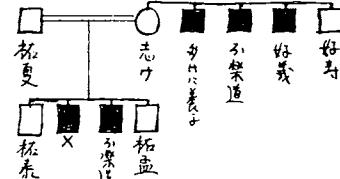
続えている。第1子光年、官位は從5位上、寿命は80才、この者のが樂才と長寿を奈良派樂人全般に伝える遺伝の根拠となつてゐるようと思われる。

(2) 光高より祐泰にいたる26代中、生没年の明らかな者は15代、そのうち最も寿命の長いのは90才短いのは41才。15代を平均すると71、9才である。

(3) 光高6代の末光時は「舞譜を始めて作る」と記録されている。その孫近直は舞譜書「教訓抄」をその孫朝重は「續教訓抄」と著述している。技術的にはいずれも名人と稱されてゐるようである。



(4) 本遺伝図の中に入るとするうちから宮内庁楽長が下目のように輩出している。



考察：(1) はるか古の昔から樂才が生まれる。

(2) 技術に優れた者は、理済化の才に通じる。また優れた樂才は隔世的に遺伝するように思える。

(3) 志貴には潜在的樂才が推定できる。母の樂才は遺伝的に優れた作用するように思える。

(4) 本研究にみける資料から確実に云えることは樂才は長寿の遺伝傾向と共存するということである。

(5) 祐泰に3人の息があるが、樂道に入らなかつた1人は数学に優れた者があることを参考として附言しておくる。

# 調身調息調心に関する心理学的研究(103)

## 一精神発達に関する心理学的研究(1)一

秋重恭子  
(駒沢大学)

身心発達の問題において月単位を採用すれば、それは出生月単位と一致することになる。人類学者 Huntington(1938)は出生月と人生諸般の現象との間に密接な関係があることを明らかにした。いくに知能と出生月との関係は、Blonsky(1929), Pintner(1931), Torulono(1933), 石井(1936), 秋重(1943), Craddick(1966)らによつて明らかにされ、性格との関係は、秋重(1943), Orme(1963) Davis(1964)らによつて明らかにされた。秋重(1951), Gersild(1951)は、カリキュラム編成との関係を究明した。秋重(1943)は1943年の教護児童の出生月に関する研究以来1968年に至る25年間に義務教育児童を対象とした9カ年の実験校を実施するほか幼稚園から大学生に至る間の精神発達を出生月の観点から研究し、出生月による相違は先天的なものではなく後天的な生活の諸条件に基づくことを明らかにした。

目的：現在全国の約1400名の児童が坐禅を取りくなっているが、児童の坐禅の実態はまだ明らかにされていない。本研究の目的は坐禅によってはじめて達成される身体および精神の理想的な最高の平衡状態が、児童においていかに達成されるか、平衡維持機能の年令による発達および年少者不利現象との関係を明らかにしようとするものである。

被験者：神奈川県川崎市立東門前小学校四年生、9才児男子10名、女子10名。東京都世田谷区立駒沢保育園5才児男子10名、女子10名。合計40名。

実験方法：第1実験、三栄測器製平衡機能測定器上に3分間直立させる。第2実験、趺坐の姿勢で3分間測定器上にすわらせる。

処理方法：計器に現われる重心の変動量は、実験条件によつて被験者の身長体重の差異によって異なる。この差異を除くために特定の基準を設け、この基準に基づいて変動量を測定した。本実験においては、時間

的に連続して記録される変動量がある一定値を超えた場合(5才児ではベンのふれ8mm, 10才児では4mmとなる。)に1回の変動とみなし、一定の測定時間中に変動した動搖の回数と動搖の継続時間とを検討した。

結果：測定の結果は、第I、第II表に示す通りである。

第I表 動搖継続時間

| 直立位  |       | 趺坐位  |      |
|------|-------|------|------|
| 5才児  | 10才児  | 5才児  | 10才児 |
| 年長   | 年少    | 年長   | 年少   |
| 95.2 | 94.9  | 29.2 | 55.8 |
| 74.5 | 100.7 | 8    | 23.6 |

第II表 動搖回数

| 直立位  |       | 趺坐位  |      |
|------|-------|------|------|
| 5才児  | 10才児  | 5才児  | 10才児 |
| 年長   | 年少    | 年長   | 年少   |
| 99.6 | 119.9 | 24.7 | 52.9 |
| 48.4 | 53.7  | 3.9  | 10.9 |

これらのデーターの統計的検討の結果は、身体の動搖回数については、姿勢条件、年令条件ともに、有意な差を有して、立位が趺坐位よりも大きな変動を示す( $P < .01$ )。5才児は、10才児よりも大きな変動を示す。 $(P < .01)$ 。動搖継続時間についても、姿勢条件、年令条件ともに、有意な差を有し、立位が趺坐位よりも継続時間が多く( $P < .05$ )。5才児では10才児よりも継続時間が長い。 $(P < .01)$ 。同一年令内の年長者年少者の動搖の継続時間を比較検討すると、立位趺坐位両条件を通じて年長者の動搖時間は年少者より有意に短い。 $(P < .05)$ 。動搖回数の差は統計的に有意でない。ここにはなお年少者不利現象が残存している。以上の事実は、平衡維持機能が決して単純な機能でなく、複雑困難な作用であろうことを示すものである。今後の研究によって、坐禅を修習することによって、年少者不利現象その他がいかに変化するかを明かにしたい。

(連絡先) 東京都世田谷区駒沢 駒沢大学心理学研究室

# 調身調息調心に関する心理学的研究(97)

## 坐禪における脳波の徐波化の変化に関する心理学的研究(2)

香渡 大玄  
(駒沢大学)

普勸坐禪儀にて坐處には厚く生地を敷き、上に蒲団を用い……云々とある。坐蒲は坐禪の調身調息調心に欠くことのできない重要な役割を果している。結跏趺坐をして、坐を高くすること即ち、調身により望ましい調息が可能となる。(松本、中村)。現在一般に用いられている坐蒲は、気候、風土、生活、経験に規定されて、長い年月を経て我々に適した現在の形となつたものである。それまでの過程においては、盤石の上に草を敷き、或は草あんなど円座の上に、或は、木を敷き、それそれに坐禪を行った記録がある。又坐蒲を全く用いない坐禪を行つてゐる例もある。

目的：本研究では、木の坐蒲、一般に用いられてゐる坐蒲、および坐蒲なしの3条件における坐禪の効果を脳波図、MT、サーミスター呼吸計、心電図を用いて測定分析し、坐禪に最も適した坐蒲の性質、および用法を明らかにする。

方法：① 被験者は、9年の坐禪経験を有する33歳の女子1名を用いた。

2) 条件 ① 坐蒲を用いない坐禪、② 一般に用いられている坐蒲による坐禪、③ 木の坐蒲を用いての坐禪の3条件で、坐蒲の高さは被験者の坐り心地の良い高さ(9cm)であった。上記の①②③の各条件は、閉眼、面壁、結跏趺坐、数息観(出息観)を行ふ、更に④ 仰臥位仰眼で数息観を行うものの、開始時、40日目、90日目の3回にわたり、それそれ9分間づつ測定した。測定に当つて、静かなシーレドール4の中で、禅堂の中に近い状態を設置し、扉の上に面壁、結跏趺坐を行つた。被験者は3ヶ月間にわたり、木の坐蒲による坐禪を週2回以上行い、その間に3回実験測定を行つた。

3) 装置、三塗測器銀 134チャンネル脳波計、三塗測器銀 24チャンネル帯域周波数分析機、サーミスター呼吸計、MT、を使用し、脳波は中央の前頭部、頭頂

部、後頭部を單極誘導し後頭部脳電図とMTと共に、周波数分析機で分析した。

結果：① 結跏趺坐時の普通の状態の脳波と、結跏趺坐数息観を行つて3時の脳波との比較は、数息観時の方が以波の出現率が高い。(被験者の結跏趺坐普通時の以波、平均、33.9%)

② 仰臥位数息観の以波出現率は47.8%で、坐禪の状態に近い。

③ 各条件下の今時呼吸回数は、① 坐蒲なし 12.8回、② 普通の坐蒲による坐禪、8.4回、③ 木の坐蒲による坐禪、8.4回、で坐蒲を用いない場合と、坐蒲を用いた場合との差が大きく認められる。

④ ①②③の各条件別の平均以波出現率は、① 坐蒲を用いない坐禪 51.6%、② 普通の坐蒲を用いての坐禪 57.1%、③ 木の坐蒲を用いた坐禪 52.4%、条件②が多く認められるが、①と③は大きな変化が認められない。

⑤ 3ヶ月間の実験によつて、以波の出現率の増加が認められた。

| 条件 | (1) 坐蒲なし |       |       | (2) 坐蒲 |       |       | (3) 木坐 |       |       |
|----|----------|-------|-------|--------|-------|-------|--------|-------|-------|
|    | 0日       | 40日   | 90日   | 0日     | 40日   | 90日   | 0日     | 40日   | 90日   |
| 1  | 39.2     | 59.9  | 65.4  | 45.0   | 60.0  | 67    | 46.5   | 57.5  | 63.6  |
| 2  | 43.5     | 57.1  | 63.6  | 50.6   | 61.3  | 63.8  | 54.6   | 48.1  | 75.3  |
| 3  | 53.1     | 51.2  | 58.4  | 28.0   | 61.0  | 67.9  | 56.9   | 49.7  | 67.3  |
| 4  | 47.9     | 54.5  | 57.2  | 27.5   | 59.8  | 61.2  | 57.3   | 48.9  | 65.1  |
| 5  | 39.8     | 44.5  | 58.0  | 60.3   | 56.2  | 65.1  | 48.0   | 35.0  | 61.3  |
| 6  | 52.9     | 37.4  | 59.1  | 63.5   | 51.6  | 65.2  | 44.4   | 47.0  | 61.4  |
| 7  | 46.0     | 43.8  | 65.5  | 51.0   | 64.3  | 60.1  | 44.0   | 49.8  | 57.1  |
| 8  | 57.4     | 48.9  | 55.2  | 62.9   | 63.4  | 56.0  | 23.9   | 48.0  | 56.5  |
| 9  | 37.4     | 40.0  | 58.3  | 49.9   | 61.5  | 64.0  | 30.5   | 33.9  | 64.5  |
| 合計 | 446.2    | 437.2 | 540.9 | 438.7  | 539.1 | 566.4 | 406.1  | 438.5 | 572.0 |
| 平均 | 49.6     | 48.6  | 60.0  | 48.7   | 59.9  | 62.9  | 45.1   | 48.7  | 63.6  |

(連絡先)

駒沢大学心理学研究室

# 言周身調息調心に関する心理学的研究(100) —精神療法と禅に関する心理学的研究(2)—

座間味宗和  
(駒沢大学)

研究の目的：オ1報告におけるSchultzの自律訓練法を神的に修正した方法を他の療法と併用して、院内実験状態で有効な現実社会への復帰意欲が乏しく、一種のホスピタリズムの傾向が見らるる精神分裂病、心身症の患者に施行し、好ましい結果が認められたことを報告した。

禅は、宗教の中でも高い価値を有するばかりではなく、精神障害者への治療、保健、創造性の開発などに顕著な効果をもつと言わゆる。

今回は、禅の呼吸訓練を通じて臨床精神療法の今後の修正の指針を探査しようとするものである。

方法と対象：被験者は、光端恐怖、赤面恐怖、タナトフォーリー、その他の不安や恐怖と伴い、時折り发作が認められ且つ長期にわたって強迫観念にならざれといふ神経症の患者を4名、年々、18才から31才迄を対象にして次の条件で訓練を3ヶ月間行つた。

被験者には、半眼、背臥位の姿勢をとらせる。

(I)・隨息觀：自然の呼吸に目を向ける。

(II)・公案呼吸：呼息・吸息を深く静かにする。

(III)・數息觀：呼吸・吸息と一緒に行ながら1から10迄数えることに精神集中させる。

(I)、(II)、(III)の呼吸訓練を1回に20分～25分間、朝、昼、晩の3回乃至4回行つた。訓練開始の日から向精神薬の服用を中止した。

上記の各条件下における脳電図を三栄測器製12chの脳波計あるいは三栄測器製A102周波数帯域分析(分析時間30秒)を用いて記録を行つた。

脳電図は、被験者の前頭部、頭頂部、後頭部から単極誘導法によつて導出した。脳波分析は、後頭部のみに限定し、測定時の室内温度を22度から30度に保つた。

結果および考察：結果の整理は次の通りである。

オ1、2表、オ1図に示している如く、公案呼吸と數息觀の条件差に基づく実験結果の間に統計的な差が認められなかった( $P > 0.5$ )。

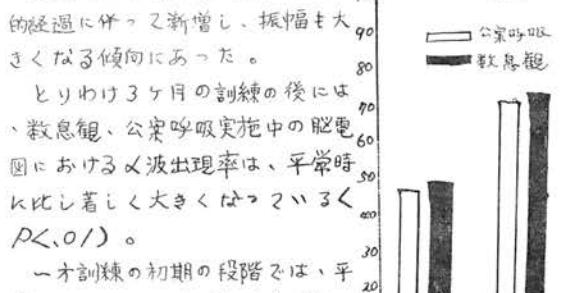
オ1表：呼吸訓練前の脳電図における $\alpha$ 波出現率

| cond | 公案呼吸  |       |       |       |       | 數息觀   |       |       |       |       |       |
|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
|      | 1分    | 2分    | 3分    | 4分    | 5分    | 平均    | 1分    | 2分    | 3分    | 4分    | 5分    |
| KK   | 59.02 | 53.20 | 36.50 | 52.32 | 49.75 | 50.28 | 40.92 | 71.83 | 49.81 | 56.76 | 56.12 |
| MR   | 59.11 | 54.53 | 31.67 | 52.05 | 52.36 | 51.83 | 44.97 | 45.90 | 53.91 | 50.81 | 50.26 |
| MA   | 72.10 | 52.36 | 60.52 | 63.27 | 59.08 | 59.69 | 48.59 | 52.77 | 49.80 | 56.28 | 55.53 |
| TM   | 45.07 | 43.87 | 41.45 | 37.95 | 49.16 | 43.52 | 49.16 | 41.47 | 42.91 | 36.75 | 31.91 |

オ2表：呼吸訓練後の脳電図における $\alpha$ 波出現率

| cond | 公案呼吸  |       |       |       |       | 數息觀    |       |       |       |       |       |        |
|------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
|      | 1分    | 2分    | 3分    | 4分    | 5分    | 平均     | 1分    | 2分    | 3分    | 4分    | 5分    | 平均     |
| KK   | 73.51 | 78.06 | 83.73 | 83.28 | 83.75 | 80.51% | 77.70 | 77.25 | 68.57 | 81.21 | 79.88 | 76.20% |
| MR   | 79.88 | 80.12 | 76.40 | 75.26 | 67.17 | 70.80% | 78.31 | 72.20 | 80.11 | 73.04 | 72.52 | 78.29% |
| MA   | 72.84 | 72.36 | 68.17 | 40.02 | 67.23 | 65.57% | 71.57 | 76.88 | 72.35 | 70.05 | 70.56 | 74.27% |
| TM   | 68.04 | 61.56 | 69.30 | 69.31 | 68.78 | 66.80% | 71.86 | 64.11 | 62.99 | 60.99 | 72.46 | 68.30% |

オ1図：5分毎の $\alpha$ 波出現率



オ1訓練の初期の段階では、平常よりもむしろ $\alpha$ 波出現率が低下を示した。従つてこへらは、呼吸統制の反復による効果であると考えられる。

また患者も治癒を迎えた。

考察：これらの結果から呼吸は、情動と密接な関係を有しており、訓練を続ける事が心身の強化に大きく影響をあたえる。禅は精神治療へ多くの効果を持つことが今後の研究に譲りたい。

(連絡先)、駒沢大学心理学研究室

# 調身 調息 調心に関する心理学的研究(102)

## 歩行を中心とした起居動作と呼吸との関係に関する心理学的研究(2)

根岸 美奈子  
(駒澤大学)

目的：心身の安定をもたらす呼吸のパターン及びこのような呼吸を生ぜしめる起居動作のパターンを見つけることを目的に、今回は、禅の修行年数が大となるにつれて、姿勢・動作・禅定中等での呼吸パターンが特定のパターンに近づくか否か、或は、各々の条件で呼吸パターンに差があるか否かを見た。

方法：(1) 装置。ガス代謝の測定はエレクトロ・メタボラーを用い、ポリグラフにより呼吸曲線を測定、歩行及び経行では、Douglas・バッグを用いて蓄積した呼気量からその平均値を求めた。

(2) 被験者。Group A；参禅経験なしの者、Group B；修行年数1～3年の者、Group C；修行年数4～7年の者。

(3) 実験条件。(I) 立位姿勢5分間の測定、(II) 歩行(経行)とほぼ同速度、同歩幅)5分間の測定、(III) 坐位姿勢10分間の測定、(IV) 坐禅20分間の測定、(V) 経行5分間の測定。

結果及び考察：MRCは条件I・II・IVで姿勢条件は5%水準、修行年数は1%水準で有意差を示し、条件I・IIIは修行年数のみ5%水準で有意差を示した。

表1-1 MRC(分時呼吸数)

| S.       | P. | 立位   | 歩行   | 経行   |
|----------|----|------|------|------|
| 参禅経験なし   |    | 13.5 | 15.5 | 10.2 |
| 修行年数1～3年 |    | 10.1 | 12.2 | 8.7  |
| 修行年数4～7年 |    | 8.5  | 8.1  | 3.7  |
|          |    | 32.1 | 35.8 | 22.6 |

表1-2 MRC

| S.       | P. | 立位   | 坐位   |
|----------|----|------|------|
| 参禅経験なし   |    | 13.5 | 13.7 |
| 修行年数1～3年 |    | 10.1 | 9.5  |
| 修行年数4～7年 |    | 8.5  | 9.5  |
|          |    | 32.1 | 32.7 |

表1-3 MRC

| S.       | P. | 坐位   | 坐禅   |
|----------|----|------|------|
| 参禅経験なし   |    | 13.3 | 7.2  |
| 修行年数1～3年 |    | 9.5  | 8.4  |
| 修行年数4～7年 |    | 9.5  | 5.4  |
|          |    | 32.3 | 21.0 |

MRCのIII・IV、MV、RQのI・III、III・IVでは有意差は示さなかった。RQのI・II・Vで姿勢条件は5%水準、修行年数は1%水準で有意差を示した。姿勢より見た呼吸パターンの相違は条件I・II・V間で経行が最も深くゆるやかな呼吸で、心身の安定を示し、修行年数では年数が大となるに従って各姿勢共心身の安定が見られる。他は条件差があまり明らかでない。

表2-1 MV(分時呼気量)

| S.       | P. | 立位(2) | 歩行(2) | 経行(2) |
|----------|----|-------|-------|-------|
| 参禅経験なし   |    | 8.8   | 12.4  | 9.9   |
| 修行年数1～3年 |    | 7.6   | 9.6   | 9.1   |
| 修行年数4～7年 |    | 6.8   | 8.2   | 11.5  |
|          |    | 23.2  | 30.2  | 30.5  |

表2-2 MV

| S.       | P. | II位(2) | 坐位(2) |
|----------|----|--------|-------|
| 参禅経験なし   |    | 8.8    | 8.5   |
| 修行年数1～3年 |    | 7.6    | 6.7   |
| 修行年数4～7年 |    | 6.8    | 7.2   |
|          |    | 23.2   | 22.4  |

表2-3 MV

| S.       | P. | 坐位(2) | 坐禅(2) |
|----------|----|-------|-------|
| 参禅経験なし   |    | 8.5   | 6.7   |
| 修行年数1～3年 |    | 6.7   | 6.4   |
| 修行年数4～7年 |    | 7.2   | 6.2   |
|          |    | 22.4  | 19.3  |

表3-1 RQ(呼吸節)

| S.       | P. | 立位   | 歩行   | 経行   |
|----------|----|------|------|------|
| 参禅経験なし   |    | 0.89 | 0.88 | 0.88 |
| 修行年数1～3年 |    | 0.91 | 0.88 | 0.89 |
| 修行年数4～7年 |    | 0.94 | 0.9  | 0.91 |
|          |    | 2.74 | 2.66 | 2.68 |

表3-2 RQ

| S.       | P. | 立位   | 坐位   |
|----------|----|------|------|
| 参禅経験なし   |    | 0.89 | 0.91 |
| 修行年数1～3年 |    | 0.91 | 0.89 |
| 修行年数4～7年 |    | 0.94 | 0.93 |
|          |    | 2.74 | 2.73 |

表3-3 RQ

| S.       | P. | 坐位   | 坐禅   |
|----------|----|------|------|
| 参禅経験なし   |    | 0.91 | 0.92 |
| 修行年数1～3年 |    | 0.89 | 0.9  |
| 修行年数4～7年 |    | 0.93 | 0.95 |
|          |    | 2.73 | 2.77 |

## 調身調息調心に関する心理学的研究 (96)

人格の変容に及ぼす調息の効果に関する心理學的研究(3) 中村尚志  
(駒沢大学)

目的:これまでの研究から、呼吸のパターンは、3つの型に分類されることが明らかになつた。

本研究では、前回までの研究結果をもとに、如何なる呼吸法が人間にとつて最良であり、かつ、臨床効果も高いかを究明することを目的とする。

方法:禅・神道・ヨガ・中国における呼吸法・岡田式・藤田式・二木式・及びノールズ式呼吸法を参照して、I・IIA・IIB・III(N型)を工夫した。この呼吸法実修中の被験者の分時呼吸数(M.R.C.)・分時換気量(M.V.)・一回換気量(T.V.)・O<sub>2</sub>・CO<sub>2</sub>代謝量、呼吸商(R.Q.)、腹圧(Pab)の変化値を測定、分析して、この呼吸法の心理的、生理学的効果を検討する。

被験者は健康な大学生男子3名、大学院男子1名、主婦1名及びO.I.1名、計6名を用いた。年令は男子20~32才、女子20及び30才であつた。

実験条件は被験者にN型呼吸I・IIA・IIB・IIIを45年4月から毎日就眠前に20~30分間、床の上で、ほゞ4ヶ月間練習させて、習得させた。測定は午後8時30分から10時の間に行われたが、測定に先立ち、最低1時間以上は、エア・コンディショニングの利いた静かな部屋で、ベットに仰臥させ、安静状態を保つた。

測定方法は前回の報告と同様であるが、腹圧の測定は、T K K式R D - 4型精神反射電流測定器の呼吸相測定用蛇腹ホースの改良型をポリグラフのトランス・ジャッターに接続して、測定した。測定位置はAgostoni(1966)らの研究に従つた。

## 結果と考察

N型呼吸I・IIA・IIB・IIIにおける各測定値は第1表に示した通りである。第2表は同じ被験者の普通呼吸・坐禅時呼吸の測定値を示している。

第1表・第2表から、N型の呼吸数は、普通呼吸時の平均14.2から2.8と大きく減少している( $P < 0.01$ )、一回換気量は逆に0.92lから2.37lへと3倍強に増加している( $P < 0.01$ )、O<sub>2</sub>・CO<sub>2</sub>代謝量の関係を呼吸商の面からみると、I・IIA型と普通呼吸との間には顕著な有意差が認められた( $P < 0.01$ )が、IIB・III型との間には認められなかつた。

坐禅時呼吸・N型呼吸・普通呼吸の関係は、坐禅時呼吸とN型呼吸I・IIAはそのパターンIC於いて類似しているが、N型呼吸・IIB・III間には有意差が認められる( $P < 0.01$ )、坐禅時呼吸と普通呼吸間には、各測定値間に差が認められた( $P < 0.01$ )。

第2表

| cond. | 普通呼吸 |      |      |       |       |       |     |     | 坐禅時呼吸 |       |       |       |    |  |  |  |
|-------|------|------|------|-------|-------|-------|-----|-----|-------|-------|-------|-------|----|--|--|--|
|       | VS   | MRC  | MV   | T-V   | MOC   | MCAE  | RQ  | MRC | MV    | T-V   | MOC   | MCAE  | RQ |  |  |  |
| Sub   |      |      |      |       |       |       |     |     |       |       |       |       |    |  |  |  |
| H.A   | 13.8 | 12.0 | 0.87 | 0.403 | 0.398 | 0.987 | 3.0 | 4.6 | 1.5   | 0.119 | 0.241 | 1.271 |    |  |  |  |
| T.N   | 12.0 | 10.6 | 0.88 | 0.306 | 0.302 | 0.986 | 2.9 | 3.9 | 1.3   | 0.164 | 0.201 | 1.225 |    |  |  |  |
| K.M   | 13.6 | 11.6 | 0.85 | 0.301 | 0.295 | 0.980 | 3.4 | 5.6 | 1.7   | 0.186 | 0.224 | 1.204 |    |  |  |  |
| M.N   | 15.8 | 5.2  | 0.34 | 0.298 | 0.283 | 0.949 | 3.8 | 6.1 | 1.6   | 0.178 | 0.216 | 1.213 |    |  |  |  |
| K.K   | 16.2 | 6.7  | 0.41 | 0.269 | 0.251 | 0.933 | 4.0 | 5.6 | 1.4   | 0.264 | 0.293 | 1.109 |    |  |  |  |
| K.O   | 14.2 | 13.0 | 0.92 | 0.283 | 0.267 | 0.943 | 3.4 | 4.2 | 1.2   | 0.186 | 0.205 | 1.100 |    |  |  |  |
| M     | 14.2 | 9.85 | 0.72 | 0.310 | 0.299 | 0.963 | 3.4 | 5.0 | 1.5   | 0.196 | 0.230 | 1.171 |    |  |  |  |

第1表

| cond. | N I型呼吸 |      |     |       |       |       |      |      | N II A型呼吸 |       |       |       |     |      |      |       | N II B型呼吸 |       |      |      |     |       |       |       | N III型呼吸 |  |  |  |  |  |  |  |
|-------|--------|------|-----|-------|-------|-------|------|------|-----------|-------|-------|-------|-----|------|------|-------|-----------|-------|------|------|-----|-------|-------|-------|----------|--|--|--|--|--|--|--|
|       | VS     | MRC  | MV  | T-V   | MOC   | MCAE  | RQ   | MRC  | MV        | T-V   | MOC   | MCAE  | RQ  | MRC  | MV   | T-V   | MOC       | MCAE  | RQ   | MRC  | MV  | T-V   | MOC   | MCAE  | RQ       |  |  |  |  |  |  |  |
| Sub   |        |      |     |       |       |       |      |      |           |       |       |       |     |      |      |       |           |       |      |      |     |       |       |       |          |  |  |  |  |  |  |  |
| H.A   | 5.7    | 12.2 | 2.4 | 0.354 | 0.443 | 1.166 | 1.5  | 5.2  | 3.4       | 0.245 | 0.254 | 1.004 | 1.5 | 4.9  | 2.3  | 0.245 | 0.244     | 0.996 | 1.5  | 3.5  | 2.4 | 0.199 | 0.191 | 0.995 |          |  |  |  |  |  |  |  |
| T.N   | 4.4    | 9.5  | 2.2 | 0.209 | 0.238 | 1.093 | 2.5  | 5.9  | 2.3       | 0.274 | 0.277 | 1.002 | 2.9 | 5.7  | 2.1  | 0.233 | 0.229     | 0.993 | 1.3  | 3.9  | 3.0 | 0.164 | 0.221 | 1.021 |          |  |  |  |  |  |  |  |
| K.M   | 4.4    | 8.7  | 2.0 | 0.298 | 0.246 | 1.074 | 2.5  | 6.1  | 2.5       | 0.262 | 0.275 | 1.049 | 2.8 | 5.9  | 2.1  | 0.254 | 0.241     | 0.948 | 1.2  | 3.7  | 3.0 | 0.186 | 0.207 | 0.929 |          |  |  |  |  |  |  |  |
| M.N   | 5.9    | 9.2  | 1.6 | 0.272 | 0.221 | 1.143 | 2.0  | 5.1  | 2.6       | 0.233 | 0.241 | 1.039 | 3.0 | 4.3  | 2.2  | 0.177 | 0.176     | 0.992 | 1.4  | 3.8  | 2.7 | 0.178 | 0.164 | 0.970 |          |  |  |  |  |  |  |  |
| K.K   | 5.8    | 8.3  | 1.4 | 0.253 | 0.282 | 1.114 | 2.2  | 5.8  | 2.6       | 0.253 | 0.282 | 1.075 | 2.2 | 5.4  | 2.5  | 0.314 | 0.298     | 0.970 | 1.6  | 3.6  | 2.3 | 0.264 | 0.267 | 0.978 |          |  |  |  |  |  |  |  |
| K.O   | 5.2    | 9.2  | 1.8 | 0.260 | 0.292 | 1.127 | 2.6  | 5.8  | 2.3       | 0.255 | 0.265 | 1.039 | 2.6 | 5.2  | 2.0  | 0.252 | 0.237     | 0.940 | 1.8  | 3.9  | 2.2 | 0.186 | 0.263 | 0.926 |          |  |  |  |  |  |  |  |
| M     | 5.12   | 9.51 | 1.9 | 0.271 | 0.329 | 1.123 | 2.22 | 5.65 | 2.62      | 0.254 | 0.266 | 1.038 | 2.3 | 5.23 | 2.77 | 0.246 | 0.258     | 0.974 | 1.47 | 3.76 | 2.6 | 0.226 | 0.219 | 0.957 |          |  |  |  |  |  |  |  |

# 人の生き方に關する心理学的研究(12)

秋重義治  
(駒沢大学文学部)

○西田順造  
(駒沢大学)

本研究は、九州大学生き方研究班および駒沢大学生き方研究班との共同研究の継続である。前回迄の研究においては、「CLSK」とよび、それに修正を加えた「CLS」の調査票を用いて、社会的適応者群ならびに、社会的不適応者群とされる各グループすなわち、健康優良者群(H)、一般正常成人者群(N)、身体的病者群(P)、精神的病者群(Pm)、受刑者群(C)の5つのグループについて調査し、(H)、(N)のグループは、好ましい状態に、逆に(Pm)、(C)のグループは、好ましくない状態にあることが明らかにされた。また、一般正常成人のみを対象とし、年代別、性別に、調査票の結果が如何なる有意差として現われたかの考察を行うことにより、年代を経るにつれて、望ましい状態にあることなどが明らかにされた。今回は、因子分析法を用いて、前回迄の研究結果に、さらに、検討を加えたものである。

## 目的：

調査項目(400)を構成する7つのカテゴリー、すなわち、身体的条件(I)、心理的条件(II)、物理的(衣食住)条件(III)、家族関係(IV)、職業関係(V)、政治、経済、教育、道徳(VI)、芸術、宗教、人生観等(VII)について、各カテゴリー間の相関に基づき、それらが、如何なる因子構造をもっているかを明らかにしようとするものである。

## 方法：

特に、20才代の一般正常成人である男性を対象とし、前回迄の研究によって、すでに、得点化されている調査資料に基づき、ランダムに抽出された20名について、Pearsonの積率相関係数を求め、これによって得られた行列から、完全セントロイド法による因子分析したものである。使用した電子計算機は、TOSBAC-3400および、TOSCAL-1623Gである。

## 結果および考察：

第1表 直交回転後の因子行列

|     | 1   | 2    | 3    | 4    | 5   |
|-----|-----|------|------|------|-----|
| I   | .06 | -.48 | -.06 | -.05 | .24 |
| II  | .25 | .46  | .00  | .29  | .37 |
| III | .00 | .27  | .91  | .09  | .91 |
| IV  | .21 | .43  | .43  | .06  | .42 |
| V   | .78 | .24  | .38  | .20  | .85 |
| VI  | .69 | .35  | .40  | .13  | .78 |
| VII | .66 | .31  | .34  | -.43 | .65 |

分析の結果、4因子が抽出された。これを直交回転法によって回転し、第1表に示す結果が得られた。第1因子は、職業関係(V)、政治、経済、教育、道徳(VI)、芸術、宗教、人生観(VII)において、高い因子負荷量をもっていることが、明らかにされた。第2因子は、身体的条件(I)、心理的条件(II)、家族関係(IV)において、高い因子負荷量をもつ、第3因子については、衣食住(III)において、高い因子負荷量をもっていることが、明らかにされた。また、第4因子については、心理的条件(II)、職業関係(V)に若干の因子負荷量が、見出されてゐる。以上の結果から各因子に、第2表に示す解釈を与える。

第2表

|      |       |           |
|------|-------|-----------|
| 第1因子 | ----- | 社会的・文化的因子 |
| 第2因子 | ----- | 個体的・家族的因子 |
| 第3因子 | ----- | 物理的環境因子   |
| 第4因子 | ----- | 解釈 保留     |

本研究は、生き方に、必要不可欠な条件を見つけることを研究目標として出発したものであって、今後さらに、他の対象者グループとの対比検討によって、新たな知見を得、因子解釈をも、さらに精緻ならしめんとするものである。

# 家庭の職業と人間形成

-自己評価と他人評価-

永沢 幸七  
(東京家政学院大学)

目的：(1)青年の人格の分析につけて(2)家庭の職業と彼の人格形成と、ビのような関係があるかを自己評価と他人評価の両面から分析する。

方法：(1)材料 文章完成法 SD検査式(東教大長島他作成) (2)期日 6月～7月上旬 (3)被験者 都内近県の高校生 高1女33人、高2女52人、高1男5人、高2男50人、高3男47人、男148人女85人合計238人 (4)場所 家庭 教室 (5)評価方法

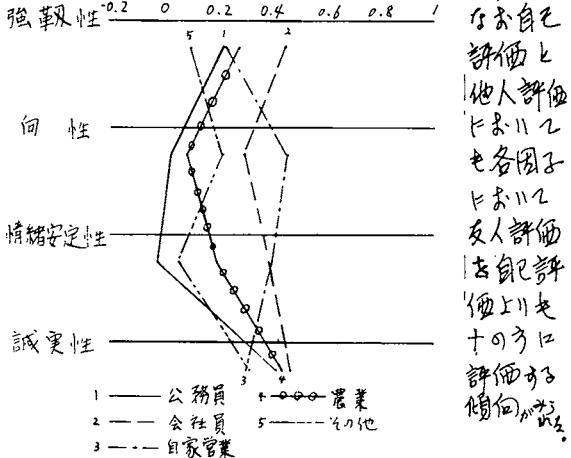
A 文章完成法 設問を50問作成 ハーツナリギー診断のため13のカテゴリに分類し左 ①家族への態度…2, 15, 17, 43 ②自分の能力への態度…4, 5, 23, 46 ③友人や知人への態度…3, 13, 25, 34, 40, 42 ④在籍の人への態度…8, 19, 20, 36, 39, 49 ⑤異性への態度…6, 9, 12, 29 ⑥命令し得る人の態度…21, 22, 24, 45 ⑦罪悪感…26, 27, 30, 32, 44 ⑧自尊-将来への態度…31, 33, 37, 41, 50 ⑨身体への態度…7, 10, ⑩父への態度…11, 47 ⑪学校への態度…11, 35 ⑫金銭への態度…16, 38 ⑬母への態度…28, 48

scoring は次の4品等にした。①激しい障害、若しい情緒的葛藤、困難性を処理するのに治療を要するもの…2、②中程度の障害、ある程度の葛藤、困難性を有するが、治療による救助を必要とするが、自分で処理が可能であるもの…1、③障害のない正常なもの…0 ④不明 材料の不足なもの…無答。B. 東教大「自我の適応の關係」 ①強靭性因子 ②柔軟性因子 ③情緒安定小笠因子 ④誠実性因子 以上の4つの中の因子を3から-3までの7段階でかけられ、それらの項目に設けられた点数を総合し

一つの因子の得失として判定。

結果：①家族への態度における半数以上の方が満足です。②自分の能力では女子が男子に比べて葛藤が高め、年長になると不満がなくなる。③友人・知人への態度は女子が不満をもつて居る人が多い。④男子は不満がみられる。親連するにつれて不満が少くなる。⑤上司に命令されることがよりも詰りあい納得の上でありと不満を感じる。⑥罪悪感はウキのときはむしろ激しい障害を感じやすい。以下省略

職業別 公務員-女子は向性、情緒安定性が低め。男子は女子と比較して強靭性と誠実性に乏しい。会社員-女子は男子に比較して強靭性・情緒安定性、誠実性いずれの面においても優れています。また発達につれて誠実性と強靭性がよくなります。男子では発達とともに強靭性減少の傾向があります。自家営業-女子は強靭性小さく、情緒安定性、誠実性ともに優れ、男子は強靭性がよくなります。農業-発達につれて強靭性、誠実性はよくなっています。情緒安定性は減少。Xの他の職業-男子は誠実性と情緒安定性がよいのに対し女子は強靭性が高め。



# 調身 調息 調心に関する心理学的研究 (104)

## 調息の機能に関する生理、心理学的研究

竹内 明眸  
(鶴澤大学)

目的： Feedback-EEG の研究において Kamiya (1969) 及び Kiefer (1970) 等の研究者が行った実験で被験者は聴覚-Feedback 装置を通して自己のアルファ-律動の出現のコントロールを学習することが可能であることが報告された (= Bio-Feedback)。更にこの Bio-Feedbackにおいて被験者にアルファ-律動を多く出現させることによって、良好な心的状態をかなり継続的に生じしらるることが報告されている。Kamiya 及び Kiefer によってこの心的状態でのアルファ-律動は座禅中に見られるアルファ-律動と類似するということが指摘されている。

そこで本研究では、Bio-Feedback を禅との関係について提える。聴覚 Feedback による生理 心理的変動と座禅の修業による生理 心理的変動との関係を検討し、更に禅において主導的な要素である念息、数息等の呼吸法と Feedback とを結合する事によって、そこから最も適切な呼吸法を見出さんとするものであり、この実験はその試みとして行なわれたものである。

方法： 被験者は男子大学生 (27~33才) の 4 名であり、次の 2 つの条件に各々 2 名であった。

(1) Feedback のみを行う (右の表 第 1 表 及び 第 2 表)

(2) Feedback と念息を結合して行う (第 3 表、第 4 表)

Feedback 訓練は 8 日間行なわれ、その間毎回測定を行なった。1 回約 20 分間の Feedback 訓練の後半の 10 分間を測定した。被験者は適度に暗くされた半暗室のニードルーム内で壁面から 1.5 m の所に椅子の座勢で行なった。すべての Feedback の訓練は閉眼 (半眼のみ) で行なわれた。また Feedback の聴覚刺激が与えられるアルファ-律動の基準は、各被験者の閉眼安静時ににおけるアルファ-律動の振幅の大きさによってそれを決定められた。聴覚刺激は脳波計にアルファ-律動が 0.3 秒以上継続して現れた時に与えられ、アルファ-律動が消失した後、約 0.2~0.3 秒以内に再び継続して現れた時に聴覚刺激はその間は継続しなままで与えられた。

測定は脳波計の他に呼吸、心搏及び GSR を同時記録し、各実験の終了後、ただちに各被験者の反省報告を記述した。

結果及び考察： 下の第 1 表から第 4 表に示されておりおろに、各被験者、及ぶ条件 (1)~(2) との関係においてはタイムペーセント、呼吸数、心搏数、GSR のいずれにも Feedback 効果によるアルファ-律動の一定の傾向や変動、及び差異がほとんど認められなかつた。

呼吸数においてアルファ-波出現が僅かがら增加の傾向を示していることは、訓練期間、その他実験方法を検討することを促すものと考えられる。反省報告でアルファ-律動の出現について、被験者は普通に述べられたことは、目の位置と何等かの関係があると感じられること、意識の自然的統一と集中において得られるなど、更に呼吸との関係では呼吸の時に比較的多くアルファ-律動が出現すると感じられることがあるが報告された。

第 1 表 (Feedback のみ) 被験者 A

| 呼吸出現率    | 安静時   | Feedback 1 | Feedback 2 | Feedback 3 | Feedback 4 |
|----------|-------|------------|------------|------------|------------|
| △波出現率    | 0.3   | 4.90       | 7.90       | 13.95      | 26.75      |
| タイムペーセント | 0.05  | 0.81       | 1.31       | 2.16       | 3.45       |
| 分毎呼吸数    | 14.30 | 14.70      | 15.63      | 12.84      | 13.05      |
| 分毎心搏数    | 69.60 | 72.00      | 73.05      | 78.50      | 78.80      |
| GSR      | 0.6   | 0.20       | 0.30       | 1.00       | 0.60       |

第 2 表

| 被験者 B    |       |        |        |        |        |
|----------|-------|--------|--------|--------|--------|
| △波出現率    | 225.0 | 338.20 | 291.50 | 320.70 | 389.40 |
| タイムペーセント | 42.5  | 56.3   | 48.5   | 53.50  | 68.80  |
| 分毎呼吸数    | 16.00 | 13.10  | 16.40  | 14.00  | 14.90  |
| 分毎心搏数    | 70.60 | 67.05  | 68.67  | 71.50  | 76.97  |
| GSR      | 0.9   | 1.2    | 1.2    | 1.5    | 1.4    |

第 3 表 (Feedback と念息) 被験者 C

| 被験者 C    |       |       |       |       |       |
|----------|-------|-------|-------|-------|-------|
| △波出現率    | 0.00  | 2.90  | 9.85  | 5.65  | 20.70 |
| タイムペーセント | 0.00  | 0.48  | 1.6   | 0.9   | 3.4   |
| 分毎呼吸数    | 13.50 | 9.80  | 7.80  | 9.60  | 13.77 |
| 分毎心搏数    | 81.00 | 86.80 | 76.50 | 79.00 | 78.50 |
| GSR      | 0.60  | 1.90  | 0.60  | 1.50  | 1.00  |

第 4 表

| 被験者 D    |       |        |        |        |        |
|----------|-------|--------|--------|--------|--------|
| △波出現率    | 241.7 | 354.00 | 353.90 | 310.70 | 407.10 |
| タイムペーセント | 40.4  | 59.00  | 59.00  | 51.60  | 67.8   |
| 分毎呼吸数    | 13.70 | 1.80   | 1.75   | 1.60   | 1.43   |
| 分毎心搏数    | 69.41 | 81.50  | 81.10  | 85.50  | 81.98  |
| GSR      | 1.5   | 2.1    | 2.3    | 2.0    | 2.4    |

# 調身調息調心に関する心理学的研究(106)

## 調身に関する心理学的研究(1)

—特に禅定中の姿勢を中心とし—

牧 正興

(駒澤大学)

目的：坐蒲の高さの問題については共同研究者、松本、中村、武井(1969)らは、腰圧下および重心変動の観点から、身長155cmに対する7.5cmの高さが最も安定しやすいことを明らかにした。本研究はこれらの研究をさらに進め、正しい坐禅の基本的、標準的姿勢の在り方を、生理心理学的立場から明らかにしようとするものである。

方法：被験者は大学生および大学院生の計3名。坐禅トトロイドは、それも未経験者2名。条件：1試行2分間。坐蒲の高さを5条件0cm, 5cm, 10cm, 15cm, 20cm、10分間、それそれの坐蒲をランダムな順序で使用せし。なお0cmの場合は両脚の高さを床と同じ高さまで上下、高さ以外の坐蒲の影響をどの条件に於ても、同一ながらしめるように工夫した。本来ならば結跏趺坐を行なうはずであったが、結跏趺坐は被験者が困難を訴えていたので半跏趺坐を利用した。装置：5つの条件のそれぞれにつき、3cmマス目スクリーンを背景として被験者を趺坐せしめ、写真を撮影した。それらの写真を基にして上背後弯角、腰部前弯角、脚と骨盆の内角度を測定した。禅定姿勢中主要と思われる筋肉のうち、僧帽筋上下、闇脊筋のそれそれを左右6ヶ所を選び、これらについて筋電図を表面電極法で双極誘導して下。脛波は正中線上、前頭、頭頂、後頭から單極誘導により導出した。このほか、EMGも同時記録した。

結果：各筋肉から得られた筋活動の強さは神経筋単位(Neuromuscular unit)の放電頻度との関連性に参加する神経筋単位の数によって決まるゆけであるが、この場合これを解明し、分析することは不可能に近いので、オシログラフに表われた筋活動によるペンの振度と振幅に注目し、それを点数式に0, 0.5, 1.0, 2.0, 3.0の5段階に分けた。0はほとんど活動がみられないもの、3.0は最も激しい筋活動を示す。オシロ表は3名の被験者における各試行の平均得点を示す。各試行の坐り具合トトロイドの内省報告と得点とを比較したのがオシロ

表である。姿勢計測トトロイドは、坐蒲の高さが増すごとに上背後弯角、腰部前弯角は縮少する傾向にあることが見出され、脚と骨盆は言うまでもなく拡大する。

考察：坐禅に於ては、筋緊張が余りにも多いといふことは、身心の安定を維持する上からも、また正しく長時間坐るという面からみても決して好ましいとは言えまい。

5条件の試行後の内省報告トトロイドは、一番困難と報告した0cmと筋電図の緊張度が一番高い0cmが合致していること、更に一番坐りやすいく報告した10cmと緊張度が最も低い10cmが合致したこと実から次の結論を引き出すことができる。

I) 坐蒲の機能は調身の役割を果し、これらには、調息調心に寄与している。

II) 坐蒲の高さは、ほぼ10cm程度の高さが最も適当として感じられ、かつ、これは筋電図の緊張度の多少と平行一致している(代謝量との関係は今後の研究に譲る)。

測定結果からみて坐蒲の高さが脛波、EMGにも影響を及ぼしていることは明らかであるが、これにつけての分析、検討は今後の研究に譲りたい。

オシロ表 姿勢のパターンと筋活動

| 筋肉 姿勢    | Pattern I<br>(0cm) | Pattern II<br>(5cm) | Pattern III<br>(10cm) | Pattern IV<br>(15cm) | Pattern V<br>(20cm) | Total |
|----------|--------------------|---------------------|-----------------------|----------------------|---------------------|-------|
| (上) 僧帽筋左 | 1.0                | 0.7                 | 0.5                   | 1.0                  | 0.5                 | 3.7   |
| (上) 僧帽筋右 | 1.0                | 1.0                 | 0.7                   | 1.5                  | 0.7                 | 4.9   |
| (下) 僧帽筋左 | 1.0                | 1.2                 | 1.0                   | 0.8                  | 1.7                 | 5.7   |
| (下) 僧帽筋右 | 1.8                | 2.0                 | 1.5                   | 1.2                  | 1.7                 | 8.2   |
| 闇脊筋 左    | 0.5                | 0.3                 | 0.2                   | 0.2                  | 0.8                 | 2.0   |
| 闇脊筋 右    | 0.8                | 0.8                 | 0.5                   | 0.3                  | 0.5                 | 2.9   |
| Total    | 6.1                | 6.0                 | 4.4                   | 5.0                  | 5.9                 |       |

オシロ表

| 条件    | 内省報告    | 筋電図   |       |
|-------|---------|-------|-------|
|       |         | 条件    | 筋電図   |
| 0 cm  | 最も坐りにくく | 0 cm  | 6.1 大 |
| 20 cm | ↑       | 5 cm  | 6.0 ↑ |
| 15 cm |         | 20 cm | 5.9 ↓ |
| 5 cm  | ↓       | 15 cm | 5.0 ↓ |
| 10 cm | 最も坐りやすい | 10 cm | 4.4 小 |

(連絡先) 東京都世田谷区駒澤15丁目 駒澤大学心理学研究室

# 調身調息調心に関する心理学的研究(105)

経行を中心とする心理学的研究(I)

戸村博之

(駒沢大学)

目的：従来、禅に関する実験的研究においては、趺坐時の脳波、呼吸、ガス代謝、循環、筋緊張などを中心に行なわれてきたりが、経行につりては、杉(1968)、根岸(1969)等の研究がその主なものであり、まだ十分に研究されていはる。そこで本研究では、趺坐と並んで重要な経行を対象として、その心理学的機能を明らかにすることを目的とする。

方法：被験者は大学生3名。実験I。経行時の動作分析及び下肢の筋電図を記録した。動作分析は、頭と腰、かかと、爪先に豆電球をつけ写真撮影し、筋電図は、大腿直筋、大腿二等筋、前脛骨筋、腓腹筋より表面電極により誘導した。

実験II。坐禅時及び経行時の脳電図と筋電図を記録した。実験は2回に分け、第1回目は経行5分、後坐禅30分、第2回目は坐禅30分の後経行5分を行はり、その期間の脳電図と筋電図を記録した。脳波誘導方法は正中線頭顶部より表面電極により単極誘導。筋電図は斜柱にそって僧帽筋の上、中、下位部及び広背筋より表面電極により誘導し、三差計測器製脳波測定器で記録した。なお、帯域周波数分析(分析時間5秒)は頭頂部につりて行った。

結果：実験Iの結果。踵は後方でふみ切、大足先が床を離れ、足が前方に運ばれていく初めの頃に最も高い位置をとり、前方に大足が床につくまで次第に下ってゆく。爪先はふみ切、から次第に上へてゆき、前方へ進めた足が離から床につこうとする、その後で最も高い位置をとる。腰と頭とは一方の脚が前方に運ばれていく途中、つまり体がほぼ直立になる時に最も高い。膝は前進する脚が他の脚をすぎ、やや前方に進行あたりで最も高く、ふみ切り直後あたりで最も低い。全般的にみると、一息半歩という経行独特的の歩行法のみ、上下の振れは非常に少なくて安定してり。同時に記録した筋電図では、着地しようとするとき、

前脛骨筋により背屈しながら膝の伸展が行なわれる、着地後除々に大腿の伸展が行なわれる。また、この時に大腿直筋及び大腿二等筋の拮抗作用による膝の固定がみられる。着地の中継は他方の脚が前方へはこぼれてゆく途中で、筋の活動は弱りが多く筋の協調がみられる。着地後の終りには腓腹筋の活動があり足の躊躇がみられる。離地期は全般にわたって前脛骨筋による足の背屈、すなわち足の拳上が行なわれるが、同時に腓腹筋の活動がみられる。全般的にみると経行は歩行速度の遅いほど片脚で体を支持する時間が長く、その期間中、体のバランス保持に下肢筋群の協調がみられるのが特徴である。

実験IIの結果。坐禅時及び経行時の測定結果は表I表のとおりである。

表I 坐禅時及び経行時の筋電図

|     | 僧帽筋(上) | (中) | (下) | 広背筋 |
|-----|--------|-----|-----|-----|
| 坐禅時 | -      | -   | -   | 土   |
| 経行時 | -      | -   | -   | -   |

(+) 50μV以下  
(+) 50~150μV  
(+) 150~300μV  
(++) 300~500μV

坐禅時には僧帽筋の上、中、下位部に50μV以下の軽度の収縮が、広背筋につりては50~100μV程度の収縮が認められ、且つそれが持続的である。経行時にも坐禅時ほどではないが収縮が認められる持続的である。脳電図につりては坐禅30分後の経行5分間では、1分ごとに脳波出現率が低下してり。なお、脳波と筋電図の関係につりては、実験例が少なり為今後の研究に譲りたい。

考察：写真による動作分析の結果、従来不明であった経行時の全身とくに脚部の動作が若干明らかになつた。すなわち、経行時の非常に安定した動き及び坐禅時と経行時の背筋群の収縮の違いが明らかになつた。今後は経行を中心にして、筋幹筋における興奮性と脳波のひびき現象との関係を明確にしていただきたい。

# 調身調息調心に関する心理学的研究(98)

自律訓練法の導的修正に関する心理学的研究(2)

上野省一

(駒沢大学)

**目的:**前回の報告において、自律訓練法が一種の呼吸法を含む内觀法であることを明らかにし、呼吸のコントロールと内観注意集中が精神安定に寄与することを述べた。本実験は、呼吸のコントロールの練習と内観注意集中の練習とがもたらす効果について脳電図を中心に解明するものである。

**方法:**被験者、大学院生男子5名、女子1名、小学生男子3・4年生、6名。手続き、被験者は、閉眼で椅子に座る姿勢をとり、条件開始前5分間とする。条件I. 敷息観、1~4までを吸息でヒト、呼息でツーの一呼吸をくり返す。条件II. 公案呼吸、「はるははな、なづととぎす、あきはつき」の五七五句をそれぞれ呼息に合せて、内観集中し、吸息は自然にまかせ、くり返し行なつた。呼息、吸息のコントロールは、呼息をやや長めにならうように、その割合は被験に特に指示しなかつた。これらの諸条件の一方を30分間(小学生20分間)、連続して行ない、さらに1カ月間反復せしめた。

この期間中の脳電図(前頭、頑頂、後頑、ともに単極誘導)を表面電極により筋導し、三栄測定器製、13ch脳波計、同様く三栄測定器製の自動分析機で頭頂、後頑部を分析した。さらにGSRと呼吸曲線を同時測定した。温度は21~22度を保つた。

各条件時の脳電図は、1日目、15日目、30日目、さらにそれぞれの開始前5分間、各5分間後の30分間を通して、 $\alpha$ 波の出現率と、反復効果、時間的経過の変化、開始前と条件間の変化などの観点から観察した。なお、分析は後頑部の測定位について行なつた。

**結果および考察:**成人における条件I・条件IIによる $\alpha$ 波の出現率傾向を示すと、第1表のことおりである。開始前5分間よりも $\alpha$ 波の出現率の傾向は増加し、時間的経過においては、後半に増加する傾向がある。条件I・IIとの間に大きな差は見られなかつたが、 $\alpha$

波出現の時間的経過

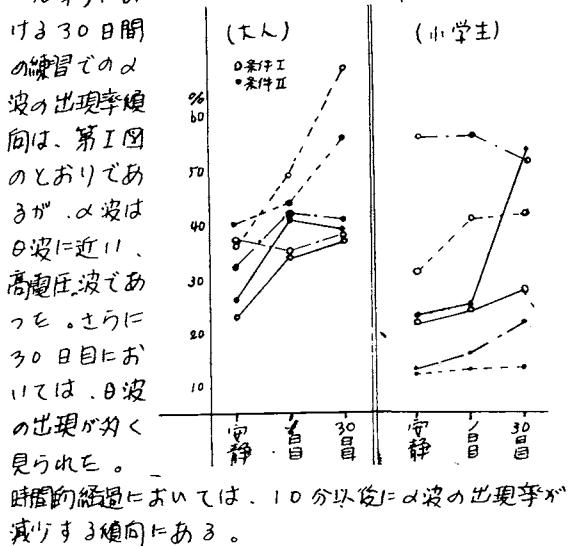
のピークは、条件IIにおいて、25分後に出現する傾向がある。さらに、第30日目においては第1日目と比較して(図I)、条件I・IIを通じて、開始前5分間での $\alpha$ 波の出現傾向が増加している。各条件の出現率傾向は、条件Iにおいては増加を示しているが、条件IIにおいては、明らかではなかつた。この結果から、被験者の練習態度や公案の意味性の問題を考慮する必要があると考えられる。25分以後に $\alpha$ 波の出現がより増加していくことから、条件I・IIとも毎日の反復練習により、効果が大きくなることが知られる。

小学生(8才~10才)にお

表I. 各条件別の人成人の $\alpha$ 波の平均出現率(%)

|       | 条件I   |       | 条件II  |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|
|       | 1日    | 30日   | 1日    | 30日   |
| 1~5分  | 36.2  | 47.9  | 39.4  | 41.0  |
| 16~20 | 43.7  | 45.9  | 42.3  | 43.4  |
| 26~30 | 37.3  | 49.3  | 47.5  | 52.8  |
| Total | 117.2 | 143.1 | 131.2 | 137.2 |

図I. 各個人の1日目と30日目の $\alpha$ 波出現率



時間的経過においては、10分以後に $\alpha$ 波の出現率が減少する傾向にある。

連結先.

駒沢大学心理研究所

# 調身調息調心に関する心理学的研究(101)

## ——催眠的行動に関する心理学的研究(2)——

中村 完  
(駒沢大学)

目的：前回の本大会において、刃渡りの成立条件を行者の内省報告を中心明らかにしたが、それは催眠性のトランク様状態とは異なるものであった。刃渡り中においては、有意的な精神統制、注意集中、心身の緊張状態の持続が特色である。本研究はさらに進んで行を可能ならしめている生理心理的条件を明らかにするものである。

方法：(1) 被験者：2名、熟練者、68才、男子(30年以上の経験者) 未熟練者、29才、男子(数ヶ月間の経験者) (2) 装置：脳電図(前頭、頭頂、後頭とともに単極誘導)を表面電極により誘導し脳波計に接続して記録した。後頭部のみ分析器により分析した。呼吸はサーミスターを鼻孔に装着する。フレチスモグラフは電極を人差し指につける。GSRは右腕と右手の甲より誘導する。心電図は両手首より誘導する。すべて同時記録した。(3) 手綱：巾4cm、長さ9cmの真剣を2刀、床上5cmの所に固定して、その白刃の上に30秒間直立にたち(2)の指標を測定した。30秒間後に小休止をあいてくり返し測定した。なお、各試行前に立位閉眼、立位開眼で安静状態を測定した。

結果と考察：脳電図への筋電の混入があつたが、脳電図における30秒間ごとの立位閉眼立位閉眼、刃上立位閉眼時の測定結果によるv波出現度はオーバー表に示すところである。未熟練者においては、やすかではあるが刃上時のv波の増加が見られた。呼吸について、熟練者においては、呼吸数がやすかではあるがふえている。しかし、呼吸量やリズムは立位時とほとんど変らず、力なり安定した呼吸をしている。未熟練者は呼吸数は減少し、その量やリズムにかなり動搖が見られる。未熟練者の呼吸は保息性の

呼吸に似ている。心拍数は特に未熟練者に増加する傾向がある。フレチスモグラフにおいて刃上立位時にも熟練者は振巾や基線の動搖がなく安定した状態であった。未熟練者は振巾が減少し、基線が上昇しきに動搖した。フレチスモの差は特に大きい。GSRは両被験者ともに反応はあったが、未熟練者にとの反応が大きく示された。熟練被験者は行の遂行にあたって自律神経系、情動の安定が目立っていた。これは長期の訓練の結果得た自信、信念に通ずるものだう。他方、未熟練者は力なりの心身の緊張がともなっていた。高度の心身の緊張と脳電図の徐波化との関係については今後さらに研究を進めたい。

オーバー表 v波出現度 (%)

| S    | 試行  | 1     | 2     | 3     | 4     | 5     | 6     | 平均    |
|------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 熟練者  | 閉眼時 | 22.13 | 19.61 | 19.45 | 24.81 | 24.44 | 20.43 | 21.81 |
|      | 刃上時 | 20.89 | 21.89 | 20.49 | 19.67 | 24.29 | 23.14 | 21.70 |
|      | 閉眼時 | 56.06 | 43.90 | 49.55 | 36.87 | 47.11 | 32.38 | 44.31 |
| 未熟練者 | 閉眼時 | 29.51 | 31.77 | 35.60 | 32.28 | 37.70 | 28.78 | 32.61 |
|      | 刃上時 | 37.83 | 29.69 | 47.21 | 46.36 | 42.79 | 34.51 | 40.05 |
|      | 閉眼時 | 75.46 | 70.12 | 77.85 | 78.89 | 73.40 | 73.84 | 74.93 |

オーバー表 呼吸数と心拍数

| S    | 条件  | 指標  | 試行  | 1    | 2    | 3    | 4  | 5   | 6     | 平均 |
|------|-----|-----|-----|------|------|------|----|-----|-------|----|
| 熟練者  | 呼吸数 |     | 8   | 7.5  | 7.5  | 7.5  | 8  | 8   | 7.75  |    |
|      | 心拍数 |     | 38  | 38   | 37.5 | 37.5 | 38 | 37  | 37.66 |    |
|      | 刃上時 | 呼吸数 | 8   | 8.5  | 8.5  | 8    | 8  | 8.5 | 8.25  |    |
| 未熟練者 | 呼吸数 |     | 40  | 42   | 41   | 42   | 40 | 40  | 40.83 |    |
|      | 心拍数 |     | 7.5 | 8    | 6.5  | 6    | 6  | 6   | 6.66  |    |
|      | 刃上時 | 呼吸数 | 38  | 38.5 | 38.5 | 39   | 39 | 39  | 38.66 |    |
|      | 呼吸数 |     | 2.5 | 3    | 2.5  | 2.5  | 3  | 2.5 | 2.66  |    |
|      | 心拍数 |     | 49  | 43   | 51   | 46   | 44 | 46  | 46.33 |    |
|      | 刃上時 | 呼吸数 | 49  | 43   | 51   | 46   | 44 | 46  | 46.33 |    |

# 調身 調息 調心に関する心理学的研究(99)

—信の態度に関する心理学的研究(2)—

小野浩一

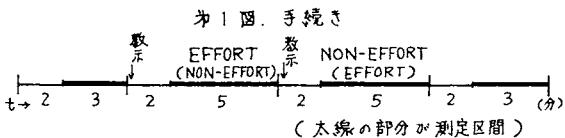
(駒沢大学)

道元禅師が正法眼藏尊道話の中で、「正信が起こらないのならば、仏道修行を暫く前念して、宿縁の浅いことを悔恨せよ。」と述べているように、主体的な信の態度の樹立は禅の修行において重要な位置を占めている。すなわち、道元禅においては、妙修である坐禅は本証の信を待つて初めて成立するから、信の態度の方向や内容が誤まっている場合には、坐禅は坐禅としての意義を失うのである。本実験は、道元禅における信の態度を考察する前段階として、ある特定の態度が生理的事象にどのような効果をもたらすかについて検討したものである。

目的：努力して安静状態を得る場合と、何ら積極的な作業なしに（自然に）安静状態を得る場合とで、生理的現象に差があるかどうかを脳電図、Microvibrationを測度として観察する。

方法：被験者は4名（各28才、各22才、各23才、各30才）。使用装置は三栄測器製 EG-130形脳波計、EA-201形脳波分析装置及び付属の各種電極類。測定は以下の手続きによる。すなわち、被験者は耳防音のシールドルームに座り姿勢で椅子に座り眼を開じる。被験者の周囲はカーテンで仕切られている。気温22°C～25°C。5分間の安定期ののち、NON-EFFORTセッションとして、次のような教示をインターホンで被験者に与える。「これから約7分間にあなたがすることは、心を出来るだけ安静の状態にして、何も考えないようになります。途中で雜念が起きたら、心が乱れたとしても無理に抑える必要はありません。よく自然に安静にしてください。」次にEFFORTセッションとして以下の教示を与える。「これから約7分間にあなたがすることも、心を出来るだけ安静の状態にして、何も考えないようになります。けれども今度は絶対に雜念を起したり、心を乱したりしないでください。もしうまくやがなければ、実験は非常に長びきます。」尚、

順序の効果、時間の経過による影響をチェックするために、2名の被験者はEFFORTセッションと先に実施した。以上を図示すると次の如くである。すなわち、



EEGは正中線上頭頂部の単極誘導。時定数0.3sec. 50μV-7mm。周波数分析器による積分値を使用した。MVは左手拇指球より誘導。圧電型ピックアップ使用。時定数0.3sec. 50μV-7mm。EEG同様積分記録した。他に、EKG、GSR、呼吸も併せて観察した。

結果：EEGについては、積分値からδ波の出現率を算出し、これを表1に示した。統計的検定は2セッション間に有意な差を認めていないが、概して、各被験者ともEFFORT時にδ波出現率が増加している。MVの出現率は、NON-EFFORTではδ、θの順で高く、他の $\delta_1$ 、 $\beta_1$ 、 $\beta_2$ は著しく低いが、EFFORTではδ帶域は減少して、全体に平坦な分布を示している。

考察：実験条件をinstructionによって限定する場合には、被験者がそれをどのように受けとったかが大きな問題となる。その意味で本実験は不備な点を数多く残しているが、全般的な傾向として、ある種の心的な作業（努力）を行った方がEEGδ波は出現しやすいように思われる。これは最近盛んに行われているfeedback研究において指摘されている“δ波を出現させるテクニック”的問題と併せて興味深い。これらについては、今後、さらに被験者を増して、厳密に検討する余地があろう。

表1. δ波(EEG)出現率

|                | NON-EFFORT | EFFORT |
|----------------|------------|--------|
| S <sub>1</sub> | 60.4%      | 67.4%  |
| S <sub>2</sub> | 27.1       | 55.3   |
| S <sub>3</sub> | 29.2       | 51.7   |
| S <sub>4</sub> | 57.8       | 58.0   |
| 平均             | 43.6       | 58.1   |

連絡先、東京都世田谷区駒沢1丁目、駒沢大学心理研究所

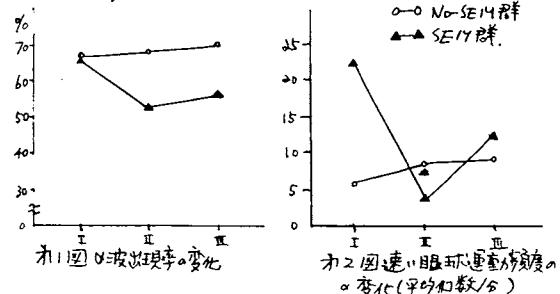
調身調息調心に関する心理学的研究(94)  
 坐禅に関する心理学的研究(3)  
 一調身調息を中心にして  
 武井 広平  
 (駒沢大学)

目的：前回の研究においては、坐禅時に生じる情動の変動を観察した。この変動は坐禅修行の初心者には「見られるもの」、資流あるものは心の散乱と称せられるものと考えられる。これらを題に前回に続き、さらに検討、考察を行なつ。

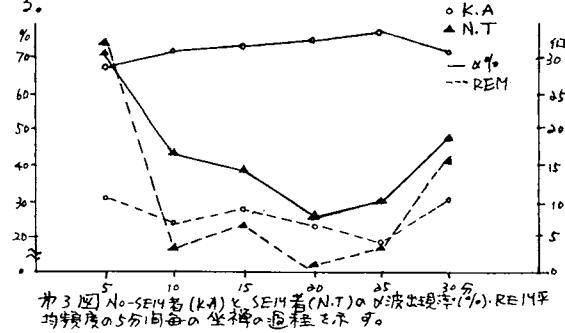
方法：被験者。仏教修道院生を含めた坐禅修行者12名。年令は19才～34才。平均26才。被験者ドニード、ルーム内、「单」の上に面壁、半眼で坐禅30分を行なわしめる。測定指標を脳電図、EOG(眼球電気図)、心搏図、呼吸曲線、脳波計(三差別器器)で同時に記録した。本のE.O.G.は前回の測定法に従い水平方向の眼球運動はせず、また脳電図は正中線上の後頭部から單極誘導し、波出現率は1分間に1回である。分析対象は、坐禅の開始時0～5分、中間期15～20分、終了期25～30分である。

結果：坐禅修行者はE.O.G.および脳電図に著しい動揺が観察された。12名の被験者うち6名がE.O.G.に遅い眼球運動(SE14群)を示した(50%)。遅い眼球運動のみを示した被験者群(NO-SE14群)と遅い眼球運動を示した被験者群(SE14群)とに2分ずつと、その両方坐禅過程の相違が見出された。両群の坐禅期間第I、II、IIIの変化(第1、2図)についてみるとNO-SE14群の脳電図の変化は一般に安定期であり、やがてから増加する傾向を示した。NO群のE.O.G.の筋電軌跡は動搖が少なく、遅い眼球運動は小さく散発的である。これに対してSE14群では坐禅初期に遅い眼球運動が出現し、遅い眼球運動の出現とともに人との会話がなくなる。しかし第I、IIの脳電図は波の状態が崩れ、波出現率が急速に増加した。第3回は両群の中の典型的な実例を示す。両群の波出現率および遅い眼球運動平均頻度には

有意差は見出されなかつた。個人差は有意( $P > 0.01$ )であり、NO-SE14群の中1名はほとんどの眼球運動を示さず、脳電図の変化が一定しないことは眼球運動に対する抑制的統廃行であることを明らかにされた。



考察：坐禅時にみられる遅い眼球運動の減少、E.O.G.軌跡。定常は眼球運動に対する抑制統廃行を含む精神集中時の内的状態の持続的維持を示すものと考えられた。また遅い眼球運動の出現、波の減少はこの平衡状態が崩れたときとみられる。これに応じる実験終了後の内省報告は主に睡気であり、本でもう努力である。以上の所見は坐禅修行の初心者に見られる資流ないしは心の散乱の過程とその消失を示すものである。



# 調身調息調心に関する心理学的研究(95)

## 摸化についての心理学的研究(2)

藤原英壽  
(駒沢大学)

前報において、道元禅師が提示している眞実の人間の生き方・在り方はどのようなものであるかをみ、そこに入々を教導するときに、何を、またどのような裏づけがあって、それを説示しているのか、ということを取り扱った。

本発表においては、仏陀が正覚を得たのち弘法利生のために一歩を踏み出すまでに心理的変容をもたらした諸要因を検討し、摸化の原型を考察し、さらに現代の諸心理療法とそれとの関係も眺めてみたい。

仏陀出家の本懐は自らの苦難の滅尽することであったと伝えられている。そこで伝道宣言にある「おおくの人々の利益と幸福のために」という衆生済度を発願するまでの過程には、仏陀自身解決しなければならない問題があったと考えられる。この経典を伝えていくのは相應部經典の梵天相応第一・二經である。この經典の悪魔・梵天は仏教学ではその解釈はいくつかに別れているが、ここではそれは暫らく置き、心理学的には仏陀自身の内面葛藤の状態を象徴的に表現したものと考えたい。従って、悪魔は不安であり、梵天はその不安を克服したい欲求とみることが出来る。それでは何故そのような不安が生じてきたのであろうか。仏陀は縁起の理を悟つたのち、自内証の法悦にひたっていたことは推察される。しかし、このときには唯一人の正覚者であり、「孤立した正覚者」であった。自らの身詮体験を誰に伝え、理解させることが出来るのか、このことに苦慮したのであろう。このことは正覚者でありながら不安が解消されないときには緊張が生じてくることを示していると考えられよう。ここで相應部經典により不安解消・問題解決の過程を眺めてみよう。悪魔は「不死安穏を悟つたならば去れ、何のために他人は伝えるのか」と語りかけている。これは仏陀が独覺心満足し、説法して衆生を救うという難事から逃避したいという衝動にかられたものとみることが出来よう。これに対して梵天は「仏陀の対機に関する把握の

不正確さを指摘し、「このまには塵にくもらされるとのすくない人もある。しかし清をきかねばならぬる」と述べ、さらに「いまよりさきマガダに現われしは……不淨の法であった。……垢れなき観者の法を説きたまえ」。このように当時のインドの諸宗教を批判し、正覚者の法を説くことの必要性を強調し、客觀的状況を知的に理解させようとしている。つきに「たゞえば山の頂の嶺に立ちて、はるかな人々を見ましる者のように……顔わくは、廢いにしづめる人々を、生と老にさいなまれる人々を見まもりたまえ」と。ここに比喩的表現を用いて慈悲心が摸起された過程を見ることが出来る。第三段にきて「起て、雄々しきもの、戦いに勝てる者……法を説かば、かならず悟るものがあるであろう。」ここにきて仏陀は梵天に勇氣づけられると同時に、衆生救済の意義を再認知させられ、説法に対する積極的関わり合ふ方向づけられたとみることが出来よう。この後、仏陀は「捐うことをおそれて微妙の法を説かなかつた」と告白し、「いま甘露の門は開かれ、耳あるものは聞け」と宣言して、説法を決意した。

上述したように、仏陀の問題解決の要因となったのは十分な知的的理解とともに、情緒的な勇氣づけ、つまり *morale* を高め目的達成の可能性とその重要性を強く認知したことと考えられる。このとき存続の理法である縁起の理を譯観しての知恵が衆生救済者のための慈悲へと転換して、仏陀となりえたのであろう。そこで他己に対して関わり合う摸化の心的構造の根本となる慈悲は、心理療法でセラピストに要求されている愛・尊重・尊厳等の基本的態度条件と極めて類似し、共通性が認められる。しかし、摸化がそれらを包含して、所謂治療的効果をあげるよう構築されなければならないのは、知恵から慈悲へ転換される心理的必然性、さらに悟りそのものの構造・機能が明らかにされることが必要である。これらのことは今後の課題としたい。

# 調身調息調心に関する心理学的研究(107)

## 叢林生活に関する心理学的研究(1)

中 村 昭 之  
(駒 沢 大 学)

目的：清規に則つて叢林生活は道元禪の神體をなすものといわれる。本研究は、かゝる叢林生活の意義を明らかにすることを目的とする。

方法：研究者は自ら永平寺で叢林生活を行ない、その体験を基礎として、修行僧(11名)、一般参禅者(6名)の面接結果を分析した。

結果：叢林生活の意義は、信(理念や価値観)を形成し、逆にまた、その信を具体的な生活の中に浸透、具現せしむることにある。叢林生活における坐禅と作法はそれぞれ相互作用を及ぼし、信を形成・深化させると考えられるが、それらが集団で行なわれることに大きな意味があり、集団の特性が、行の遂行と信の形成に大きな影響をあたえている。

1. 集団の特性：共通の理念や価値志向性を持つた等質的集団であつて、その理念や価値観は、言語と行為(儀式)によって常に反復され、集団所属感、共同感、同一視を高め、きわめて強い凝集性がもたらされる。集団はきびしい規範によつて日常生活のすべてが統制されており、それらは一般社会では到底履行が困難であると思はれるものであるが、それを履行させるものは、この凝集性がもたらす零細気や力であり、「自然にやれるようになる」、「からだがそれについて行く」「やらねば損のような気になる」といつた具合にその力はごく自然にからきかけるものである。集団の成員は規範に対して形としては絶対服従を強いられるが、拘束感、強制感をほとんど持つておらず、当然のこととして隨順、時には隨意している。自己が「非強制的」と感じたその感じをむしろ自由であると表現する。また自己は自己、他人は他人と自己の主体性を確立し、「自己を捨て他人に奉仕する」というように自己の行動を、自尊的、自律的なものと受取つてゐる。叢林生活の最初の一週間(旦過寮詰め)集団生活への加入のための条件になつてあり、特にきびしこうび、この特別な試練は、叢林生活の評価や好意度を高め、修行にたいする

動機づけを高揚するのに大きな役割を果してゐる。

2. 作法遵守の意義：叢林生活の行住坐臥は、すべて一定の作法に則つて遂行される。すなはち一切の行を佛作佛行として心を打ちこんで遂行する。このような遂行は動作の簡潔性と最も経済性をもたらす。作法の遂行の心理的效果としては、次のことが考えられる。(1)かづら看過している日常の細事の意義を改めて自覚させる(2)精神集中、没頭と自我の放棄(3)安定期(4)坐禅にはいりやすい(5)自己を身体で表現する(6)自己洞察(7)自己と物との関係に気づく。(8)からだの動きから、心の動きがわかるようになる。(9)常に一定の構えがとれる自分に気づく。等)

3. 心理療法的因素：叢林生活は本来僧侶の修行の場として誕生したものであるが、集団の特性や作法の遵守によつてもたらされる偉大な効果とどのような効果をもたらす条件とは、叢林生活に限定さるべきものではない。適応力の増強または心理的不適応者の回復を可能ならしめる条件との間には、共通の因子が含まれてゐる。このような因子としては次のようなものが考えられる。(1)隔離：叢林は人里離れた深山幽谷に位置しており、このことは、それまでの人间関係を放捨させる(2)価値観：叢林生活を支配している価値観は、「己れが佛であり」従つてすべての人间関係は平等である。この価値観は、一般社会の評価基準に衝突をあたえ、挫折感の回復と自己価値感の高揚をもたらす。(3)能力感：自分の行動が集団の統一的活動にきわめて強い影響を及ぼすことを自覚することで能力感を高める(4)共感性：言語的コミュニケーションは僅少である(黙が尊重され、伝達はほとんど、鐘や大鼓が代行する)このような非言語的コミュニケーションと統一的活動の強調は、共感性を高める役割を果す。(5)奉仕性：奉仕の強調は不健康な自己中心性を抑制し、自律性、自己価値感を増強する。

(連絡先) 東京都世田谷区駒沢1、駒沢大学文学部  
(心理学教室内)

# シンポジウム

22日 13.30～17.20

## I 現代社会と教育 —教育改革問題を中心として—

|                 |       |            |                     |
|-----------------|-------|------------|---------------------|
| 13.30<br>～15.20 | 第 1 部 | 司会 法政大学教授  | 乾 孝                 |
|                 |       | 幼少年教育の問題   | 岡山大学教授 森 重敏         |
|                 |       | 義務教育の問題    | 杉並区大宮中学教諭 佐 山 喜 作   |
|                 |       | 青少年社会教育の問題 | 実践女子大学教授 山 本 晴 雄    |
|                 |       | 指定討論者      | 熊本大学教授 葛 谷 隆 正      |
| 15.30<br>～17.20 | 第 2 部 | 司会 一橋大学教授  | 南 博                 |
|                 |       | 高校教育の問題    | 東京教育大学 教育相談所員 真仁田 昭 |
|                 |       | 大学教育の問題(1) | 東京大学教授 肥田野 直        |
|                 |       | 大学教育の問題(2) | 埼玉大学助教授 吉 村 融       |
|                 |       | 指定討論者      | 九州大学教授 遠 藤 辰 雄      |

## II 人間と「システム」

|                 |       |               |                         |
|-----------------|-------|---------------|-------------------------|
| 13.30<br>～15.20 | 第 1 部 | 司会 駒沢大学教授     | 小笠原 慈 英                 |
|                 |       | 人間とシステムの問題と現状 | 学習院大学教授 田 中 靖 政         |
|                 |       | 行動とシステム       | 東京大学助教授 渥 美 和 彦         |
|                 |       | 社会とシステム       | 埼玉大学講師 犬 田 充            |
|                 |       | 指定討論者         | 北九州大学教授 新 村 豊           |
| 15.30<br>～17.20 | 第 2 部 | 司会 専修大学教授     | 又 城 一 郎                 |
|                 |       | プログラム学習       | 東京学芸大学教授 堀 内 敏 夫        |
|                 |       | 集団思考          | 専修大学助教授 中 野 繁 喜         |
|                 |       | 勤労者の意識        | 労働省職業研究所 第2研究部長 清 宮 栄 一 |
|                 |       | 指定討論者         | 甲南大学教授 永 丘 智 郎          |

23日 9.30～12.30

|            |    |                   |         |
|------------|----|-------------------|---------|
| Ⅲ 禅と主体性の回復 | 司会 | 駒沢大学教授            | 秋 重 義 治 |
| 禅と精神療法     |    | 東京大学講師            | 平 井 富 雄 |
| 禅と精神身体医学   |    | 九州大学教授            | 池 見 西次郎 |
| 禅と死の概念     |    | 専修大学教授            | 杉 靖三郎   |
| 禅と創造性      |    | 東洋大学教授            | 恩 田 彰   |
| 禅と人格の問題    |    | 追手門学院大学教授         | 佐 藤 幸 治 |
| 指定討論者      |    | 長崎県立女子短期<br>大学助教授 | 松 本 蕃   |

23日 14.00～17.00

公開シンポジウム

応用心理学の諸問題

司会 関西学院大学教授 古 武 弥 生

I 現代社会と教育

|            |        |     |
|------------|--------|-----|
| 1) 義務教育の問題 | 法政大学教授 | 乾 孝 |
| 2) 大学教育の問題 | 一橋大学教授 | 南 博 |

II 人間と「システム」

|            |          |         |
|------------|----------|---------|
| 1) 行動とシステム | 埼玉大学講師   | 犬 田 充   |
| 2) 意識の形成   | 労働省職業研究所 | 清 宮 栄 一 |

III 禅と主体性の回復

|       |                 |         |
|-------|-----------------|---------|
| 指定討論者 | 駒沢大学教授          | 秋 重 義 治 |
|       | お茶の水女子大学<br>助教授 | 津 守 真   |
|       | 追手門学院大学学長       | 天 野 利 武 |
|       | お茶の水女子大学<br>教授  | 松 村 康 平 |
|       | 慶應義塾大学教授        | 大田垣 瑞一郎 |
|       | 慶應義塾大学教授        | 塙 入 円 融 |

# I 現代社会と教育

## 第 1 部

幼少年教育の問題

岡山大学教授

森 重 敏

義務教育の問題

杉並区大宮中学校教諭

佐 山 喜 作

青少年社会教育の問題

実践女子大学教授

山 本 晴 雄

青少年に対する社会教育は多種多様であるが、わたくしは(1)義務教育修了以上の青少年を対象とし、(2)職場や私設団体でなく公共団体の行う社会教育活動であり、(3)単なる集団活動、文化活動、体育活動ではなく何らかの知識技能を修得させる活動に限定して検討したい。

青少年に対するこの種の社会教育の重要なものは、青年学級、勤労青年学校、青年教室、青年向けの講座である。青年学級は勤労青年に対し実際生活に必要な職業または家事に関する知識及び技能を習得させ、あわせて一般教養を向上させることを目的としている。昭和43年には全国市町村の57%が設置しており、5.041学級で25万人の青年が学習している。勤労青年学校はそれより大型のもので、180人以上の青年が年間300時間以上学習するもので県市町村が開設している。昭和43年には52校で13,517人が学習している。青年教室は稍々小型で、急激に変化する社会の実態にそった学習の機会を与えることを意図している。

昭和43年には4,954の講座が開設され23万人の青年が学習している。以上のように青年を対象とする公的教育活動は振っていながら、その原因と対策を検討したい。

## 第 2 部

高校教育の問題

東京教育大学  
教育相談所員

真仁田 昭

大学教育の問題(1)

東京大学教授

肥田野 直

大学教育について、これを学生に焦点をおいて考察してみたい。

戦後の教育改革と経済成長によって、大学生の数は急増し、現在では青年層の20パーセントが大学に進学しており、20年後には40パーセントに達するであろうといわれている。

このように高い進学率は、高等教育に対する強い進学要求に支えられている。そのため、大学の入学試験が大きな関門となって、大学受験体制が高校以下の教育に浸透している。

しかし、進学者の大学教育に対する期待ないし要求は実に多様である。この傾向は大学生の数が増加するにつれて、一層顕著になるであろう。

大学教育を改革する方向の一つは、大学進学者の多様化（その要求ならびにその能力において）に即応することでなければなるまい。

さらに、考えなければならないことは、大学生の要求に適切に応ずるには、学校教育という枠の中では解決がつかないことが多いことである。大学への進学要求は「大学生であることを保証してもらいたい」ということであって、「大学で学ぶこと」への期待はそのごく一部分にすぎない。

青年期の中の、大学生時代にあたる数年間は、人格形成の点からみても非常に重要である。大学生も、大学に進学しない者も含めてこの年代の青年に対して、社会がいかに対応するかは、社会の将来に対しても重要な意義をもっている。家庭も大学も企業もその他種々の機関もそれぞれの立場からこの問題に対応していくなければならない。この全体の文脈の中で、大学教育の役割を位置づけることが必要であろう。

## 大学教育の問題(2)

埼玉大学助教授 吉村 融

清江集

卷二

（参考）第1回「魔界の魔女」（1998年1月号）

| 卷之三                 | 開 | 行  |
|---------------------|---|----|
| 氣體的分子運動             | 1 | 總  |
| 算意圖方程的參量和變數         | 2 | 11 |
| (圖解) 氣體分子運動         | 2 | 11 |
| 熱力學的第二定律和第三定律       | 2 | 12 |
| (證明) 热力学第一定律        | 1 | 13 |
| (本章) 热力学上被研究的一般物理問題 | 2 | 13 |

樂府詩卷子四

| NAME          | AGE | SEX | STATE   | DEATH DATE | CAUSE OF DEATH | REMARKS |
|---------------|-----|-----|---------|------------|----------------|---------|
| WILLIAM H. G. | 30  | M   | INDIANA | 1880-01-01 | CHOLERA        |         |
| CHARLES W.    | 12  | M   | INDIANA | 1880-01-01 | CHOLERA        |         |
| CHARLES W.    | 88  | M   | INDIANA | 1880-01-01 | CHOLERA        |         |
| CHARLES W.    | 66  | M   | INDIANA | 1880-01-01 | CHOLERA        |         |
| CHARLES W.    | 61  | M   | INDIANA | 1880-01-01 | CHOLERA        |         |
| CHARLES W.    | 56  | M   | INDIANA | 1880-01-01 | CHOLERA        |         |
| CHARLES W.    | 51  | M   | INDIANA | 1880-01-01 | CHOLERA        |         |
| CHARLES W.    | 25  | M   | INDIANA | 1880-01-01 | CHOLERA        |         |

西漢書稿之解說上

## II 人間と「システム」

### 第 1 部

人間とシステムの問題と現状 学習院大学教授

田 中 靖 政

#### 1. 人間とシステム

1. 1 システムの概念
1. 2 Ecosystemの概念とその現代的意義
1. 3 Ecosystemのモデル（図1）
2. コミュニケーション・システムとしての政治行動
  2. 1 選挙のコミュニケーション・モデル（図2）
  2. 2 SD法によるテレビ政見放送モニターの分析（表1, 表2, 表3, 表4）
3. 結語

表1. 因子分析結果

| I (8% TV) |      | II (10% TV) |     | III (27% TV) |     | IV (46% TV) |     |
|-----------|------|-------------|-----|--------------|-----|-------------|-----|
| F         |      | W           |     | D            |     | E           |     |
| 知 名 度     | .71  | 心 の 暖 か さ   | .91 | 力 強 さ        | .93 | 冷 静 さ       | .93 |
| 清 潔 さ     | -.45 |             |     | 根 性          | .91 | 洗 鍊 度       | .87 |
|           |      |             |     | 印 象 の 強 さ    | .88 | 信 頼 度       | .83 |
|           |      |             |     | 知 名 度        | .63 | 清 潔 さ       | .82 |
|           |      |             |     | 政 治 家 ら し さ  | .49 | 説 得 力       | .78 |
|           |      |             |     | 説 得 力        | .47 | 政 治 家 ら し さ | .71 |
|           |      |             |     |              |     | 得 票 数       | .87 |
|           |      |             |     |              |     | 当 選 予 想     | .86 |
|           |      |             |     | 尺度平均値の又      | .51 | 尺度平均値の又     | .80 |

表2. 21候補の総合評価

| 因<br>子 | 立 候 补 者 |      |     |     |      |     |     |     |      |     |
|--------|---------|------|-----|-----|------|-----|-----|-----|------|-----|
|        | 小坂      | 多田   | 賀屋  | 天野  | 山本   | 山口  | 本島  | 不破  | 有島   | 広川  |
| E      | 自新      | 公新   | 自前  | 自前  | 社前   | 自前  | 民前  | 共新  | 公前   | 自前  |
|        | 1.4     | 1.0  | 0.9 | 0.9 | 0.9  | 0.8 | 0.8 | 0.7 | 0.6  | 0.6 |
| D      | 1.2     | 0.7  | 0.7 | 0.5 | 0.2  | 1.0 | 0.9 | 0.8 | -0.3 | 0.3 |
| F      | 1.8     | -0.3 | 2.5 | 0.2 | -0.2 | 2.2 | 0.8 | 0.3 | -0.6 | 1.0 |
| W      | 0.7     | 0.0  | 0.5 | 0.7 | -1.0 | 0.7 | 1.6 | 0.7 | 0.5  | 0.9 |
| (当)    | (当)     | (当)  | (当) | (当) | (当)  | (当) | (当) | (当) | (当)  |     |

| 立 候 补 者 |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
|---------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 佐野      | 梅津   | 山田   | 久保   | 麦谷   | 野末   | 赤石   | 石戸   | 手塚   | 有田   | 赤尾   |
| 社前      | 共新   | 無新   | 無新   | 諸新   | 無新   | 無新   | 無新   | 諸新   | 諸新   | 諸元   |
| 0.6     | 0.5  | 0.4  | -0.2 | -0.7 | -0.9 | -0.9 | -1.0 | -1.1 | -1.5 | -1.6 |
| 0.2     | 0.4  | 0.0  | 0.6  | 0.6  | 0.9  | 0.5  | -1.0 | -0.6 | 0.1  | 1.5  |
| -0.5    | -0.2 | -0.5 | -1.7 | -1.3 | 2.2  | -1.4 | -1.7 | -1.9 | -1.7 | 2.3  |
| 0.2     | 1.0  | 0.6  | 0.4  | 0.0  | 0.5  | -0.4 | 0.2  | -0.4 | -0.1 | -0.7 |

# 図1. 地球の生態系

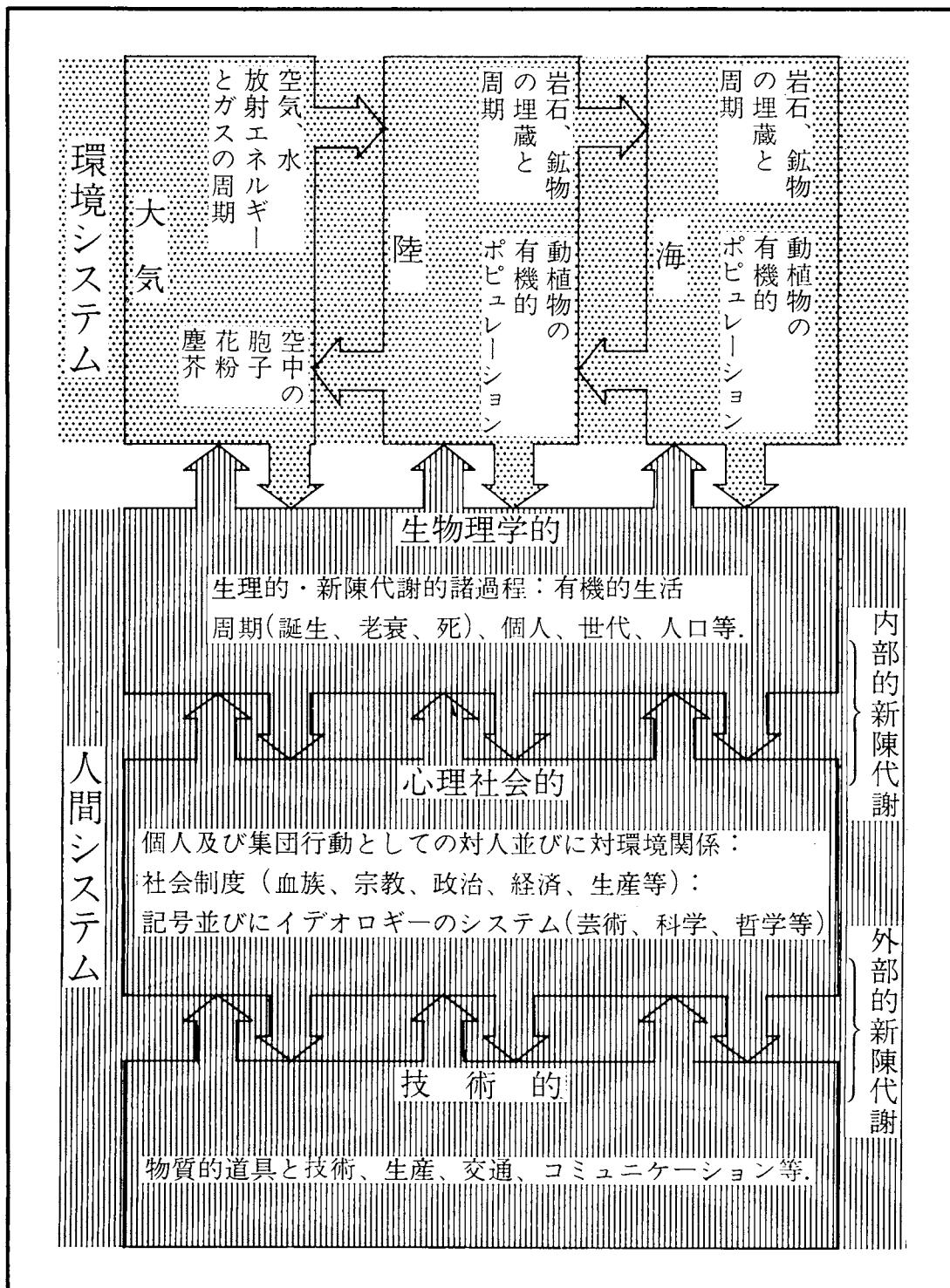


表3. 立候補者のセマンティック・プロフィルの相関

| 当落及び選挙区 | 当 3        | 當 3        | 當 6        | 3          | 當 6        | 當 6        | 當 3        | 當 3        | 3          | 3          | 6          |
|---------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 立 候 補 者 | 小 坂<br>自 新 | 賀 屋<br>自 前 | 山 口<br>自 前 | 本 島<br>民 前 | 不 破<br>共 新 | 天 野<br>自 前 | 多 田<br>公 新 | 山 本<br>社 前 | 広 川<br>自 前 | 梅 津<br>共 新 | 佐 野<br>杜 前 |
| 小 坂     | —          | .80        | .88        | -.13       | .83        | .81        | .70        | .47        | .73        | -.40       | -.08       |
| 山 本     | .47        | -.02       | -.29       | -.30       | .52        | .57        | .44        | —          | -.04       | .29        | .75        |
| 野 末     | .09        | .11        | .23        | .39        | -.10       | -.42       | .12        | -.54       | .13        | -.45       | -.86       |

| 当落及び選挙区 | 當 6        | 6          | 6          | 6          | 3          | 6          | 6          | 6          | 3          | 6          |
|---------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|
| 立 候 補 者 | 有 島<br>公 前 | 山 田<br>無 新 | 久 保<br>無 新 | 野 末<br>無 新 | 麦 谷<br>諸 新 | 赤 尾<br>諸 元 | 赤 石<br>無 新 | 有 田<br>諸 新 | 石 戸<br>無 新 | 手 塚<br>諸 新 |
| 小 坂     | .16        | -.36       | -.75       | .09        | -.31       | .05        | -.48       | -.60       | -.53       | -.39       |
| 山 本     | .48        | .37        | .03        | -.54       | -.10       | -.45       | -.08       | -.33       | -.03       | -.08       |
| 野 末     | -.54       | -.40       | -.28       | —          | -.04       | .77        | .14        | .19        | -.11       | -.16       |

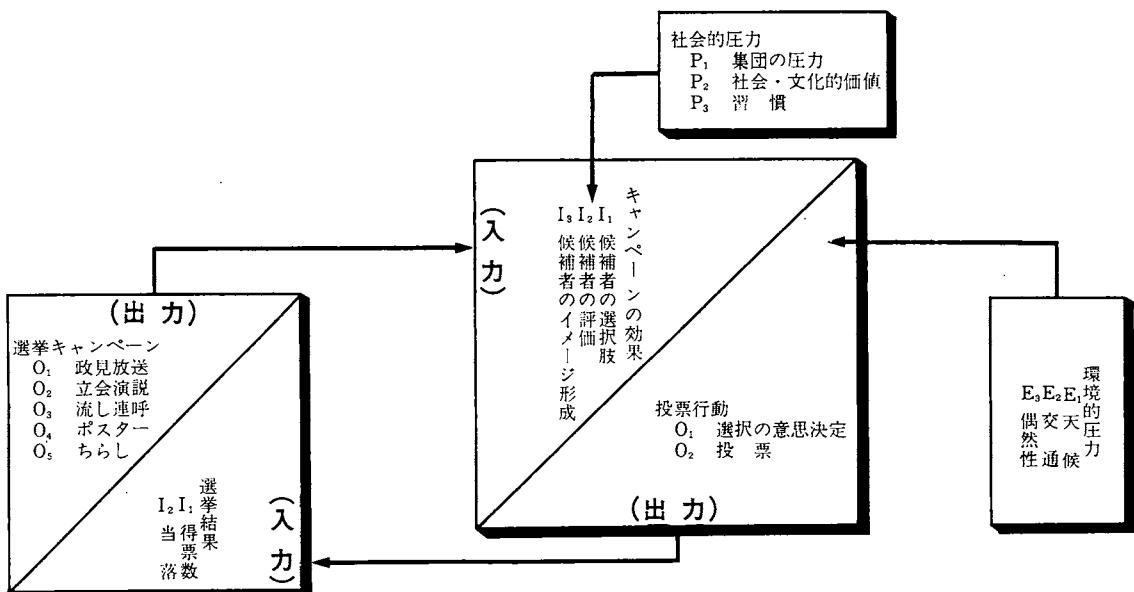
\* p<.05 ; \*\* p<.01 (DF=10)

表4. 「評価」、「知名度」、「当選予想」尺度ならびに「総合評価」指標から「得票数」の予測

|     | 清潔さ   | 力強さ | 心の暖かさ | 政治家らしさ | 根性  | 洗練度   | 信頼度   | 冷静さ   | 説得力   | 印象の強さ | 知名度   | 当選予想  | 「総合評価」指標 |
|-----|-------|-----|-------|--------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|----------|
| 得票数 | .63** | .39 | .44** | .61**  | .35 | .67** | .73** | .86** | .87** | .16   | .51** | .94** | .87**    |

\* p<.05 ; \*\* p<.01 (DF=19)

図2. 選挙のコミュニケーション・モデル



A (候補者) システム

B (投票者) システム

行動とシステム

東京大学助教授

渥 美 和 彦

社会とシステム

埼玉大学講師

犬 田 充

## 第 2 部

プログラム学習

東京学芸大学教授

堀 内 敏 夫

### Programmed Learning の立場から

#### I Man to man system

教授・学習過程における Man to man system は、言語・態度・身振り・表情を統合した人間としての親しさ・暖かさがあり、つねに、いかなる新事態にも、善意をもって対処しうる臨機応変の自由性など、他の方にものにも替えがたい特有の長所をもつものであるけれども、次の諸点に関し制約をもつものである。

1. 教授過程において言語的表現・動作的表出による教材提示には、限界がある。

- (1) 極大・極小の世界
- (2) 遠隔の地の事象
- (3) 過去・未来の事象
- (4) 運動・変化・発達の過程

2. 多人数教育の場合、ひとりの教師の機能には、限界がある。

- (1) 教師の音声
- (2) 教師の動作・板書
- (3) ひとりひとりの学習者に対する評価

3. Man to man system では、教育の本質的目的である個人差にもとづく個性の伸長の徹底を図ることができない。

## II 個別学習を基礎とする Programme Learning の特質

1. Small step の原理
2. Active response の原理
3. Immediate confirmation の原理
4. Self - pacing の原理
5. Student testing の原理

## III Man - machine system

Man to man system の制約を補ない、教師の機能の補助として、諸種の教育機器を導入する。この場合、教授過程の主体は、あくまでも教師であって、教育内容および学習者の興味・要求・Readiness に即応し、最適の教育方法・教育機器を利用し、教授・学習システムを構成することが肝要である。

1. Audio - visual aids
2. Simulator
3. Teaching-machines (T. M)
4. Computer assisted Instruction (C. A. I.)

集団思考

専修大学助教授

中野繁喜

勤労者の意識

労働省職業研究所  
第2研究所長

清宮栄一

勤労者の意識を青少年勤労者のそれにしほり、その望ましい形成に対する学校教育のあり方を、システム的に考察してみたい。

生産行動を含めて、すべての社会行動は、勤労者層および現システムならび

に反システムの主導者としての非勤労者層である主体と、自然および人間が自然に加工することによって生じた財である客体とが、力動的関連を保っている人間一環境システムの中で営まれている。従って、青少年勤労者の意識も、このシステムの目標、構造、機能に影響を受けるのは当然であり、とくにその大部分は、システムの要請に基いて編成された学校教育の中で形成される。

ところが、現在の青少年勤労者の意識は、人間存在としての彼ら自身にとって、またシステムにとって、必ずしも望ましいものではないにもかかわらず、一方においては、彼らが人間形成への強い欲求を持っているという事実を多くの調査結果が示している。

その原因は、単純でないにしても、学歴尊重主義に基づく進学至上思想と、産業の近代化に伴なう人間性喪失を無視することはできない。進学至上思想は、現行入試制度、学制に災いされ、主として記憶に依存する知識教育に重点をおき、思考力育成や人間的成長への努力を軽視する結果となった。さらに、人間的成長は、現システムにおける成長目標としての価値の不確定性と反システムからの抗力によってはばまれてきた。

システム内の、このような諸問題を解決することは、きわめて困難であるが、私はその出発点を、未来を志向する教育に求め、次の提案を試みたい。

1. 教育関係者が、主唱者となって、理想的な人間一環境システム形成のために、窮屈目標としての普遍的価値の確立に努力する。
2. 知識、技能教育をシステム工学を応用した教育工学（教授工学）的方法にまかせ、その効率化を計るとともに、教師の負担を軽減する。
3. 知識、技能教育から大かく解放された教師を中心として価値体系の確立を志向しながら、集団思考法による学習を強化して、人間形成を有効化し、あわせて思考力育成を計る。

このような学校教育を通じて、勤労青少年の意識が、望ましい方向づけを得ると同時に将来人間一環境システムも現在のような人間性喪失から脱却して人間を中心とした姿を回復するであろう。

### Ⅲ 禅と主体性の回復

禅と精神療法

東京大学講師

平井 富雄

精神療法の技法には、精神分析学における自由連想法をはじめ種々の方法がある。またこれら特殊精神療法に対して、「一般精神療法」と専門的に呼ばれる技法もある。これらすべてを一括して「精神療法」あるいは「心理療法」と考えると、その概念・方法の無定見な拡大が起こる。

精神科医の立場から、精神障害者（神経症も含む）の精神療法を行なっている臨床経験を卒直に表明すれば、医者が行なう「精神療法」は特定の理論、仮説にもとづくものではありえない。なぜなら医者である以上、治療を求めてくる患者を自分の理論によって、あるいはそれに立脚した技法によって、選択することはできない責任を荷わされているからである。このような理由から演者は「精神療法」の一技法として、「禅」を語る資格はない。

ここでは、精神療法の過程において、どのような脳生理学的変化が、治癒に向うにつれて起こるかという、われわれの調べた精神生理学的所見をまず紹介する。そして笠松・平井が明らかにした坐禅時の脳波変化の様相と、神経症の治癒過程におけるそれを対比しつつ、実証的な立場から両者の関連を捉えてみたい。そして禅が精神療法においてどのような意義を持つかについて、考察を加える予定である。

禅と精神身体医学

九州大学教授

池 見 酉次郎

禅は、身心一如の立場から、真の自己実現を促すものと思われる。一方、心身医学もまた、身心一如の立場から、人間の健康を形づくるダイナミズムを研究することによって、その自己実現を助けようとするものである。私は最近、・禅に関する知識を深めるにつれ、日本の禅と心身医学との強いつながりに、大いに関心を抱いている。

心身医学はもともと、細分化しつつある臨床医学の統合をはからうとするものであり、従来の、肉体面に偏した治療に加うるに、患者心理についても、能うかぎり、細かに分析し、心理面よりする治療をあわせ行なうようになってい。従って、方法論の上では一見、心と体を分離した2分論の上に立つものようであるが、心身両面にわたる分析も、要するに、身心一如の統合的な医療のあり方を目指して行なわれるものである。

換言すれば、かつての肉体医学は、人間の健康を妨げる、生理的な条件のみをとり除くことによって、生命力の発現を促そうと企てたのに対して、心身医学は、生理、心理の両面にわたって、これを行なおうとするものである。

しかし、心身いづれの面についても、今日までの医学、心理学の知識をもとにした分析によって得られたデータは、「人間—この未知なるもの」を、全体的に把握しうるものでは、到底ありえない。そこで、一部の医学者、心理学者たちは、人間の健康と自己実現を促すための、西歐的、分析的なアプローチのもつ限界を認識し、各人に備わる生命力、自然知の発露そのものを促そうとする、東洋的な行法のもつ意味を、科学的に究明しようとする努力を始めている。たとえば、スペイン語圏の国々で提唱されている、ソフロロジーなどがそれである。私はたまたま、ソフロロジーの第1回国際学会に出席したので、以上のような観点から、心身医学、ソフロロジーと禅との関係について、申し述べたい。

禅と死の概念

専修大学教授

杉 靖三郎

禅と創造性

東洋大学教授

恩 田 彰

禅の悟りにおける創造性の意義について考察する。悟りとは、自己と世界とが一つになった、自己と対象とが一体化した体験に基づく真実の自己の発見と

実現である。このことは直観(直観的思考)に相当する。Gordon, W. J. J. は、創造工学としての Syneetics で人格的類比( personal analogy )をやらせる。自分自身がそのものになりきって、その中から物をながめるのである。この方法に基づく体験は、禅的体験に近い。創造性は、現在、創造的思考の機能として説明されているが、創造的思考は直観的思考と論理的思考(分析的思考)とが統合されたものとしてとらえることができる。直観の重要性については、Descartes, R., Kant, I., Bergson, H. などによって指摘されているが、最近では Bruner, J. S. が科学的思考における直観的思考の訓練の必要性を強調している。De Bono, E. のいう水平思考の訓練には、直観的思考の開発が重視されている。最近西欧の研究者が論理的思考に基づく西欧的発想法にゆきづまりを感じて、直観を基礎とする東洋的発想法を意識的にまたは自覚せずに取り入れつつあることは興味ある問題である。

世界を外から自己に対するものとして見ている状態から、自己が世界になりきった状態に変わると、今までの固定した見方ががらりと変化して、自由に新しい見方が出てくるのである。自己→世界 自己が対象としての世界に接近する注意集中、dhāraṇa の状態から、自己=世界 自己が世界と一体化する瞑想、dhyāna の状態に至る。さらにそこから世界→自己 世界の方から自己へ接近してくる状態および自己=世界 → 自己と世界が一つになって自由に動く三昧、samādhi の状態に達する。固定していると思われたものが活動するのである。自己と世界が相互に入り込んで自由に出入する transaction 相即相入の状態が現出する。正法眼藏の山水経に出てくる雲門匡真大師のいう「東山水上行」がそれで、これは現象的には知覚の誘導運動に相当するが、東山すなわち自己と山とが一つになった本来の自己が自由に動いていることである。作家がつくり出す人物が勝手に動き出し、機械がアイデアを発明者に語りかけるといった自律性が生ずるのである。

禅と人格の問題

追手門学院大学教授

佐藤幸治

私は、禅というものを極めて広く、境を整え、身体を整え、心を整え、真実の自己に目覚め（宇宙と自己との関連を自覚して、といつてもよい）、万物の幸福のために尽すこと、と一おう定義している。田辺元博士は人間を歴史的社會的世界における身心靈の弁証法的統一体と見ていたが、禅はさらに宇宙的視野を加えて、人格を最高度に精練しようとするものである。禅と人格の問題といふとき、禅者の人格特性なども問題となるが、私は現在、人生心理学的研究の一環として、禅者の生涯を概観しながら、その生き方を探究しているので、白隱、道元等の生涯を検討しながら、禅者の人格を考察してみたいと思う。

## 公開シンポジウム

応用心理学の諸問題

司会 古武弥生 「司会のことば」

現在社会と教育についてこの公開シンポジウムは三つの課題からなっている。一つは現代社会に於ける人間形成の問題として義務教育と大学教育がとりあげられる。二つには現代のシステムの中に於ける人間の行動と意識の問題である。三つには、人間存在の根本問題にふれ、特に日本の禅に於ける人間性の理解をとりあげる。

要するにこれら三つの課題を通し、現代に於ける「人間」を理解し解明することが出来ると期待している。

### I 現代社会と教育

1) 義務教育の問題

法政大学教授

乾

孝

2) 大学教育の問題

一橋大学教授

南

博

## Ⅱ 人間と「システム」

1) 行動とシステム

埼玉大学講師

犬 田 充

2) 意識の形成

労働省職業研究所

清 宮 栄 一

ここでいう意識とは、常識的に個人の考え方とか、態度とかを意味することとする。このような意識は、人間一環境システムの中で、主体的要因と客体的要因とに規制されて形成されていく。つまり、個人の意識の形成は、本人の持つ先天的、後天的要因にも規制されるが、主体としての他者の意識およびそれによって導びかれた客体的状況と自然を内包したシステムの目標、構造、機能に影響されるところが多い。

しかし、現代の人間一環境システムの目標、構造、機能は、人間の本質的欲求を満足させるものとはいがたい。従って、個人の意識が、その影響を受けて<人間として>望ましくない方向に形成されている点が多い。このような人間一環境システムの不完全性は、人間がいまだに過去から受け継いでいる獸性を多分に払しょくしきっていないことに起因している。

このように個人の意識と、人間一環境システムとは、交互作用的に存在している。意識が現在の人間一環境システムからの力によってのみ形成されつづけているならば、人間の進化は期待できない。人間は進化を志向している存在である。これを実現するためには、人間が、人間一環境システムから超越して、自己自身の力によって、自分の持っている獸性を棄て去り、人間性を高めていく<努力>をする以外に方法はない。

行き詰った近代の科学技術文明を、文芸復興によって自覚した人間の<知性>の産物とするならば、未来の望ましい文明は、人間の<意志>と<知性>とによって築かれなければなるまい。これを第二の文芸復興としてみのらせるのが現代人の未来に対する務めではなかろうか。

個々人の意識が、何らかの方法によって人類の進化を志向して形成されるな

らば、人間一環境システムの均衡も保たれ、またそうなることによって個々人の意識もまた望ましい形で形成されることとなろう。

人間行動の学としての心理学は、このような課題解決に努力する責務を持つているものと考えられる。

### III 禅と主体性の回復

駒沢大学教授

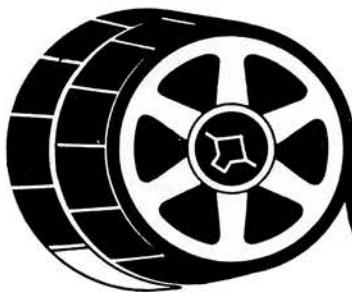
秋 重 義 治

# 情報の蓄積は マイクロ写真で

学会誌 } はマイクロ  
研究論文 } フィルムで

複写  
スライド  
ゼロックス

> の御用命は



信用と技術

コピーセンター

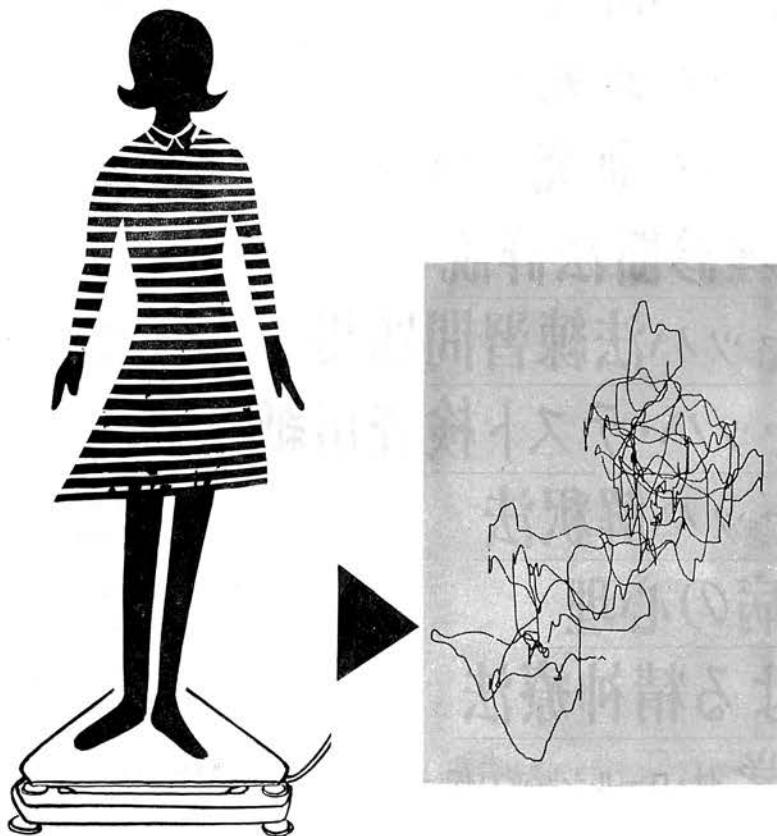
株式会社  
国際マイクロ写真工業社

東京都新宿区簗崎町4-3 〒162

TEL 東京(03)260-5931(代) コクサイ

東京都千代田区富士見2-2-9  
TEL.(03) 262-5931 国電飯田橋駅1分

人体のゆれへ重心移動量を  
簡単に計測する  
**平衡機能計**



## 平衡機能計とは

人体が直立静止しているときの〈平衡〉は平衡機能によって調整されていると考えられています。

この機能の状態は人体の平衡度すなわち〈人体のゆれ〉を測定することによって知ることができます。そこで〈人体のゆれ〉の現象を**重心の移動**と考えてその移動量を計測する装置、これが当社があたらしく開発した平衡機能計です。平衡機能は運動神経や精神状態などによって左右されると考えられ、従って重心の移動量を測定することによってひろく精神科、耳鼻科、生理学科、心理学科などの領域における活用が期待されます。



三栄測器株式会社  
東京都新宿区西大久保2-223-2 〒160 東京(209)0811(大代)

## 標準 ロールシャッハ図版

ロールシャッハ研究 12号

ロールシャッハ研究 11号

ロールシャッハ研究 9・10合併号

ロールシャッハ  
テスト 心理診断法詳説

ロールシャッハ法練習問題集

ロールシャッハ・テスト検査用紙

ロールシャッハ解釈法

精神分裂病の心理

出会いによる精神療法

精神診断学 付・ロールシャッハ伝

分析的心理劇

体験過程と心理療法

臨床心理学的レポート

児童社会心理学

創造力の心理

才能の心理

東京ロールシャッハ研究会監修  
10枚組箱入 ￥1900

東京ロールシャッハ研究会編  
A5・288頁 ￥1800

東京ロールシャッハ研究会編  
A5・288頁 ￥1800

東京ロールシャッハ研究会編  
A5・292頁 ￥1800

片口安史著  
A5・464頁 ￥1700

片口安史・空井健三  
A5・50頁 ￥180

型式KSIII  
B5・6頁 ￥20

高橋雅春著  
A5・32頁 1000

C・アリエティ・加藤・河村・小坂訳  
A5・544頁 ￥3000

トリュープ 宮本忠雄訳  
A5・206頁 ￥670

東京ロールヤッハ研究会訳  
A5・292頁 ￥1300

D・アンジェウ 篠田勝郎訳  
A5・260頁 ￥980

U・ジェンドリン 村瀬孝雄訳  
A5・248頁 ￥980

W・クロッパー 順天堂大学心理学グループ  
A5・200頁 ￥980

長島貞夫著  
A5・384頁 ￥1500

小口忠彦著  
A5・200頁 ￥650

小口忠彦著  
A5・204頁 ￥780

## 待望の「社会心理学ハンドブック」

改訂第二版完結！

## THE HANDBOOK OF SOCIAL PSYCHOLOGY

2nd. Ed. 5vols.

Ed. by G. Lindzey and E. Aronson.

1968-70 (Addison-Wesley)

価格 ¥24,400

1954年に第一版刊行以来、この方面での専門家レベルにおける第一級の参考書として定評のあったハンドブックの、15年ぶりの改訂版で、最近の研究成果をとり入れて大幅に改訂が加えられるとともに、文章の改善が目ざましく、一層読み易くなっています。

特に新着の第5巻「応用心理学」は、近來の研究の進歩を反映し、旧版の四章に新たに「経済心理」「教育社会心理」「国際関係：戦争と平和」「宗教心理」「公衆衛生の心理」の五章が加わり一新したものになりました。是非この機会に一セットお備え下さい。

Vol. I : Historical Introduction/Syotematic Positions.

653p. 1968 ¥4,000

Vol. II : Research Methods. 816p. 1968 ¥5,000

Vol. III : The Individual in a Context. 816p. 1969 ¥5,400

Vol. IV : Group Psychology and Phenomena  
of Interaction, 736p. 1969 ¥4,600

Vol. V : Applied Social Psychology. 700p. 1970 ¥5,400

## 心理学事典 全三巻

—本年末刊行開始、御予約受付中—

## LEXIKON DER PSYCHOLOGIE.

In 3 Banden, herausgegeben von W. Arnold,  
H.J. Eysenck and R. Meili.

各巻約416頁. 1970—

(Herder)

価格：各巻 ¥8,510

ドイツの権威ある百科事典、各種専門事典の出版社として知られるヘルダー社が、本年末より刊行開始する最新の心理学事典。約160の大項目、約4000の事項を収め、今日の心理学のあらゆる分野・境界領域の現状をきわめて客観的に反映する、ドイツ語圏最高の心理学事典として期待されています。

### 〈新刊・近刊書〉

1. Group Dynamics: The Psychology of Small Group Behavior.  
by Marvin Shaw. 448p. 1970:11 (McGraw) ¥5,000
2. Human Factors Engineering, 3rd ed. by E. J. McCormick.  
592p. 1970 (McGraw) ¥6,000
3. Introductory Readings in Community Mental Health.  
Ed. by P. E. Cook. ca 250p. 1970 (Holden Day) ¥3,800
4. Pay and Organizational Effectiveness: A Psychological View.  
By Edward Lawler. 352p. 1971:1 (McGraw) ca 3,400
5. Psychological Experiments in Consumer Behavior.  
Ed. by S. H. Britt. 384p. 1970:10 (Wiley) 價未定
6. Psychological Factors in Poverty. Ed. by V. L. Allen.  
ca 400p. Fall, 1970 (Markham Pub.) ca 3,400
7. Social Psychology and Mental Health. By Wechsler.  
704 p. 1970:10 (Holt) ca 6,000

株式会社 紀伊國屋書店 洋書部

KINOKUNIYA BOOK-STORE CO., LTD.

東京都新宿区角筈1丁目826 〒160-91 電話(354) 0131 大代表  
営業所：札幌・仙台・千葉・横浜・静岡・富山・名古屋・京都・大阪・神戸・岡山・広島・福岡

東京新宿区赤城下町46 理想社／内容見本呈  
振替 東京78303

# 知覚的世界の恒常性

A5上製箱入  
価各卷三、八〇〇円

## 認識心理学 I・II・III

秋重義治編

知覚恒常性は最も重要な基本的精神機能であり、知覚恒常性に関する法則は認識心理学の理論的中心課題である。それ故に心理学が発足した当初から今日に至るまで実におびただしい研究がなされてきた。それらの多くの研究成果を体系的に集大成したものが本叢書である。編者秋重先生は多数の研究者と共に四十年に亘るこの研究に専念せられ、認識心理学の分野において世界の最高水準を示す業績を挙げられた。

知覚恒常性に関する学説がどのように変遷しようと本叢書に記載されている事項を一種の事典として長く利用し活用することができるよう企画されている。

知覚恒常性に関する知識は、心理学をはじめ諸科学の研究分野においては無論のこと、建築・絵画・音響・色彩・照明、その他環境設計をはじめ人間行動に関する諸方面的の実際の仕事においても広く応用価値を有し、研究者や実際家に必要な基礎資料を提供するいわば理論と応用の両面に役立つ外国にも例のない叢書である。

## 各巻の内容

### 第I巻

### 第II巻

### 第III巻

- |                         |                                    |                    |
|-------------------------|------------------------------------|--------------------|
| 第一篇 位置の恒常性 重岡和信         | 第四篇 色の恒常性と照明の恒常性 第VI篇 二次元空間の対象の恒常性 | 第七篇 運動に関する恒常性      |
| 第二篇 形の恒常性と傾きの恒常性 岡田武世   | 第五篇 國田五郎                           | 第八篇 十島雅藏           |
| 第三篇 大きさの恒常性と距離の恒常性 黒田輝彦 | 第六篇 大村敏輔                           | 第九篇 音の恒常性と異方性 重永幸男 |
| 第四篇 の対比 大村英子            | 第十篇                                |                    |

## 仲間に

# 心理学専攻者がたくさんいることは 愉快なことです！

「人材採用と人材開発」の面で独自の領域を展開している日本リクルートセンターが、心理学専攻者を広く求めていきます。専門的な能力を十分に發揮するにふさわしい仕事があなたを待っています。

へこんな人を求めています

● 心理専門家——因子分析など心理統計解析・パーソナリティ、知能などに関心をもち、その測定や検査の作成をやつてみたい人。またそれらの研究によつて学位をとるなど、学界に業績を問うことにも野心のある人。

● 人事専門家——企業における人間問題に強い関心をもち、働く人の適性・意欲・幸福などの問題を現実に解決する科学的な方法を研究してみたい人。

※原則として33歳までに限らせていただきます。

へ私たちと一緒に仕事をしませんか？

● “情報”を売る会社です——形あるモノを製造販売しているのではありません。求人情報のシステム、人材測定のシステムを設計し、情報の流通をつかさどっています。

● 個人を尊重する会社です——「自ら機会を創り出し、機会によつて自らを変えよ」これが私たちのスローガンです。いわゆるサラリーマン・タイプの人は見当たらない会社です。

● 心理学専攻者が現在46名います。

|       |     |      |    |        |    |
|-------|-----|------|----|--------|----|
| 早稲田大学 | 11名 | 東北大学 | 3名 | 東京女子大学 | 4名 |
| 東京大学  | 11名 | 九州大学 | 4名 | 北海道大学  | 3名 |
| 名古屋大学 | 6名  | 千葉大学 | 2名 | 他11大学  |    |

☆ご希望の方には入社案内をお送りします。  
いつも本社人事課にご請求ください。

株式会社 **日本リクルートセンター**



本社／東京都千代田区神田錦町1-1

Tel (292) 5811 ☎ 101

支社／大阪

営業所／札幌・仙台・名古屋・広島・福岡

# 経営の行動科学

・新しいマネジメントの探求

R・リットカート著  
三隅二不二訳  
A5判／一四〇〇円

経営における憤懣、憎悪、不満、衰退は、従業員から社長にまで及んでいる。一連の動機原理にもとづく行動科学的アプローチで、革新的経営体制を探求。各賞受賞の名著。

# 組織の行動科学

・ヒューマン・オーガニゼーションの管理と価値

R・リットカート著  
三隅二不二訳  
A5判／一三〇〇円

高い生産性と収益をあげることは組織の最大課題であり、それは、組織における人間能力の管理にかかっている。実証的研究をもとに人間集団の効果的科学管理方式を提倡する。

# アーティス研究

・行動科学による組織原論

大友立也著  
A5判／一二〇〇円

アーティスは企業の組織論研究において重要な位置を占めている。本書は彼の諸著作を中心として行動科学による組織論を展開する。新しい組織論確立の手がかりになるもの。

# 産業の社会心理学

・工場における人間関係

J·A·C·ブラウン著  
伊吹山太郎／野田一夫訳  
B6判／六八〇円

人はなぜ働くか、働きやすくするには？職場生活は個人と社会との健全性にどう関連するかなどの重要問題を、心理学・歴史学・経済学・経営技術などの立場から詳論。

# 経営と勤労意欲

E·J·レスリスバーガー著  
野田一夫／川村欣也訳  
B6判／六八〇円

産業における人間協力の問題は近来きわめて重視されてきた。本書は、働く人々の心理とその背景をなす諸関係を科学的に究明した名著である。経営者、労務担当者の必読書。

# 新版 人間関係

(経営全書)

田杉競著 全書判／五八〇円

メイヨーの研究以来、急速に発展してきた経営における人間関係を総合的・体系的にとらえ明快に分析。現代における人間関係論の特色を徹底的に解説したユニークな指導書。

# 経営心理学入門

兼子宙著 B6判／五五〇円

心理学の立場から企業の問題点を総合的・体系的に扱った書はまだない。企業にかかるいっさいの心理学的問題点を体系づけ、問題点の所在と科学的処理方法を詳解。

## 企業の行動科学シリーズ（全7巻）

多面にわたる企業の行動科学を7つのテーマに分け、その方面的権威者が入門者のために書いた概論書。

**1 教育訓練** J·A·バス  
伊吹山／田中訳 B6判／五八〇円

**2 人間と機械** A·シャバニス著  
村井／小牧訳 B6判／五八〇円

**3 採用と配置** M.D·ダンネット著  
豊原／北村訳 B6判／八五〇円

**4 労使関係** H·ローセン著  
鶴巻敏夫訳 B6判／六二〇円

**5 組織の心理** A·S·タソネンバウム著  
三隅二不二訳 B6判／五八〇円

**6 消費者行動**  
**7 職業心理**

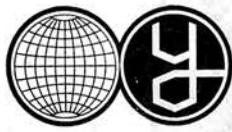
駒沢大学 指定

= 教養の宝庫 =

駒 沢 書 店

世田谷区駒沢3-2-1

電話 (421) 0627番



BOOKS-YUSHODO

株式会社 雄松堂書店

本社 東京都新宿区三栄町29

〒160 電 03 (357) 1411代

関西営業所 京都市東山区五条大橋東二丁目

〒605 電 075 (561) 8429

復刻版

## 教育心理学研究

自第1巻～至第8巻(昭和28年～35年)全7冊

B5判上製 定価(セット)43,000円

割賦販売のご案内

割賦にてお求めできます。ご希望の方は下記へご注文下さい。

定価43,000円 ①4,300円×10回 ②3,000円×9回 16,000円×1回

ニューフィールド図書販売(株)電03(357)1411内線37

# 消費者行動シリーズ

吉田正昭・林田昭治・井関利明編

これまで消費者行動の問題が、社会学・心理学・マーケティング・経済学など、それぞれ個別に研究されていましたのに対し、本シリーズは、現在最も要請されているこれら諸関連科学の総合的な把握の上に立ち、さまざまな視点から多角的に追求しています。



## 消費者行動の理論

A5・260ページ ..... ¥1,400 システム

〈内容〉 大衆消費社会と消費行動研究への行動科学的研究／消費者行動の心理学的要因分析／消費者行動の社会学的研究／消費者行動の地理学的研究／消費者行動とマーケティング

## 消費者行動の調査技法

A5・212ページ ..... ¥1,200

〈内容〉 消費者行動調査のオーバー・ビュー／消費者階層の分類／動機調査における定性的方法と技術／消費者行動の調査デザイン／動機調査における計量的解析／需要予測と数学的モデルの応用

## 消費者行動の分析モデル

A5・198ページ ..... ¥1,100

〈内容〉 消費者意思決定の分析モデル（意思決定へのアプローチ／具体的な意思決定モデル／抽象的意思決定モデル）消費者行動とブランド選択モデル（数学的モデル／一般モデル／ブランド・ロイヤルティ・モデル／決定プロセス・モデルと購買決定）商品評価 消費者行動と市場細分化政策（市場細分化政策の問題点／その目的／市場細分化の規準／欲求と細分化政策／商品高の差の認知／商品の心理的価値と細分化政策／細分化の分類軸）

▼大学一般教育心理学教科書として  
日本大学教授 安藤公平・同教授 妻倉昌太郎・同教授 大村政男・同助教授

## こころの科学

A5判 上製 368頁 定価700円

心理学は「人間性」の研究をめざす科学と「生活体の行動を研究する學問」とかいう新しい定義づけが生じてきます。いずれもがもつともなことといえますが、「行動の科学」であることを強調するあまり、ともすると、「心理学の本来の研究対象でははずの「心」とりわけ「人間」がどこかに埋もれてしまい、「ネズミの心理学など」とひかされるようないふうにめざすものを見出します。本書があえて「こころの科学」の表題を用いたのは、心理学のはんとうにめざすものを示すとしたものであります。

日本大学教授

安藤公平・同教授

妻倉昌太郎・同教授

大村政男・同助教授

山岡淳著

## 人間生活と心理学

A5判 上製 356頁 定価600円

定価190円

本書ははじめて心理学を学ぶ人のためのテキストとして編まれたものであるが、心理学と人間生活との結びつきを中心にして叙述をすすめてみた心理学の入門書である。

日本大学教授

安藤公平・同教授

大村政男・同助教授

花沢成一著

## 心理検査の理論と実際

A5判 上製 356頁 定価1300円

定価190円

現行の心理テストに対する基礎的な知識を求める人々の要望に応え得るものと確信する。

近刊

M・ドイツチ、R・M・クラウス共著

日本大学教授・文学博士

妻倉昌太郎監訳

## 社会心理学の諸理論

Theories in Social Psychology

A5判

約350頁 予価1000円

東京都千代田区神田駿河台3丁目7番地

駿河台出版社

振替・東京56669番電話(291)1676代

伝 統

# 心理検査の日文

信 賴

EITS 知能検査

田研式知能検査

EITS 学力検査

人 格 檢 査

適 性 檢 査

特 殊 檢 査

個別式知能検査

WPPSI 知能診断検査

WISC 知能診断検査

WAIS 成人知能診断検査

田中びねー式知能検査

投影法テストの代表

スイス直輸入

ロールシャッハテスト図版

ベック方式とクロッパー方式

ロールシャッハテスト基本的採点法

新刊

子どものロールシャッハ反応

心理検査総合出版・教育図書雑誌出版

東京都台東区下谷2-3-4

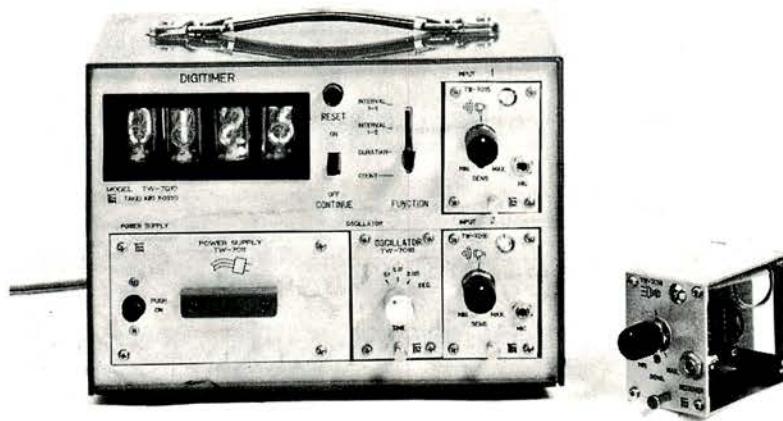
日本文化科学社

神戸市生田区下山手通5-9

|   |  |   |  |   |  |
|---|--|---|--|---|--|
| <p>人間形成の標準読み物目録</p> <p>日本読書学会編</p> <p>小・中学校用</p> <p>A5<br/>¥800</p> | <p>幼児教育を正しく理解し、実践していくための書</p> <p>中央幼児教育研究会編</p> <p>新版 幼児の心理学</p> <p>教師養成研究会 幼児教育叢書2</p> <p>A5<br/>¥350</p> | <p>好評の大学、短期大学の教育心理テキスト</p> <p>教師養成研究会 教育心理学部会編</p> <p>新編 幼児心理学</p> <p>中央幼児教育研究会編</p> <p>A5<br/>¥400</p> | <p>教師養成研究会 教育心理学部会編</p> <p>新編 青年心理学</p> <p>教師養成研究会 教育心理学部会編</p> <p>A5<br/>¥380</p> | <p>教師養成研究会 教育心理学部会編</p> <p>新編 教育心理学 定本版</p> <p>教師養成研究会 教育心理学部会編</p> <p>A5<br/>¥1200</p> | <p>教師養成研究会 教育心理学部会編</p> <p>新編 教育心理学</p> <p>教師養成研究会 教育心理学部会編</p> <p>A5<br/>¥380</p> |
|---|--|---|--|---|--|

# 新製品 《電子式測時計》

# デジタイマー TW-7010



## 特長

- \* 時間の測定ならなんでも出来ます。
- \* 電子計算機に使用している IC (集積回路) をふんだんにつかいましたので小型で、しかも故障がありません。
- \* 心理学、体育学、その他の時間測定専用に設計しましたので、扱い方はストップウォッチ同様簡単です。
- \* プラグインシステムにしましたので一台の機械で時間に関する色々な測定ができます。

## 仕様

|        |                                 |     |  |
|--------|---------------------------------|-----|--|
| 表示桁数   | 3桁, 4桁                          | 寸法  | $200W \times 140H \times 110D\text{ mm}$ |
| 測定時間範囲 | 0.001秒～999.9秒(4桁),<br>99.9秒(3桁) | 重量  | 約2.5kg                                   |
| 測定時間誤差 | ±0.001sec以下                     | 電源  | 50/60Hz 100V 約20VA                       |
| 入力     | 2入力最大10V 最小1.5V<br>以上           | 又は  |  |
|        |                                 | 小数点 | 自動表示                                     |

竹井機器工業株式會社

|       |                      |                                       |
|-------|----------------------|---------------------------------------|
| 本社    | 東京都品川区旗の台1丁目6番18号    | 電話 03 (786) 4111 ~ 4番テレックス 246-6196   |
| 大阪支店  | 大阪市東区道修町1-11(門川ビル内)  | 電話 06 (231) 5531-1741番テレックス 522-5035  |
| 新潟工場  | 新潟県中蒲原郡小須戸町矢代田       | 電話 025038 4131 ~ 4番テレックス 3173-805     |
| 東北出張所 | 宮城県仙台市小田原弓の町5番地      | 電話 0222(91)2765(91)6364番テレックス 852-470 |
| 九州出張所 | 福岡市博多駅東1丁目1(はかた近代ビル) | 電話 092 (41)1430(41)3236番テレックス 722-857 |

## ■ 知性を創造する 必読書!

### 臨床場面における ロールシャッハ法

河合隼雄著 1,300円  
序論／理論的背景／解釈法の検討／鑑別診断／  
心理療法の予後と効果判定／事例研究／現象学的  
接近法

### 心理療法入門

R. A. ハーバー著 伊東博／大島滋子訳 900円  
現代社会におけるサイコセラピー／フロイドの  
精神分析／精神分析における分派／クライエント  
中心療法／心理療法の諸体系／概観と展望

### 人間の行動(上)

スニッギング／コームズ著 友田不二男他訳 2,700円  
知覚的な照合枠／知覚の媒介物／目標、価値お  
よびテクニック／現象の自己の発展／学習、忘却  
および問題解決／諸能力、情動および感情の性質

### 人間の行動(下)

スニッギング／コームズ著 友田不二男他訳 2,400円  
適切なバーソナリティ／不適切なバーソナリティ  
／知覚的なアプローチの応用／個人とその社会  
／処遇への個人的なアプローチ／意味の探索

### T-グループの実際 一人間と組織の変革(Ⅰ)

シャイン／ベニス著 伊東／古屋／浅野訳 2,400円  
ラボラトリ－・トレーニングとは何か／ラボラ  
トリ－・トレーニングの利用法／敏感性訓練と成  
長動機／敏感性訓練と社会開発 他

### T-グループの理論 一人間の組織と変革(Ⅱ)

シャイン／ベニス著 伊東／古屋／浅野訳 1,800円  
ラボラトリ－・トレーニングの効果の研究(個  
人の行動におけるラボラトリ－教育の効果)／  
ラボラトリ－・トレーニングによる学習の理論

### 創造的知性への教育

アッシャー他著 石井完一郎訳 3,000円  
生産的思考における知的因子／知能の発達に対  
する経験の影響／成就への動機づけ／創造性とバ  
ーソナリティの相関／成人における独創性の評価

### 合同家族療法

ヴァージニア・サティア著 鈴木浩二訳 1,800円  
家族治療とは何か／現代の家族に影響を及ぼし  
ているストレス／治療の概念／子供たちを家族治  
療に含めるには／治療者の役割と技術 他

### 家族精神医学の理論と実際—理論編—

J. G. ハウエルズ著 大原健士郎他訳 5,300円  
家族精神医学／家族精神医学の実地臨床／個人  
的側面／人間関係的側面／集団的特性の側面／物  
質的状況の側面／地域社会との相互作用の側面

### 家族精神医学の理論と実際—実際編—

J. G. ハウエルズ著 大原健士郎他訳 4,000円  
家族精神医学における診療組織／症例検討／臨  
床症候群／治療(家族精神療法、家庭での家族療  
法、家族の多面的衝撃精神療法、ペクトル療法)

### 家族治療の基礎理論

N. W. アッカーマン著 岩井祐彦訳 1,800円  
ケースワーク治療における家族の概念／家族診  
断と家族治療における精神医学的諸発展に関する  
考察／家族診断と治療研究に対する挑戦 他

### 家族関係の理論と診断 一家族生活の 精神力学(上)

N. W. アッカーマン著 小此木啓吾／石原潔訳 1,500円  
家族の精神力学／フロイドとバーソナリティ概  
念の変化／社会的役割とバーソナリティ／家族診  
断の臨床／専門的な家族診断の方法 他

### 家族関係の病理と治療 一家族生活の 精神力学(下)

N. W. アッカーマン著 小此木啓吾／石原潔訳 2,000円  
臨床編(夫婦関係の障害、児童期の障害、心身  
症と家族障害)／治療編(現代の精神療法の技法  
他)／展望編(家族関係の諸問題 他)

### 自律訓練法の指導実際

クラインゾルゲ／クルンビース著 池見／佐々木訳・著 2,000円  
心理療法における自律訓練法の意義／自律訓練  
法の起源／導入の実際／訓練姿勢／訓練の実際／  
指導者の発声技法 他 (レコード付)



## 児童臨床心理学講座 全9巻

内山喜久雄・辰見敏夫・菅野重道編 A5判函入美装本

### □理論・診断・治療・臨床の諸問題の解決

|    |             |         |    |           |
|----|-------------|---------|----|-----------|
| 1巻 | 児童臨床心理学の諸理論 | 既刊2400円 | 7巻 | 言語障害児     |
| 2巻 | 児童の心理診断     | " 1800円 | 8巻 | 知的・身体的障害児 |
| 3巻 | 児童の心理治療     | " 2600円 | 9巻 | 精神障害児     |
| 4巻 | 乳幼児期の臨床心理   |         |    |           |
| 5巻 | 児童期の臨床心理    |         |    |           |
| 6巻 | 青年期の臨床心理    |         |    |           |

各巻2000円前後  
内容見本進呈

岩崎学術出版社

東京都文京区小日向1-4-8  
電(947)1631代表 振替東京 58495 四 112